

The background of the entire page is a close-up photograph of a bronze mirror. The mirror's surface is highly textured, showing a complex pattern of overlapping, scale-like or leaf-like shapes. The color palette is rich and varied, featuring shades of brown, gold, and a prominent, iridescent blue-green patina that highlights the intricate details of the design. The lighting creates deep shadows and bright highlights, emphasizing the three-dimensional quality of the embossed or cast patterns.

平成 28 年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書

鳥羽離宮金剛心院跡出土品

2016

京都市文化市民局

平成 28 年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
鳥羽離宮金剛心院跡出土品



第102次調査 池14 (西から)



第79次調査全景（北から）



第79次調査 建物1 堀込地業（北東から）

ご挨拶

京都市では、市域から出土した膨大な考古資料の中から歴史的な意義がきわめて高い出土文化財を市指定有形文化財として指定をすることで、長く未来へ残してゆく取り組みを続けてきました。公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は京都市からこの指定に先立つ準備業務の委託を受け、市指定有形文化財の候補となる出土文化財を整理し、その評価を行うとともに、多くの皆様に活用していただけるように目録を刊行して参りました。平成21年度から始まった本事業は8年目を迎え、全国から注目の集まる資料が整い始めているところです。

平成28年度の指定候補出土文化財は「鳥羽離宮金剛心院跡出土品」です。鳥羽離宮は、白河上皇による院政の開始と時期を同じくして造営が開始され、鳥羽院政期を通じて造営が継続された壮大な院の御所です。鳥羽離宮の遺跡は伏見区竹田から中島地区にかけて広範囲に広がり、これまでに150回を超える発掘調査がなされてきました。なかでも、発掘調査によりその実態が最も明らかになっている施設が、鳥羽上皇が晩年に造営した御所「田中殿」の一部を構成する「金剛心院」です。

金剛心院は御所に付随する寺院で、釈迦堂と九体阿弥陀堂の二堂が並び、前面には苑池が広がる様子が発掘調査で明らかになっています。ここから出土した遺物は、寺院の屋根を飾っていた瓦、天蓋や須弥壇を飾っていた金具や玉、仏像周囲の荘嚴の一部と考えられる木造彫刻の残欠、卒塔婆など供養に用いられた品々などで構成されています。いずれも失われた鳥羽離宮の姿を彷彿とさせ、院政期文化の精華をうかがい知ることができる貴重な文化財といえるでしょう。

ここに、その指定候補文化財の写真、実測図、一覧表を公刊し、皆様にご紹介いたします。本書が広く活用され、京都の歴史研究の深化に資することができれば幸いです。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所長 井上 満郎

例 言

- 1 本書は、平成 28 年度に公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が京都市から委託を受けて実施した、埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務の報告書である。
- 2 選定の対象とした出土遺物は、京都市内で実施された埋蔵文化財の発掘調査などで出土したものうち、京都市が保管しているものである。
- 3 平成 28 年度の指定名称は「鳥羽離宮金剛心院跡出土品」である。
- 4 本書使用の地図は、主として京都市発行「都市計画基本図（縮尺 1:2500）」を参考に、必要に応じて加筆した。
- 5 本書の遺物番号は特にことわらない限り指定番号である。
- 6 指定にあたっての諮問委員は以下の先生方に依頼した（五十音順／敬称略）。
井上満郎、上原真人、瀧浪貞子、和田晴吾
- 7 本件業務は上村和直と平尾政幸が担当し、津々池惣一、津田京美、大立目一がそれを助けた。
- 8 本書の編集作業は主に平尾政幸が行い、大立目一、内田好昭がそれを助けた。
- 9 本書の執筆分担は以下のとおりである。なお、附編の執筆者は各章文頭に記している。
本編 第 1 章 上村和直
本編 第 2 章 平尾政幸
本編 第 3 章 平尾政幸
- 10 本書の巻頭図版に使用した写真は牛嶋茂氏と村井伸也が、目録に使用した写真は平尾政幸が撮影した。
- 11 木製品の樹種同定は関晃史、金属製品・ガラス製品の蛍光 X 線分析及び漆製品の塗膜断面観察と蛍光 X 線分析は北野信彦氏（龍谷大学）が実施した。
- 12 指定準備作業と本書の作成には、下記の方々のご協力を得た（五十音順／敬称略）。
井上一稔、井上満郎、上原真人、北野信彦、久保智康、狭川真一、関根俊一、瀧浪貞子、根立研介、和田晴吾

目 次

巻頭図版

本編	1
第1章 鳥羽離宮金剛心院跡の概要	3
1 鳥羽離宮の位置と環境	3
2 鳥羽離宮の沿革	3
3 金剛心院の概要	5
第2章 発掘調査と主要遺構の概要	9
第3章 指定候補出土遺物の概要	12
文献目録	15
図版	19
一覧表	57
附編	67
第1章 鳥羽離宮金剛心院跡出土瓦類の検討	69
第2章 鳥羽離宮金剛心院跡出土資料の科学調査	102
第3章 鳥羽離宮金剛心院跡出土の木製品について	134

本 編



第1章 鳥羽離宮金剛心院跡の概要

2 鳥羽離宮の沿革

1 鳥羽離宮の位置と環境

位置 鳥羽離宮は京都洛南地域の南側、鴨川と桂川の合流点北側に位置し、北から南に緩やかに下がる沖積平野に立地する。当地域は、嵯峨野・御室・白河・法住寺殿などと並び、平安京郊外の景勝の地であり、平安時代中期には藤原時平の「城南水閣」や、藤原季綱の「鳥羽山荘」などの別業が営まれたことが知られる。

範囲 鳥羽離宮の範囲は、発掘調査及び試掘・立会調査などによる遺構検出地点や遺物包含層の分布状況、さらに史料に記載された御所・寺院の位置などからある程度推測できる。『栄華物語』には「十余丁を籠めて造らせ給う」、『扶桑略記』応徳3年(1086)10月20日条には「凡百余町焉」とあり、かなり規模が大きいことがわかる。地域内には広大な池が造営されており、『扶桑略記』に「池廣南北八町、東西六町、水深八尺有餘、殆九重之淵」〔応徳3年(1086)10月20日条〕とある。

交通と地割 鳥羽離宮西側には「鳥羽作路」が位置した。『兵範記』に「自朱雀大路南行、至于作路令参鳥羽殿給」〔久寿2年(1155)2月6日条〕とあり、平安京朱雀大路延長である作路の南端部に位置していた。また、南部には津の存在が推定でき、当地域は平安京と直結した場所であると共に、平安京から西国や大和への交通の要衝と捉えられる。

当地域には、南北幹線街路である「鳥羽作路」の他に、東西道路である「北大路」・「中大路」・「田中殿南大路」や「金剛心院南大路」などの存在が史料から知ることができる。地域内には、これらの直交する道路と方形の街区で構成される方格地割が想定でき、地割に沿って御所や寺院が配置された状況が想定できる。

創建期 『扶桑略記』応徳3年(1086)10月20日条に「公家近来九条以南鳥羽山荘新建後院」とあり、藤原季綱が「鳥羽山荘」を白河上皇に進上し、後院として南殿を造営したことから、鳥羽殿の造営が始まる。

造営の最初の段階で、作路に沿って地域南部に南殿が造営される。その約1年後、寛治2年(1088)に、同様に作路に沿って北殿が造営される。南殿造営の15年後の康和3年(1101)には、付属寺院である証金剛院が造られる。また、それに並行して、寛治4年(1090)頃には、南殿・北殿の東側に馬場殿が造営される。

展開期 寛治6年(1092)に、地域東側に新御所として泉殿が造営され、院御所などの施設が東側に展開する。

天仁元年(1108)には、白河上皇が東殿内の陵墓予定地を視察に訪れ、その後、東殿内に相次いで三つの塔が造営された。天承元年(1131)、その2年前に崩御した白河上皇の遺骨を三重塔(成菩提院陵)に納め、同年、泉殿内に白河上皇が死去した三条室町第西対を移築し、阿弥陀堂(成菩提院)とする。

それと並行し、北殿に勝光明院が造営される。特に阿弥陀堂は、宇治平等院鳳凰堂を模して造営されたことが知られる。

同じ頃、東殿内に安楽寿院が造営され、三重塔や御堂が次々と建てられる。保元元年(1156)に、鳥羽上皇が死去し、安楽寿院内の三重塔(本御塔)に納骨された。

仁平2年(1152)に、地域北側に田中棧敷殿が造営される。翌年には、田中殿に付属して金剛心院が造営される。

衰退期 応保元年(1161)に北殿が焼亡し、仁安元年(1166)に再建される。平安時代後期末葉から鎌倉時代にかけて、南殿・北殿・東殿で何度かの修造を経て、様々な法会が営まれる。

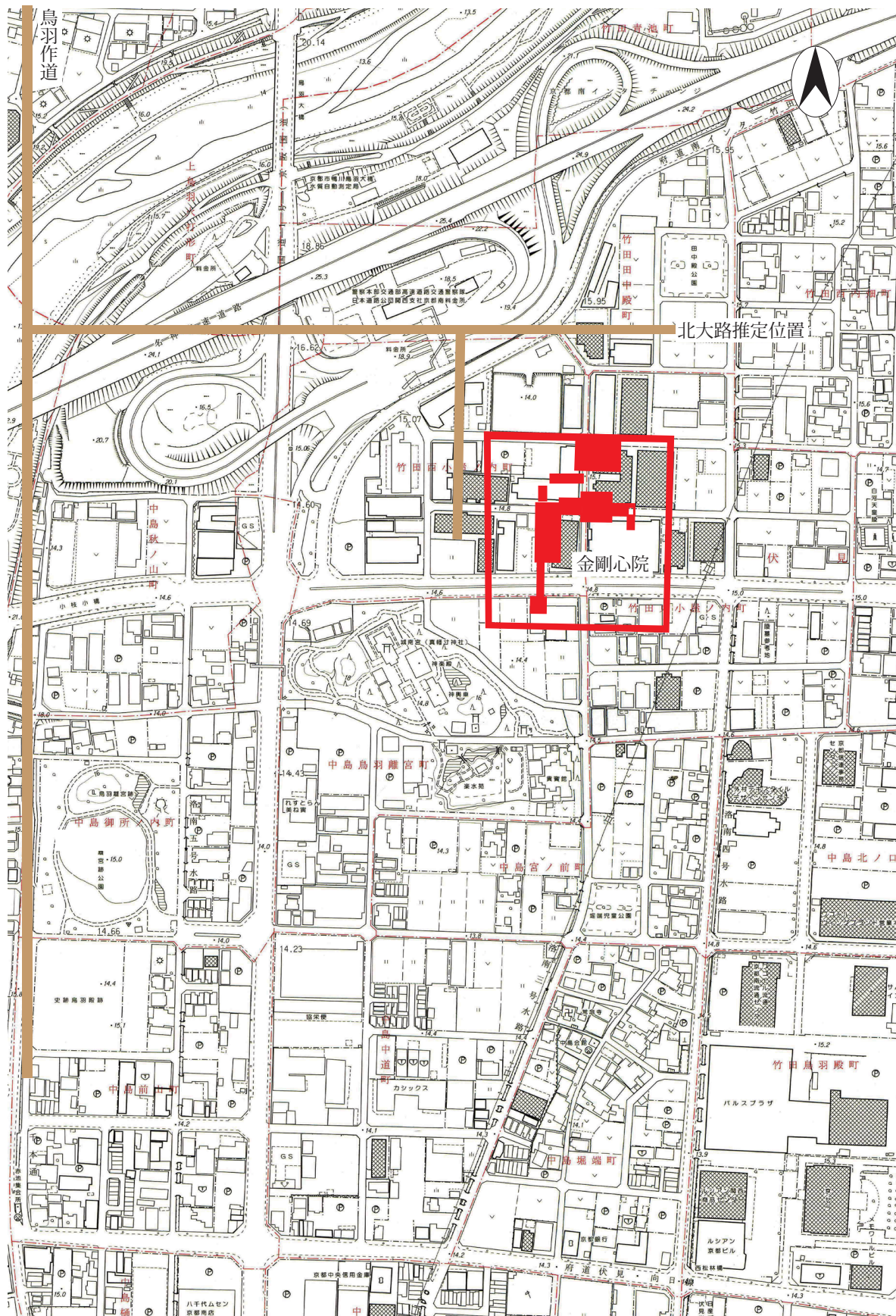


図1 遺跡位置図

鎌倉時代以降、関係史料も少なくなり、安楽寿院地域を除き衰退する。室町時代以降、『康富記』応永30年(1423)10月15日条に、「昨日今日両日鳥羽辺大石二自仙洞被召之間、畠山殿手者共引之云々」とあり、仙洞御所に庭石が運び出される状況となる。

3 金剛心院の概要

沿革 仁平2年(1152)6月4日に、鳥羽上皇により田中棧敷殿の造営が始まる。翌、仁平3年(1153)には、田中殿に付属して新御堂の造営が始まり、4月20日に木作り始め、10月18日に立柱・上棟が行われた〔『兵範記』〕。約1年後、仁平4年(1154)8月9日には、落慶供養が行われる〔『供養御願文』・『兵範記』〕。この時点で主要建物はほぼ完成する。

供養から5年後、保元2年(1157)9月2日に、寺域内に新御堂が供養される。

その後、史料は暫く見られないが、弘長2年(1262)2月14日に、「勝光明院金剛心院等修二月」〔『続史愚抄』〕とあり、この時点まで寺院として機能していたと考えられる。

これ以降、金剛心院に関する文献史料は全く見られなくなり、衰退したと考えられる。

位置と規模 『兵範記』仁平3年(1153)4月20日条に「馬場殿北樹北、田中南北六十丈、東西五十丈點定」、10月18日条に「件所、馬場殿北田中新御所南大路南、往古田中也」とある。このことから、金剛心院は馬場殿の北で田中殿の南に位置し、範囲は、南北六十丈、東西五十丈であることがわかる。

また、『明月記』には、「参鳥羽馬場殿、金剛心院前大路」とあり、金剛心院の前に大路が位置したと考えられる〔建仁2年(1202)3月24日条〕。

伽藍配置 寺院内の伽藍配置は、『兵範記』仁平3年(1153)4月20日条に「其所九間四面、阿弥陀堂丈六御仏可被安置一字、(中略)、

三間四面積迦堂一字、丈六並寢殿御所舎屋十余宇」とあり、さらに10月18日条に「点地之中央南面三間四面積迦堂、同間数寢殿、東西渡殿、北面以下字数十五六字、是播磨国所課、入道殿御沙汰、寢殿西頭東西九間四面阿弥陀堂並中門廊、是又備後国所造」とある。これらのことから、中央に積迦堂と寢殿が位置し、寢殿の東西に渡廊が取り付く。また、寢殿の西側には阿弥陀堂並びに中門廊がある。寺域北側には、10数棟の雑舎が存在したことがわかる。

また、仁平4年(1154)8月9日付「供養金剛心院御願文」〔『本朝文集』〕には、建物の詳細が記される。積迦堂は、「瓦葺、二階三間四面堂舎、一字。奉安置皆金色一丈六尺積迦如来像一軀。同八尺普賢文殊二菩薩各一軀。五尺五寸四天王像各一軀。」、阿弥陀堂は、「瓦葺、二階九間四面堂舎、一字。奉安置皆金色一丈六尺阿弥陀如来像九軀。」とあり、各堂安置の諸像を知ることができる。

積迦堂と阿弥陀堂の様子は、『台記』仁平4年(1154)7月30日条に「伝聞、積迦堂並御所華美、法皇叡慮殊甚、又院中上下曰、依阿弥陀堂麓荒、増積迦堂華麗」とあり、積迦堂の方が、阿弥陀堂より華美であったことが知られる。

その後、寺域内に新堂が造営される。『百練抄』保元2年(1157)9月2日条には、「故上皇奉為母儀女御殿、建立一堂可被安置丈六阿弥陀仏像之由、有御遺言、仍美福門院有御沙汰也」とある。

名号 『兵範記』仁平4年(1154)8月7日の条に、「今日習礼以後、於殿上、左府以下御堂名號僉儀、可號金剛心院者、寛信法務存日令撰申云々」とあり、新御堂の名号が金剛心院と決まる。

建物造営 御堂の造営にあたり、仁平3年(1153)4月20日の木作り始めの段階では、「阿弥陀堂(中略)備後守家明朝臣造営」、「積迦堂(中略)、御所舎屋十余宇播磨守顕親朝臣

表 1 - 1 金剛心院関連年表

時期	天皇	上皇	南殿・北殿など 関連事項	田中殿地区	東殿・泉殿など関連事項	関連事項
平安 中期 後葉	1068 後三 条 1072 白河		延喜元年(901) 9.15 頃、 左大臣(藤原時平)が城 南水閣を営む〔日本紀略〕。 その後、藤原季綱の別業 「鳥羽山荘」あり〔扶桑 略記〕。			寛仁3年(1019)法成寺 造営。 承暦元年(1077)12.18 法勝寺造営。
平安 後期 初葉	1086 堀河	1086 白河	応徳3年(1086)10.20 藤原季綱が別業を進上、 後院と為す、都遷の如し〔扶 桑略記〕。 寛治元年(1087)2.5 上皇、鳥羽離宮に御幸 〔中右記〕。 寛治2年(1088)3.5 上皇新御所(北殿)へ渡 御〔後二条師通記〕。 寛治4年(1090)4.15 上皇鳥羽殿馬場へ渡御、 馬場で初めて競馬開催。 〔中右記〕 この頃から鳥羽殿に街区 が推定できる。 承徳2年(1098)4.2 閑院の殿舎を、鳥羽へ移 建〔中右記・百練抄〕。 同年10.26新造北御所 (北殿)へ上皇移徙〔中右記〕。 御堂着工〔中右記〕。		寛治6年(1092)4.15新御所(泉殿)に御 渡〔中右記〕。	寛治3年(1086)白河上 皇院政開始。 寛治年間に六条院を拡張・ 整備。 寛治6年(1092)延久の 荘園整理令。 永長元年(1096)白河上皇、 鳥羽殿以南・伏見以北を 院領とする〔中右記〕。
平安 後期 前葉	1107 鳥羽		康和3年(1101)3.29 白河御堂(証金剛院)供 養〔百練抄・殿曆〕。 長治2年(1105)5.14 鴨川・桂川が洪水、鳥羽 殿に及ぶ〔中右記〕 永久元年(1113)8.21 大風雨で鳥羽殿の築垣崩 れる〔殿曆〕		天仁2年(1109)8.18東殿で御塔(三重塔) 供養〔殿曆〕。 天永2年(1111)3.11御塔(多宝塔)供養〔殿 曆〕。 天永3年(1112)12.19新御塔(多宝塔)供養〔中 右記〕。 大治4年(1129)7.7白河上皇死去、3年後 に御塔に納骨〔長秋記〕。	康和3年(1101)平等院 修造。 康和4年(1102)尊勝寺 造営。 この頃から白河に街区が 推定できる。 この頃から「京都」の名 称が一般化する。 永久6年(1118)白河北 殿新造。同年、三条西殿 (三条鳥丸殿)を院御所 とする。
平安 後期 中葉	1141 近衛	1129 鳥羽	長承2年(1133)4.19 鳥羽御堂(勝光明院)造 営開始。 保延2年(1136)3.23 勝光明院供養。御堂は宇 治平等院を燃す模す〔元 享釈書・中右記〕。		大治5年(1130)12.26泉殿寝殿造営〔長秋記〕。 天承元年(1131)8.25、泉殿内に三条室 町第の西対を移築、阿弥陀堂として供養。成 菩提院と号す〔長秋記〕。 保延3年(1137)10.15東殿御堂供養、安楽 寿院と号す。〔中右記・百練抄〕。 保延5年(1139)2.22東殿三重御塔供養〔百 練抄〕。 久安元年(1145)12.17安楽寿院御所・僧房 造営〔台記〕。 久安3年(1147)8.11安楽寿院の南に新御 堂(九躰阿弥陀堂)供養〔百練抄〕。	大治4年(1129)鳥羽上 皇院政開始。 大治5年(1130)法金剛 院造営。 康治2年(1143)8.19 鳥羽上皇より安楽寿院へ 多数の荘園等寄進〔同年 8.19太政官牒案、安楽 寿院文書〕。
平安 後期 後葉			仁平元年(1151)9.23 城南寺祭で競馬・流鏑馬 行ふ〔本朝世紀〕。	仁平2年(1152) 6.4田中棧敷殿造 営、鳥羽上皇御渡、 8.18新造御所に 御幸〔兵範記〕。 仁平3年(1153) 4.20新御堂(金 剛心院)木作り始 め〔兵範記〕。仁平 4年(1154)7.29 御堂御所(田中殿) 造営〔台記〕、同年 8.9金剛心院供養〔供 養御願文・兵範記〕。		

表1-2 金剛心院関連年表

時期	天皇	上皇	南殿・北殿など 関連事項	田中殿地区	東殿・泉殿など関連事項	関連事項
平安 後期 後葉	1155 後白 河			久寿2年(1155)4.24小御堂(光堂)供養〔台記〕。 保元2年(1157)9.2金剛心院内に新御堂供養〔百練抄〕。	久寿2年(1155)2.27安楽寿院不動明王堂供養〔兵範記〕。 保元元年(1156)7.2鳥羽法皇安楽寿院で死去、御塔に納骨〔兵範記・百練抄〕。	久寿2年(1155)醍醐栢杜堂(大蔵御堂)造営。 保元元年(1156)保元の乱。同年の除目で、備後守藤原家明は重任、翌年の除目で藤原成親は従四位下叙位。 保元2年(1157)信西による大内裏修造。
平安 後期 末葉	1158 二条 1165 六条 1169 高倉 1180 安德 1183 後鳥 羽	1158 後白 河 1180 高倉 1181 後白 河	応保元年(1161)1.7北殿焼亡〔園太曆〕。 仁安元年(1166)11.6北殿再建、同年11.3後白河上皇新造北殿御所に移徙〔兵範記〕。 治承3年(1179)6.28修理の後、後白河上皇南殿に渡御〔玉葉〕、同年11.20～翌年6.14平清盛が後白河法皇を幽閉〔山槐記〕。		永暦元年(1160)12.6鳥羽御塔(近衛陵)造営〔百練抄〕。 長寛元年(1163)11.28東殿美福門院御塔に近衛天皇納骨〔百練抄〕。	保元3年(1158)後白河上皇院政開始。平治元年(1159)平治の乱。 応保元年(1161)東山御所(法住寺殿)造営。3年後に蓮華王院造営。この頃から法住寺殿に街区が推定できる。 治承元年(1177)大火(太郎焼亡)により、大極殿・朝堂院焼失・京中焼亡。 寿永2年(1183)後白河上皇六条殿を御所とする、翌年殿内に長講堂造営。
1185 鎌倉 前葉	1198 土 御門 1210 順徳	1198 後鳥 羽	文治2年(1186)1.7鳥羽御所南殿破損甚だしい〔玉葉〕。 文治3年(1187)2.2修造を諸国に宛てる〔玉葉〕。 建仁元年(1201)4.19南殿・北殿修理成り、後鳥羽上皇御渡御〔百練抄・猪熊閔白記〕。 建永元年(1206)8.3南殿の北側に御所新造し、上皇御移徙〔百練抄〕。			文治元年(1185)守護地頭設置。 文治2年(1186)から頼朝による東寺・内裏等の修造始まる。 建久3年(1192)後白河上皇死去、同年鎌倉幕府成立。 建久9年(1198)後鳥羽上皇、院政開始。
1221 鎌倉 中 後葉 室町 時代	1221 仲恭 後堀 河		安貞元年(1227)3.30鳥羽堤を築き、鳥羽修理〔明月記〕。 仁治3年(1242)7.1勝光明院焼亡〔百練抄〕。 宝治2年(1248)8.29鳥羽殿修造後、後嵯峨上皇御幸〔百練抄〕。 観応3年(1352)頃より、次第に鳥羽殿衰退〔太平記〕。 応永30年(1423)10.15庭石を仙洞御所に運び出す〔康富記〕。	弘長2年(1262)2.14勝光明院・金剛心院で修二月を行う〔続史愚抄〕。	天福元年(1233)3.7法華堂造営〔百練抄〕。 貞治3年(1364)7.25竹田安楽寿院焼亡〔続史愚抄〕。 天文16年(1547)7.6安楽寿院本塔婆及寺家僧房悉く焼亡〔続史愚抄〕。	承久3年(1221)承久の乱。 安貞元年(1227)内裏未完成のまま焼亡、大内裏廃絶。 建長5年(1253)六波羅探題府設置。 建武3年(1336)室町幕府成立。 応仁元年(1467)～文明9年(1477)頃、応仁の乱により鳥羽・竹田地域戦場となる。
1585 桃山 時代					天正13年(1585)11.21秀吉安楽寿院に寺領を寄進〔安楽寿院文書〕。 文禄5年(1596)7.13伏見地震により安楽寿院新御塔(近衛陵三重塔)倒壊〔山稜志〕。	天正13年(1585)豊臣秀閔白となる。
1603 江戸 時代					慶長11年(1606)5豊臣秀頼が新御塔(近衛陵)建立〔棟札〕。この頃から、安楽寿院・北向不動院が再興、多数の塔頭・末寺できる〔安楽寿院文書〕。	慶長8年(1603)江戸幕府成立。



Y = -22.800

Y = -22.700

Y = -22.600

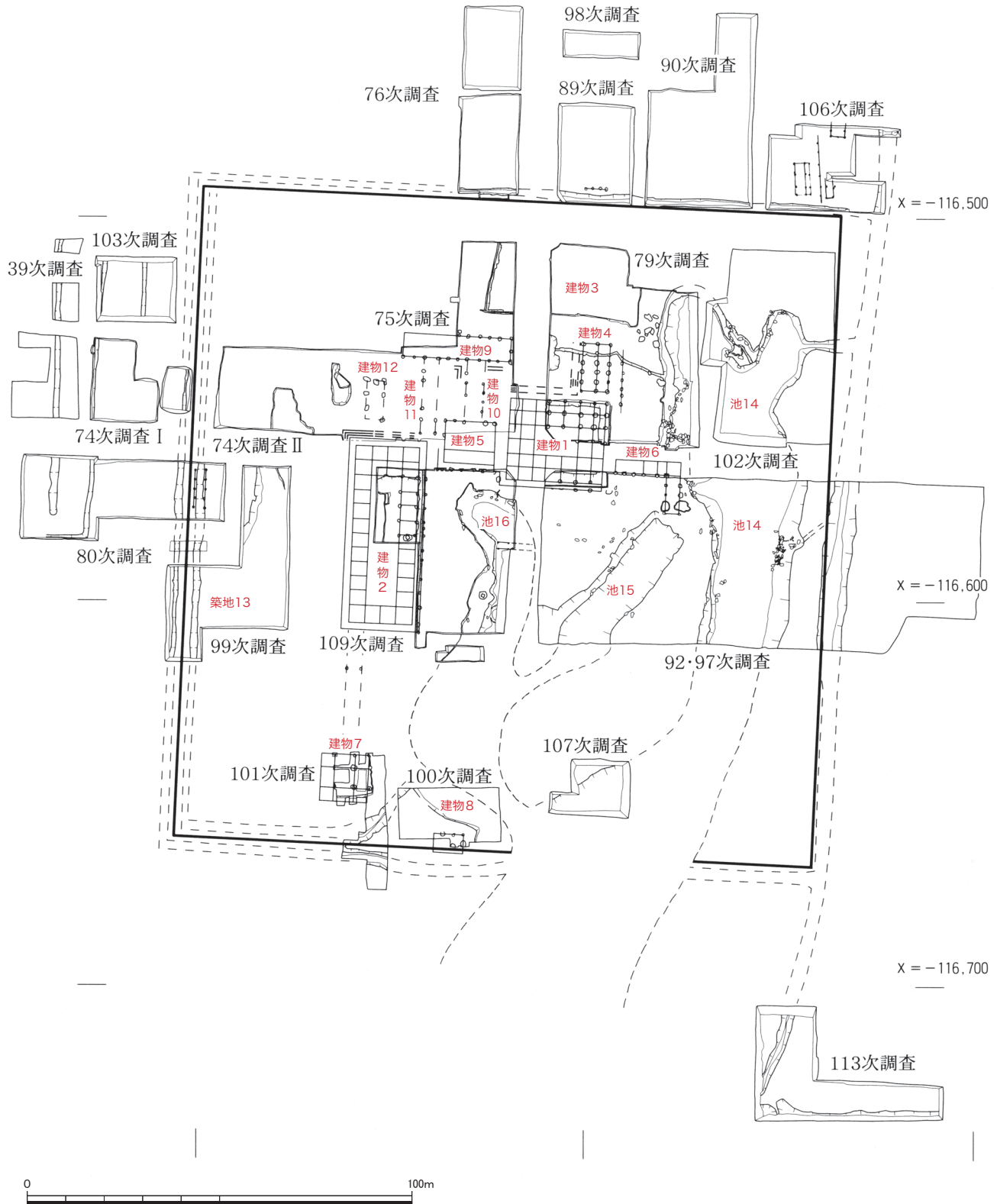


図2 調査位置と主要遺構の配置

奉之」とあり、さらに「備後所課中納言家成卿、播磨所課 殿御沙汰也」とある〔『兵範記』〕。つまり、阿弥陀堂は備後守藤原家明、釈迦堂並びに御所・雑舎は播磨守源頭親が造営を請け負い、備後国の所課は中納言藤原家成が、播磨国の所課は宇治入道殿藤原忠実の沙汰によっていた。

しかし、竣工の後の恩賞・恩典については、『台記』仁平4年(1154)7月29日条に「今日院渡御鳥羽新造御堂御所、御所並釈迦堂、募播磨重任功、禪閣造之、阿弥陀堂讃岐守成親(重服)募還任功造之」、『兵範記』同年8月9日の条には「造國司、播磨重任、讃岐選任 頭親朝臣、成親等賞、追加依請」とある。

つまり、造営国司として恩賞を受けたのは、播磨国守を重任した源頭親と、讃岐国守を選任した藤原成親である。藤原家明と藤原成親は藤原家成の子供で、鳥羽院の寵臣である藤原家成が播磨国と讃岐国の知行国主として差配を行い、実質的に播磨国と讃岐国が造営主体となった〈文献5〉。

第2章 発掘調査と主要遺構の概要

昭和35年(1960)に杉山信三氏によって実施された第1次調査から現在に至るまで、鳥羽離宮跡では、150回を超える発掘調査がなされており、多くの知見が得られてきた。その中でも、金剛心院跡については、昭和57年(1982)から昭和60年(1985)に至るおよそ3年半の期間に伏見区竹田小屋ノ内町、竹田田中殿町、竹田浄菩提院町一帯で集中的に実施された発掘調査において、その全貌が明らかになっている。数多い鳥羽離宮の御所・御堂の中でも、建物の規模と構造が明らかにされ、史料に記載された殿舎との対比が明確になされ、四至や苑池との関係も判明している例は他にない。今回金剛心院跡出土品を文化財指定候補として評価し得る理由の一つが、こうした遺跡の評価の明確さにある。

金剛心院跡を対象とした発掘調査は、第74次調査(1982年2～6月)、第75次調査(1982年4～6月)、第76次調査(1982年6～9月)、第79次調査(1982年9月～1983年3月)、第80次調査(1982年9月～1983年1月)、第89次調査(1983年6～8月)、第90次調査(1983年7～11月)、第92次調査(1983年11月～1984年1月)、第97次調査(1984年4～9月)、第99次調査(1984年6～9月)、第100次調査(1984年8月)、第101次調査(1984年9～10月)、第102次調査(1984年10月～1985年2月)、第103次調査(1984年10月～1985年1月)、第106次調査(1985年2～4月)、第107次調査(1985年2～3月)、第109次調査(1985年3～9月)である。調査はすべて京都市埋蔵文化財研究所が実施した。また、これらの発掘調査成果をまとめた報告書が平成14年(2002)に刊行されている〈文献1〉。以下、金剛心院跡の発掘調査で検出した主要遺構を概説することで、金剛心院跡出土品を理解する上での助けとしたい。なお、この

章の以下の記述は、基本的に報告書〈文献1〉に準じているが、その後の研究の進展を参考にしつつ、新たな知見を加えている箇所がある。

建物1 第75次調査で北西部を、第79次調査で北東部を、第97次調査で南東部を、第109次調査で南西部を検出した。拳大の円礫をぎっしり詰めた掘込地業の上に亀腹状の低い基壇を構築している。礎石はすべて抜き取られていたが、基壇上に残存した花崗岩の風化砂礫により礎石位置が判明した。身舎は梁間2間、桁行3間に復元でき、四面に庇と孫庇をめぐらした上に、南面にはさらに縁が付く。身舎梁間の柱間は4.1m、桁行の柱間は3.6m、庇と孫庇の柱間は3m、縁は2.1m南に出る。基壇北西部では雨落溝の一部を検出した。「供養金剛心院御願文」に「瓦葺、二階三間四面堂舎、一字」、『兵範記』仁平3年10月18日の記事に「中央南面三間四面」とある「釈迦堂」の方向と柱間数が一致し、建物1は釈迦堂と推定できる〈文献9〉。

建物2 第75次調査で北縁の礎石列と雨落溝を、第109次調査で東縁の礎石列の西側に基壇を検出し、基壇上に身舎と庇の礎石据付穴を検出した。建物1と同様の掘込地業の上に低い基壇を構築する。桁行9間、梁間2間の身舎の四面に庇がめぐる形に復元でき、北側にはさらに孫庇が付く。加えて四面に縁が付く。身舎梁間の柱間は4.1m、桁行の北端と南端の柱間は4.1m、他の桁行は3.6m、四面庇の柱間は4.1m、孫庇の柱間は3.1m、縁の出は東辺が2.1m、北辺と南辺が1.8m、西辺は1.5mある。掘込地業の縁に沿って凝灰岩の屑が残る溝がめぐることから、基壇まわりに凝灰岩の切石を用いた化粧がなされていたことが推定できる。「供養金剛心院御願文」に「瓦葺、二階九間四面堂舎、一字」、『兵範記』仁平3年10月18日の記事に「東面九間四面」とある「阿弥陀堂」の方向と柱間数が一致し、建物2は阿弥陀堂と推定できる〈文献9〉。

建物3 第75次調査で西側を、第79次調査で東側を検出した。東西39m、南北18m以上ある基壇跡である。基壇上で礎石や据付穴を検出しなかったが、昭和59年(1984)度の立会調査で2基の礎石を確認した。建物1や建物2のような掘込地業を行わない。建物3を『兵範記』仁平3年10月18日の記事に見える「寢殿」と推定できる〈文献9〉。

建物4 第79次調査で建物1の北東部で検出した。掘込地業はなく、2石の礎石と礎石据付穴が並ぶ。南北柱間5間の南北棟建物で、南北柱間は2.4m、東西柱間は3.6mと3.0mである。西辺に雨落溝の一部が残る。建物1と建物3を繋ぐ建物である。『兵範記』久寿2年2月25日の記事に見える「殿上子午廊」と推定できる〈文献9〉。

建物5 第75次調査で北端部が、第109次調査で南端部を検出した。南端の柱筋に1石の礎石が残るが、他は据付穴のみ検出している。掘込地業はない。中央部が未調査であるため詳細は不明であるが、桁行5間、梁間2間の身舎に南庇と南縁が付く東西棟と推定されている。建物1と建物2の中間に位置する建物である。「小寢殿」あるいは「寢殿」とする意見がある〈文献11・15〉。

建物6 第97次調査で検出した。2石残る礎石と10箇所の抜取穴で構成される建物である。掘込地業はない。建物1の東に東西方向に取り付き、南にL字形に曲がる建物と考えられ、南北棟部分では桁行柱間は2.4m、梁間柱間は3.6mである。残存礎石は、2石ともチャートで、花崗岩を用いる他の礎石と異なっている。「東廊」〈文献15〉、「釣殿廊」〈文献8・11〉などとされている。

建物7 第101次調査で検出した。掘込地業上の低い基壇の上で、2石の礎石と4箇所の抜取穴を検出した。1間×1間の身舎の四面に庇が付く一間四面堂と推定される。建物2の南方にあり、金剛心院の南築地に近接する。『百

鍊抄』保元2年9月20日の記事に見える「新御堂」（阿弥陀堂）に比定する意見がある〈文献10〉。

建物8 第100次調査で検出した。掘込地業の上に2石の礎石が残る。2石の柱間は2.7mである。規模や構造は不明であるが、推定南限築地上に乗ることから、南門に推定されている。

建物9 第75次調査で検出した。18基の据付穴で構成される建物跡である。掘込地業はない。桁行10間、梁間2間の東西棟建物に推定できる。建物3と建物2・5を繋ぐ廊の可能性もある一方、単独の建物の可能性も残されており、定まった意見がない。

建物10・11 いずれも第75次調査で検出した。建物10は、7基2列の南北方向の礎石据付穴で構成される。掘込地業はない。東側の柱列と西側の柱列が対応しないが、南北6間ある。建物11は7基2列の据付穴で構成される建物である。掘込地業はない。南北7間ある。いずれも建物5と建物9を繋ぐ廊であろう。『兵範記』久寿2年2月25日の記事に見える「褻御所」が設けられた「御所西北子午廊」と推定できる〈文献9〉。

建物12 第75次調査で検出した。礎石据付穴で構成される。桁行3間、梁間2間の小規模な南北棟建物である。掘込地業はない。

築地13 第80次調査、第99次調査で検出している。幅2.0～2.5m、深さ0.6～0.9mある掘込地業跡で南北に長く延びる。拳大の円礫と土とを交互に5～6層突き固めたもので、築地の基礎工事と考えられる。金剛心院の西限築地跡である。地業の両側に溝32と溝33が並行して延びる。築地西側の溝33は、築地と並行する道路の東側溝、築地東側の溝32は内溝である。溝33は第74次調査でも検出している。なお、第76次調査と第89次調査で検出している溝31は金剛心院北限施設に関連するもの、第101次調査で検出した溝35は南

限施設に関連するもの、第97次調査と第106次調査で検出した溝34は東限施設に関連するものと想定すると、寺域はおよそ南北171m、東西165mとなる。『兵範記』仁平3年4月20日の記事には「南北六十丈、東西五十丈點定」とある。1尺を約30cm、1丈を約3mと想定すると、10m前後の誤差が生じる。

池14 第79次調査、第97次調査、第102次調査で検出した苑池跡である。建物1の東側にある。東西幅は20～40m、南北約170m分検出した。深さは0.8～1.3mある。北端部に岬状の張り出しを設け景石を配する。西岸には北端に州浜、中位に石組、南に船着場がある。船着場の対岸には滝組がある。

池15 第97次調査で検出した。建物1の南東にある。幅約10mで北東から南西方向に延びる。深さは0.4mある。顕著な景色の造作がなく、あるいは水生植物の植栽などがあつたと推定されている。

池16 第109次調査で検出した苑池跡である。建物1の南西、建物2の東にある。南北45m分、東西15m分検出している。深さは0.8mある。汀には円礫を敷き詰め州浜が作られている。また、4基の杭からなる橋跡が見つかっている。

第3章 指定候補出土遺物の概要

今回発掘調査報告書〈文献1〉に掲載されているものを中心に、総数で324点を指定遺物候補として選択した。その内容は瓦類・土器類・土製品・金属製品・玉類・漆製品・木製品・石製品と多岐にわたる。各種別の内訳は表2に示したとおりである。以下種別の概略を記す。

瓦類 軒丸瓦52点・軒平瓦65点・鬼瓦7点・ヘラ記号のある丸瓦5点・丸瓦8点・平瓦27点の計164点(1～164)を候補とした。これら瓦類については附編に詳述されているためここでは触れない。

土器類 調査区の大部分が遺跡の主要部分に該当しているからか、土器類の出土量はさほど多くない。土師器41点・瓦器9点・灰釉陶器1点の計51点(165～215)を候補とした。土器類は主に池跡と西側築地付近の土坑から出土しているほか、灰釉陶器の壺(181)が西門南側の築地基底部に埋納されていた。壺内には玉類(274～282)が納められており、地鎮遺構と思われる。土器類は概ね12世紀中頃～後半に属する〈文献26〉。

土製品 緑釉を施した土製円塔28点(216～243)を指定候補とした。第97次調査の土坑44などから出土している。法勝寺出土例を大治3年(1128)「白河法皇八幡一切経供養願文」にみえる「圓塔」に比する意見があり、造塔供養のために製作された泥塔・土塔の一種とされている〈文献27～29〉。法勝寺跡、尊勝寺跡など白河地域から出土するものに比べ小型である。

金属製品 須弥壇などの堂内荘厳の一部と思われる飾金具を主体とした金属製品21点(244～264)を指定候補とした。244は鍛造の横方向の八双金具である。魚々子地に蹴彫で鴛鴦文を表す。金具の幅が示す材の大きさから、須弥壇の框の飾金具である。左半を欠損するがここを金具自体の曲がり部分と考えると框の角の金

具の可能性がある。建物2の基壇から出土しており、九体阿弥陀堂の須弥壇を飾っていた可能性が高い〈文献35・38〉。245は鍛造の横方向の八双金具である。魚々子地に宝相華唐草文を表す。金具の幅が狭く、厨子もしくは調度品に取り付けられた飾金具である。246は鍛造無文の八双金具で、L字形に曲がる。厨子や調度品などの角に取り付けられた金具である。建物1の基壇から出土しており、釈迦堂で用いられていた器物のものの可能性が高い。247は鑄造の輪花状金具で、礼盤や机などの四角の入角部に取り付けられた金具の可能性が高い。建物3から出土しており、寝殿で使用された器物のものの可能性が高い。248は鑄造の砲弾形を呈する金具で、鳥の羽の先端部と考えられる。飾金具ではない。249・250・263は金具を切断したものでスクラップである。249は懸仏の鏡面を思わず滑らかな材を切断したもの、250は八角形に切断した材に四弁花の型鑿を試し打ちしたもの、263は風招形に試し切りをしたものである。こうしたスクラップの存在は、金具類の現地製作を窺わせる。251～254は鍛造の唄金具である。唄金具は扉や長押など建築に取り付ける金具であるが、小型であるため厨子などに付くものであろう。255は鍛造で唄金具によく似るが周縁が花卉形となる点で他とは異なる。甲冑の梅檀板や兜の吹き返しに付く金具の可能性があろう。『兵範記』久寿2年2月25日の記事には、「御所西北子午廊」の西に造り加えられた「三間廊」の「中間」の「塗籠」に「甲冑」が納められていたことが記されている。256は鑄造の方形瓔珞である。内陣の梁に他の瓔珞や玉などと組み合わせて垂下させる金具である。四隅に宝相華を配し、中央の蓮華文部分に裏面からガラス玉を入れ、銅板で鋳止めしている。ガラス玉の表面は風化しているが、光を通すと鮮やかな緑色を呈していることがわかる。裏面のガラス玉留め銅板も花卉形に加工されており、裏面(内陣側)からも見られること

が意識されている。四隅に瓔珞同士を繋ぐための小穴、左右の二隅にはさらに一穴ずつ別の瓔珞を垂下させる小穴があり、内一つには銅線が残存する。瓔珞としては大変大きく、大規模な荘嚴を彷彿とさせる。建物6東側の池16から出土しており、釈迦堂の遺品の可能性がある。257は鍛造か鋳造か不明である。釣鐘型の金具2枚を十字に組み合わせたものである。瓔珞のうち最下部に垂下させるものである。建物7近くの溝35から出土しており、建物7を飾った瓔珞である可能性がある。259～261は同様の瓔珞の残欠である。258は鍛造の瓔珞である。およそ半分を失うが、四隅に小穴を有するようである。比較的小振りであるため、小さな天蓋装飾の一部か、あるいは厨子や仏像の垂飾の可能性もある。262は鍛造の鈴、264は鍛造か鋳造か不明の風招であるが、いずれも瓔珞の一部であろう。

玉類 水晶製5点(265・279～282)とガラス製13点(266～278)の計18点ある。水晶製の265は半球形で裏が凹面をなす凹レンズ状の形態で、玉というよりは白毫の可能性はある。調査報告書〈文献1〉では水晶製以外のものに珊瑚・真珠・貝製の製品があったとしたが、今回改めて分析した結果全てガラス製と判明した。

漆製品 仏像の光背や台座の一部と思われる木胎黒漆塗で一部に金箔が残る出土品28点(283～310)を指定候補とした。第109次調査の池16からまとまって出土している。近接する釈迦堂(建物1)や九体阿弥陀堂(建物2)の仏像荘嚴の一部と考えられる。283～285は天蓋の带状垂飾である。木質はほとんど残存しない。宝相華唐草文を透彫りする。286・287は宝相華の葉部分で光背周囲の彫刻であろう。288～290は蓮華座の蓮弁である。それほど大きくなく三尺立像程度の台座のものであろう。291は蓮華座の華盤の一部の可能性があり。292は一材から2枚の蓮弁が彫り出され

表2 平成28年度京都市指定文化財候補一覧

種類	器形	点数	小計
瓦類	軒丸瓦	52	
	軒平瓦	65	
	鬼瓦	7	
	へら記号	5	
	丸瓦	8	
	平瓦	27	164
	土器類	土師器	41
	瓦器	9	
	灰釉陶器	1	51
	小計		
土製品	緑釉円塔	28	28
金属製品	飾金具	5	
	珠文金具	5	
	瓔珞	6	
	風招	1	
	鈴	1	
	その他	3	21
玉類	水晶	5	
	ガラス	13	18
漆製品	垂飾	3	
	光背・台座断片	25	28
木製品	卒塔婆	12	
	物忌札	1	13
石製品	凝灰岩石材	1	1
計		総計	324

ているもので、台座の一部と思われる。293～296・306は光背周縁の縁辺部分の破片である。火焰光の先端のように見えるが、宝相華光や飛天光においても縁端の意匠に大差なく不明である。297は宝相華の茎もしくは蓮の茎である。光背か仏像の持物の一部であろう。298、300～305、307～310も上記と同様の光背・台座断片であろう。299は天蓋もしくは光背の八葉蓮華であろう。木質がほとんど残らない〈文献33〉。『兵範記』仁平4年8月9日の記事から阿弥陀堂の仏師は賢円、釈迦堂の仏師は康助であることがわかる〈文献39・40〉。これらの残欠は、現存する院政期仏像との比較検討が可能な出土品であり、金剛心院の仏像が現存しない現在、きわめて貴重な資料となるものである。

木製品 卒塔婆12点(311～323)・物忌札1点(323)の13点を候補とした。卒塔婆

はいずれも上部を五輪塔の形状に加工しており、311 と 319 には仏像が描かれ、321 には梵字様の墨書がある。また、313 は風輪部、319 は空輪・風輪部を墨で塗りつぶしている。311～315・317・318 には直径約 2～3mm の穴が 1～4 箇所開けられており、317 には木釘が残存している。これらは木製五輪塔婆としては古い段階に属する貴重な資料と言える。

石製品 凝灰岩の切石上面にタガネ状の工具で陰刻された線刻仏（324）である。彫りは粗く、表現は簡略化されている。凝灰岩自体は建物基壇の化粧石として使用されていたものと思われ、線刻が施されたのは建物廃絶後であろう。

文献目録

発掘調査報告書

1. 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2002年。

鳥羽離宮全般及び金剛心院について

2. 村山修一「院政と鳥羽離宮」『史林』第40巻第3号、史学研究会、1957年、56～79頁。
3. 杉山信三「鳥羽殿とその御堂」杉山信三『院家建築の研究』吉川弘文館、1981年、191～228頁。
4. 杉山信三・鈴木久男「院政時代上皇の邸宅跡 - 特に鳥羽離宮田中殿跡について」『月刊文化財』第242号、第一法規出版、1983年、33～40頁。
5. 五味文彦「院政期知行国の変遷と分布」五味文彦『院政期社会の研究』山川出版社、1984年、124～136頁。
6. 井上満郎「院政期における新都市の開発 - 白河と鳥羽をめぐる -」安田元久先生退任記念論集刊行会編『中世日本の諸相』上巻、吉川弘文館、1989年、333～365頁。
7. 清水擴「白河・鳥羽を中心とした院政期寺院の構成と性格」清水擴『平安時代仏教建築史の研究 - 浄土教建築を中心に』中央公論美術出版、1991年、119～161頁。
8. 長宗繁一・鈴木久男「鳥羽殿」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』角川書店、1994年、547～584頁。
9. 川上貢「鳥羽金剛心院の堂舎の規模について」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』前掲文献1、96～98頁。
10. 鈴木久男「鳥羽離宮跡の発掘調査」聖母女学院短期大学伏見学研究会編『伏見の歴史と文化』京・伏見学叢書第1巻、清文堂、2003年、129～154頁。
11. 前田義明「鳥羽離宮跡の発掘調査」高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』平安京・京都研究叢書1、文理閣、2006年、362～382頁。
12. 上島享校訂、泰深「鳳池壯観」上島享編『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』補訂版（課題番号15520410）平成15年度～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（I））研究成果報告書、京都府立大学文学部、2007年、179～219頁。
13. 堀内明博「考古学における安楽寿院を中心とした鳥羽殿の研究史と現状」上島享編『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』前掲文献12、1～36頁。
14. 堀内明博「鳥羽殿の成立と展開 - 考古学の成果から -」上島享編『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』前掲文献12、37～68頁。
15. 鈴木久男『平成19年度文化財講演会報告「鳥羽離宮と法金剛院」別添資料』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2007年。

瓦について

16. 安藤文良「讃岐古瓦図録」香川県文化財保護協会編『文化財協会報』特別号8、香川県文化財保護協会、1967年、82～159頁。
17. 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14号、元興寺文化財研究所、1978年。
18. 今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」今里幾次『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会、年、368～409頁。

19. 鈴木久男「鳥羽離宮の瓦」廣田長三郎編『古瓦図考』ミネルヴァ書房、1989年、229～238頁。
20. 上村和直「後期の瓦」財団法人古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』前掲文献8、657～674頁。
21. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『神戸市西区 神出窯跡群 - 神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 -』兵庫県文化財調査報告第171冊、兵庫県教育委員会、1998年。
22. 鈴木久男「鳥羽離宮跡出土播磨国産瓦の一面」森郁夫先生還暦記念論文集刊行会編『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会、1999年、590～601頁。
23. 上原真人「摂関・院政期の京都における讃岐系軒瓦の動向」隴谷壽・山中章編『平安京とその時代』思文閣出版、2010年、313～347頁。
24. 上原真人「古代の終焉と播磨の瓦生産」発掘された明石の歴史展実行委員会編『古代の明石 II』発掘された明石の歴史展実行委員会、2014年、53～108頁。
25. 香川県埋蔵文化財センター編『丸山窯跡 水道局第3投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会、2016年。

土器について

26. 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』第3号、財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1996年、187～271頁。

土製円塔について

27. 西田直二郎「法勝寺遺址」京都府『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊、1925年、1～38頁。
28. 石田茂作「土塔に就いて」『考古学雑誌』第17巻第6号、1927年、41～62頁。
29. 小森俊寛「円塔小考」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『つちの中の京都』3、ユニプラン、2006年、59～60頁。

仏像及び堂内荘厳について

30. 岡崎譲治「荘厳具」石田茂作監修『新版仏教考古学講座』第5巻、雄山閣、1984年、3～41頁。
31. 武笠朗「安楽寿院阿弥陀如来像について」『佛教芸術』167、1986年、42～61頁。
32. 関根俊一『仏・菩薩と堂内の荘厳』日本の美術281、至文堂、1989年。
33. 伊東史朗「鳥羽離宮跡出土の仏教遺物」財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『鳥羽離宮跡 I 金剛心院跡の調査』前掲文献1、81～87頁。
34. 伊東史朗「近衛天皇陵多宝塔の仏像 阿弥陀如来像 大日如来像について」伊東史朗『平安時代彫刻史の研究』名古屋大学出版会、2000年、161～170頁。
35. 久保智康『飾金具』日本の美術437、至文堂、2002年。
36. 伊東史朗「安楽寿院不動堂本尊（北向不動）と仏師康助 上」『佛教芸術』264、2002年、33～49頁。
37. 伊東史朗「安楽寿院不動堂本尊（北向不動）と仏師康助 下」『佛教芸術』266、2003年、75～91頁。
38. 京都国立博物館編『特別展覧会 金色のかざり—金属工芸にみる日本美—』京都国立博物館、2003年。
39. 根立研介「僧綱仏師と仏像製作の場—法印賢円を中心にして—」根立研介『日本中世の仏師と社会—運慶と慶派・七条仏師を中心に—』塙書房、2006年、87～111頁。
40. 根立研介「慶派仏師の形成—院政期の「興福寺」仏師—」根立研介『日本中世の仏師と社会—運慶と慶派・七条仏師を中心に—』前掲文献39、115～159頁。

41. 根立研介「安楽寿院の仏像」上島享編『鳥羽安楽寿院を中心とした院政期京文化に関する多面的・総合的研究』前掲文献 12、69～97 頁。

卒塔婆について

42. 西本安秀「中世遺跡出土の木製卒塔婆について」関西大学文学部考古学研究室編『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学、1993 年、859～885 頁。
43. 桑原幸則「佐賀県神埼町大字城原に所在する仏教祭祀遺跡—城原三本谷南遺跡の調査—」『日本歴史』1993 年 10 月号、吉川弘文館、1993 年、92～102 頁。
44. 西本安秀「木製卒塔婆の変遷と用途に関する一考察」網干善教先生古稀記念会編『考古学論集』網干善教先生古稀記念会、1998 年、1231～1255 頁。
45. 財団法人石川県埋蔵文化財センター編『中世日本海域の墓標—その出現と展開—』平成 23 年度 環日本海文化交流史調査研究集会 発表要旨・資料集、財団法人石川県埋蔵文化財センター、2011 年。

图 版





1 軒丸瓦



2 軒丸瓦



3 軒丸瓦



3 裏面



4 軒丸瓦



4 裏面



5 軒丸瓦



6 軒丸瓦



7 軒丸瓦



7 裏面



8 軒丸瓦



8 裏面



9 軒丸瓦



10 軒丸瓦



11 軒丸瓦



11 裏面



12 軒丸瓦



12 裏面



13 軒丸瓦



14 軒丸瓦



15 軒丸瓦



16 軒丸瓦



17 軒丸瓦



18 軒丸瓦



19 軒丸瓦



20 軒丸瓦



21 軒丸瓦



22 軒丸瓦



23 軒丸瓦



24 軒丸瓦



25 軒丸瓦



26 軒丸瓦



27 軒丸瓦



28 軒丸瓦



29 軒丸瓦



30 軒丸瓦



31 軒丸瓦



32 軒丸瓦



33 軒丸瓦



34 軒丸瓦



35 軒丸瓦



36 軒丸瓦



38 軒丸瓦



39 軒丸瓦



41 軒丸瓦



46 軒丸瓦



47 軒丸瓦



48 軒丸瓦



49 軒丸瓦



50 軒丸瓦



51 軒丸瓦



52 軒丸瓦



37 軒丸瓦



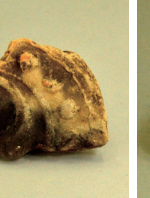
40 軒丸瓦



42 軒丸瓦



43 軒丸瓦



44 軒丸瓦



45 軒丸瓦



53 軒平瓦



54 軒平瓦



55 軒平瓦



56 軒平瓦



57 軒平瓦



58 軒平瓦



59 軒平瓦



60 軒平瓦



61 軒平瓦



62 軒平瓦



63 軒平瓦



64 軒平瓦



65 軒平瓦



66 軒平瓦



67 軒平瓦



68 軒平瓦



69 軒平瓦



70 軒平瓦



71 軒平瓦



72 軒平瓦



73 軒平瓦



74 軒平瓦



75 軒平瓦



76 軒平瓦



77 軒平瓦



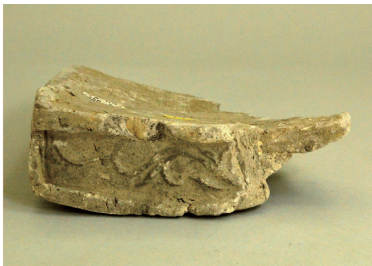
78 軒平瓦



79 軒平瓦



81 軒平瓦



80 軒平瓦



82 軒平瓦



83 軒平瓦



84 軒平瓦



85 軒平瓦



86 軒平瓦



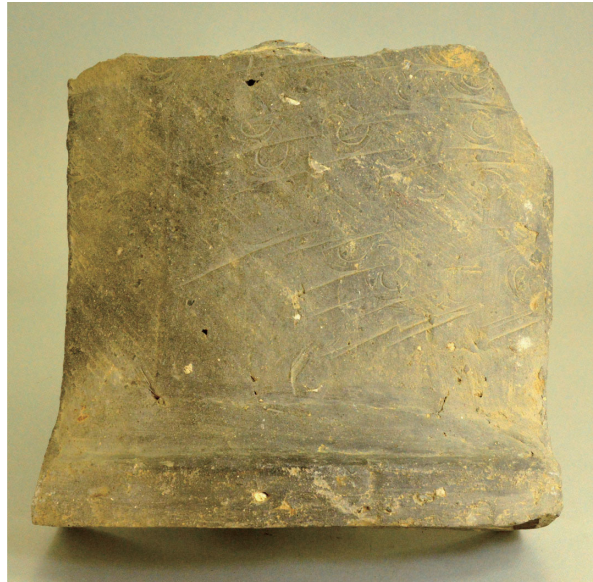
87 軒平瓦



88 軒平瓦



89 軒平瓦



89 凸面



90 軒平瓦



91 軒平瓦



92 軒平瓦



93 軒平瓦



95 軒平瓦



96 軒平瓦



97 軒平瓦



94 軒平瓦



98 軒平瓦



99 軒平瓦



100 軒平瓦



101 軒平瓦



102 軒平瓦



103 軒平瓦



104 軒平瓦



105 軒平瓦



106 軒平瓦



107 軒平瓦



108 軒平瓦



109 軒平瓦



110 軒平瓦



111 軒平瓦



112 軒平瓦



113 軒平瓦



114 軒平瓦



115 軒平瓦



116 軒平瓦



122 鬼瓦



123 鬼瓦



117 軒平瓦



124 鬼瓦



118 鬼瓦



119 鬼瓦



120 鬼瓦



121 鬼瓦



125 ヘラ記号



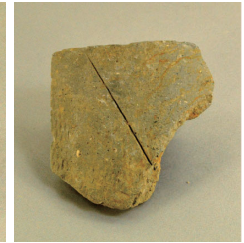
126 ヘラ記号



127 ヘラ記号



128 ヘラ記号



129 ヘラ記号



130 丸瓦



131 丸瓦



132 丸瓦



133 丸瓦



134 丸瓦



135 丸瓦



136 丸瓦



137 丸瓦



138 平瓦



139 平瓦



140 平瓦



141 平瓦



142 平瓦



143 平瓦



144 平瓦



145 平瓦



146 平瓦



147 平瓦



148 平瓦



149 平瓦



150 平瓦



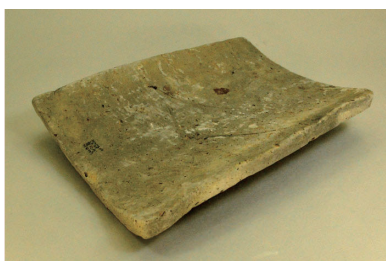
151 平瓦



152 平瓦



153 平瓦



154 平瓦



155 平瓦



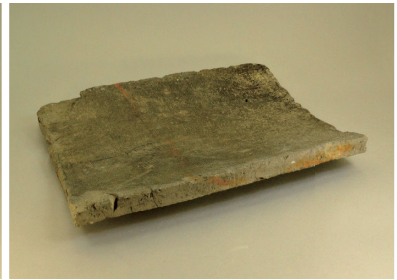
156 平瓦



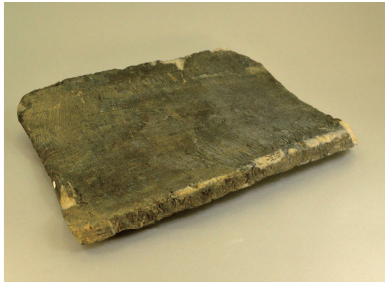
157 平瓦



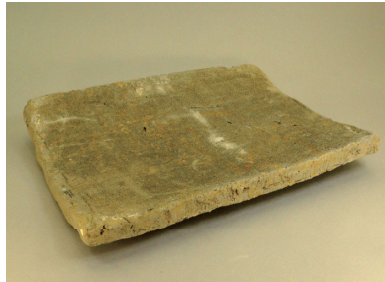
158 平瓦



159 平瓦



160 平瓦



161 平瓦



162 平瓦



163 平瓦



164 平瓦



165 土師器皿



166 土師器皿



167 土師器皿



168 土師器皿



169 土師器皿



170 土師器皿



171 土師器皿



172 土師器皿



173 土師器皿



174 土師器皿



175 土師器皿



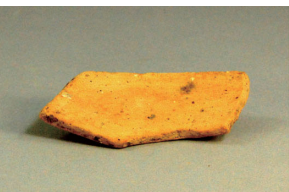
176 土師器皿



177 土師器皿



178 土師器皿



179 土師器皿



180 瓦器椀



181 灰釉陶器壺



182 土師器皿



183 土師器皿



184 土師器皿



185 土師器皿



186 土師器皿



187 土師器皿



188 土師器皿



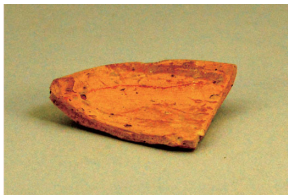
189 土師器皿



190 土師器皿



191 土師器皿



192 土師器皿



193 土師器皿



194 土師器皿



196 土師器皿



195 土師器壺



197 瓦器椀



198 瓦器椀



199 瓦器椀



200 瓦器椀



201 瓦器椀



202 瓦器椀



203 土師器皿

204 土師器皿

205 土師器皿

206 土師器皿



207 土師器皿

208 土師器皿

209 土師器皿

210 土師器皿



211 土師器皿

212 土師器皿

213 土師器皿

214 瓦器皿



215 瓦器皿



216 土製円塔

217 土製円塔

218 土製円塔

219 土製円塔

220 土製円塔



221 土製円塔

222 土製円塔

223 土製円塔

224 土製円塔

225 土製円塔



226 土製円塔

227 土製円塔

228 土製円塔

229 土製円塔

230 土製円塔



231 土製円塔

232 土製円塔

233 土製円塔

234 土製円塔

235 土製円塔



236 土製円塔

237 土製円塔

238 土製円塔

239 土製円塔

240 土製円塔



241 土製円塔

242 土製円塔

243 土製円塔



244 鴛鴦文八双金具



245 宝相華唐草文八双金具



246 八双金具



247 金具



248 金具



249 板状金具



250 板状金具



251 唄金具



252 唄金具



253 唄金具



254 唄金具



255 金具



256 方形瓔珞



257 瓔珞



258 瓔珞



259 瓔珞



260 瓔珞



261 瓔珞



262 鈴



263 風招状



264 風招



265 水晶玉 (白毫)



266 ガラス玉



267 ガラス玉



268 ガラス玉



269 ガラス玉



270 ガラス玉



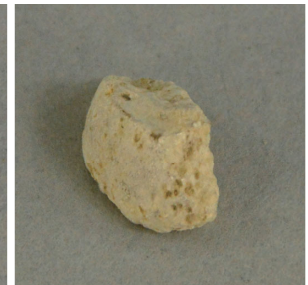
271 ガラス玉



272 ガラス玉



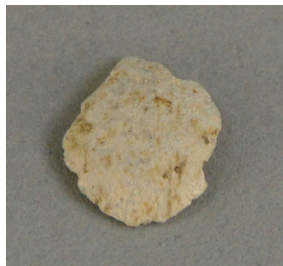
273 ガラス玉



274 ガラス玉



275 ガラス玉



276 ガラス玉



277 ガラス玉



278 ガラス玉



279 水晶玉



280 水晶玉



281 水晶玉



282 水晶玉



283 垂飾

284 垂飾

285 垂飾

291 台座断片



286 光背断片

287 光背断片

288 台座断片

289 台座断片

290 台座断片

292 台座断片



293 光背断片

294 光背断片

295 光背断片

296 光背断片

306 光背断片

297 茎断片

298 光背等断片



299 八葉蓮華



307 光背等断片

302 光背等断片

305 光背等断片



303 光背等断片

304 光背等断片

301 光背等断片



300 光背等断片

308 光背等断片

309 光背等断片

310 光背等断片



311 卒塔婆



312 卒塔婆



314 卒塔婆



316 卒塔婆



315 卒塔婆



313 卒塔婆



318 卒塔婆



317 卒塔婆



319 卒塔婆



320 卒塔婆



321 卒塔婆



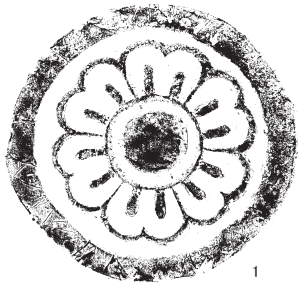
323 物忌札



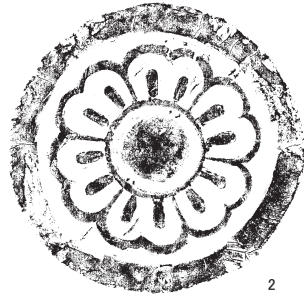
322 卒塔婆



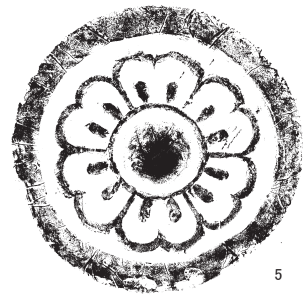
324 線刻仏 (建物基壇化粧石)



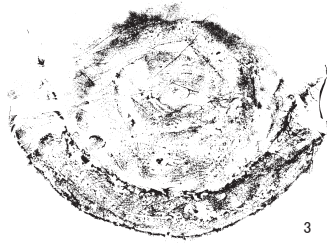
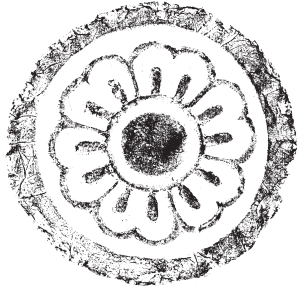
1



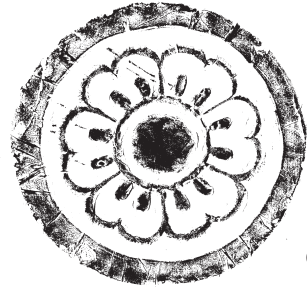
2



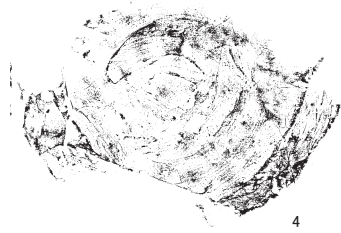
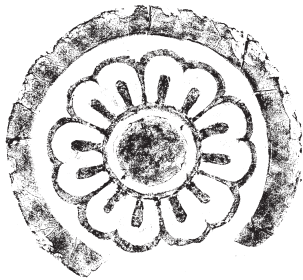
5



3



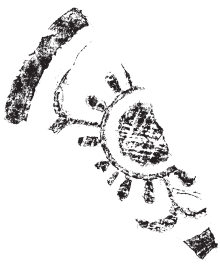
6



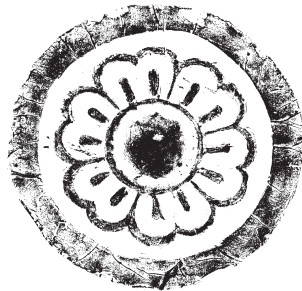
4



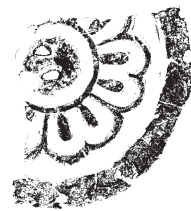
7



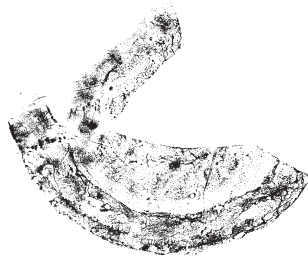
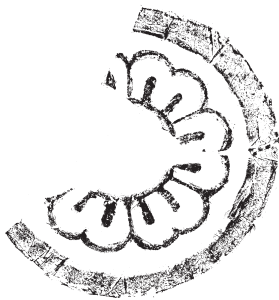
8



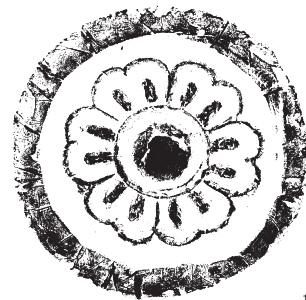
9



10

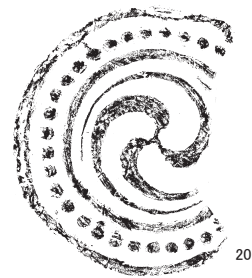
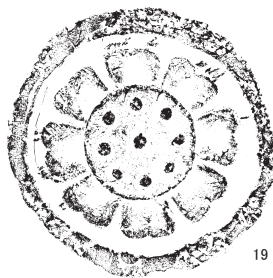
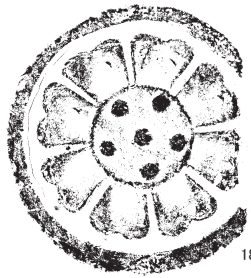
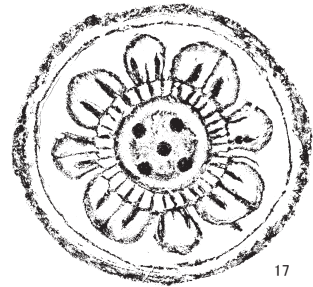
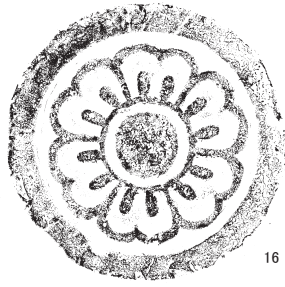
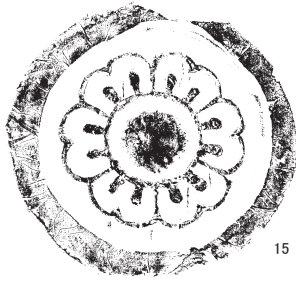
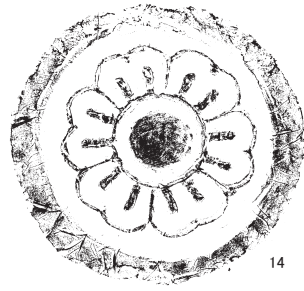
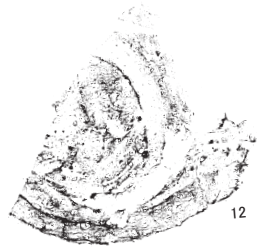
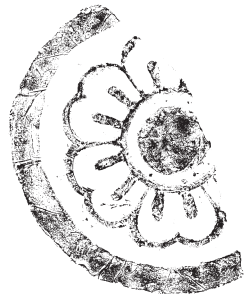


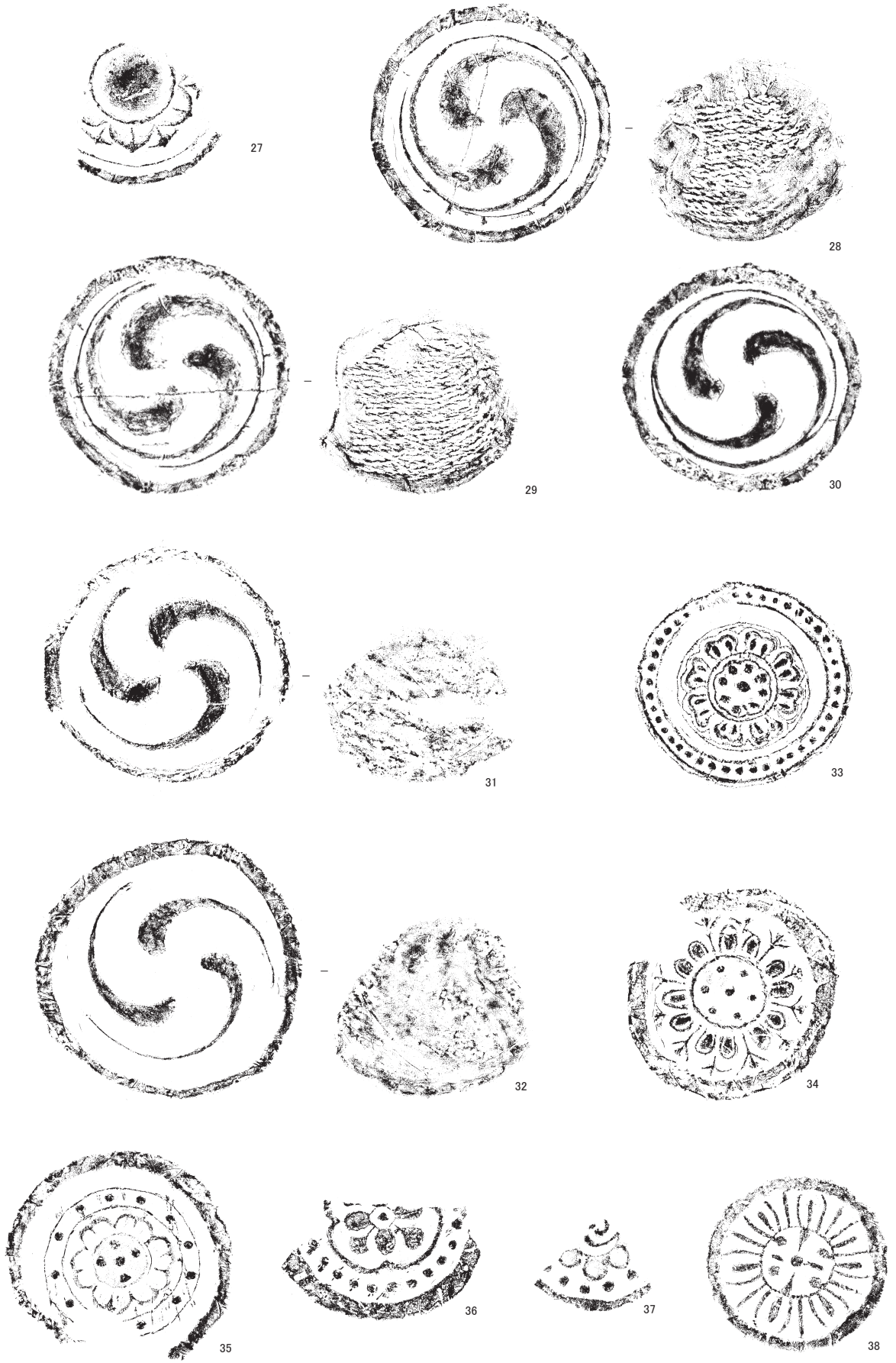
11

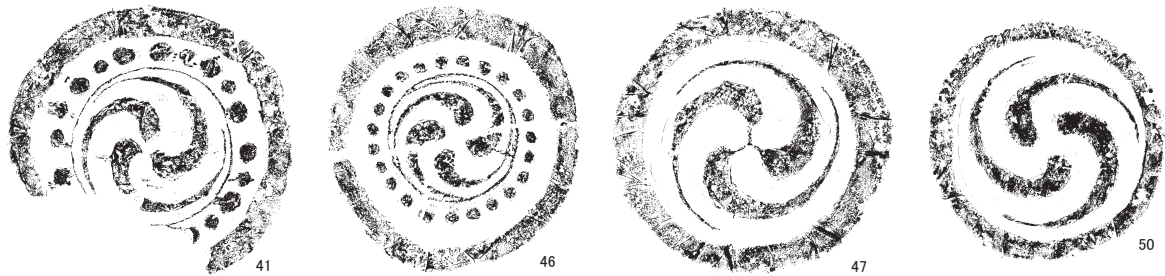
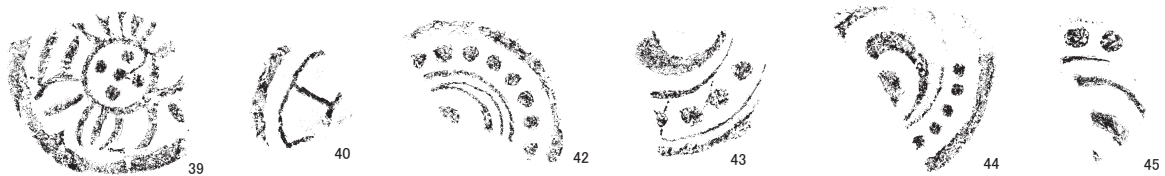


13











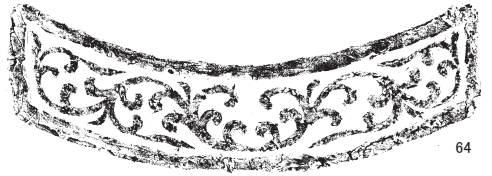
61



62



63



64



66



65



67



68



69



70



71



72





73



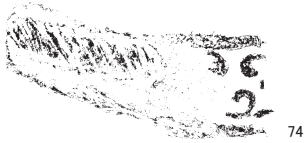
75



76



77



74



78



79



80



81



82



83



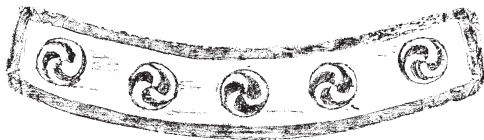
84



85



86



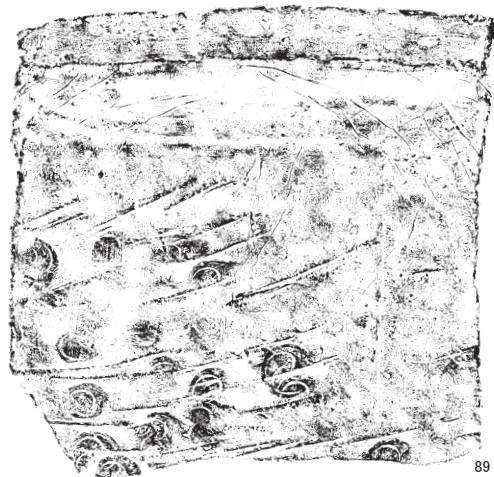
87



1

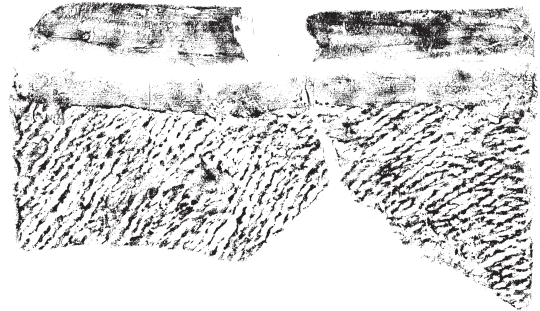
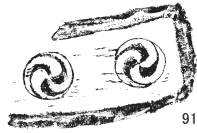
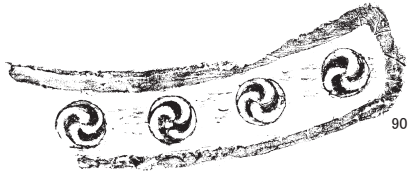


88



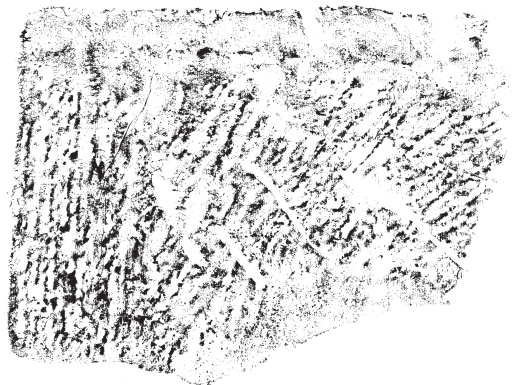
89





94

96



95

97





98



99



100



101



105



103



102



104



106



107



108



109



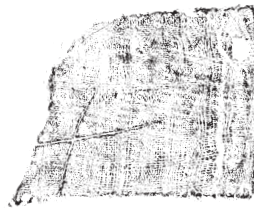
110



111



112



113



114



115

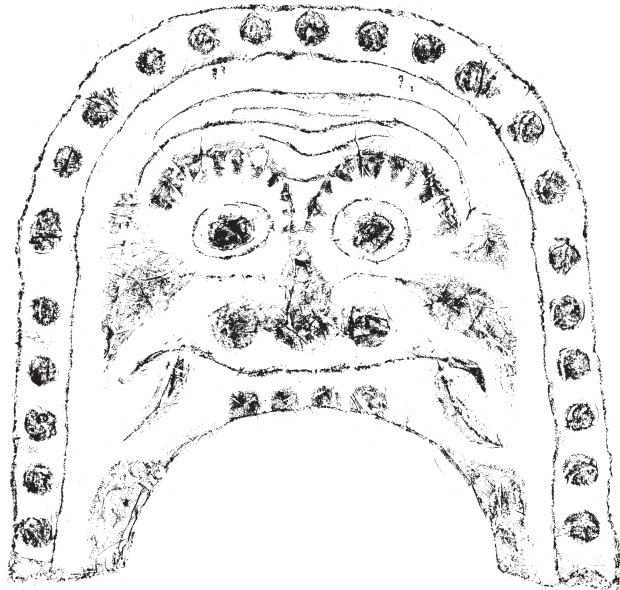


116

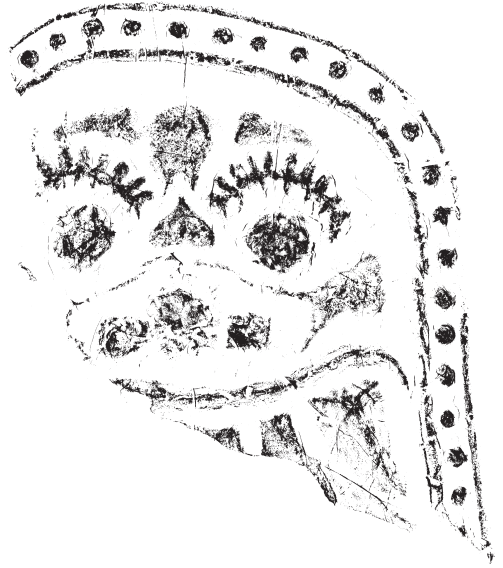


117

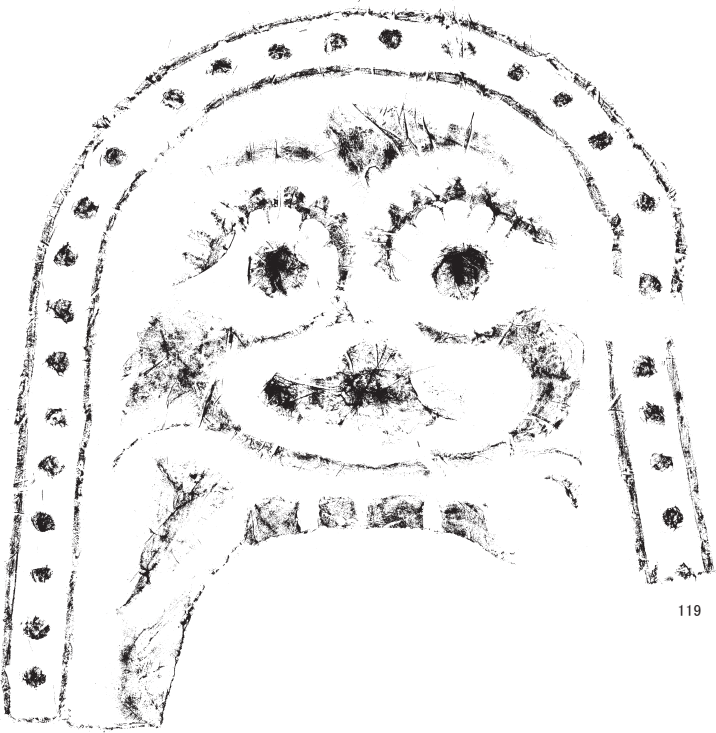




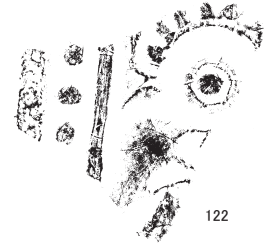
118



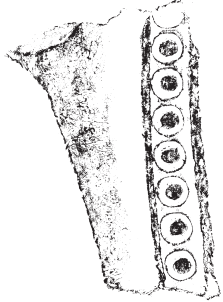
121



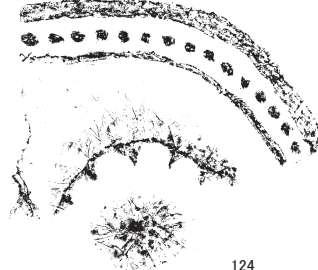
119



122

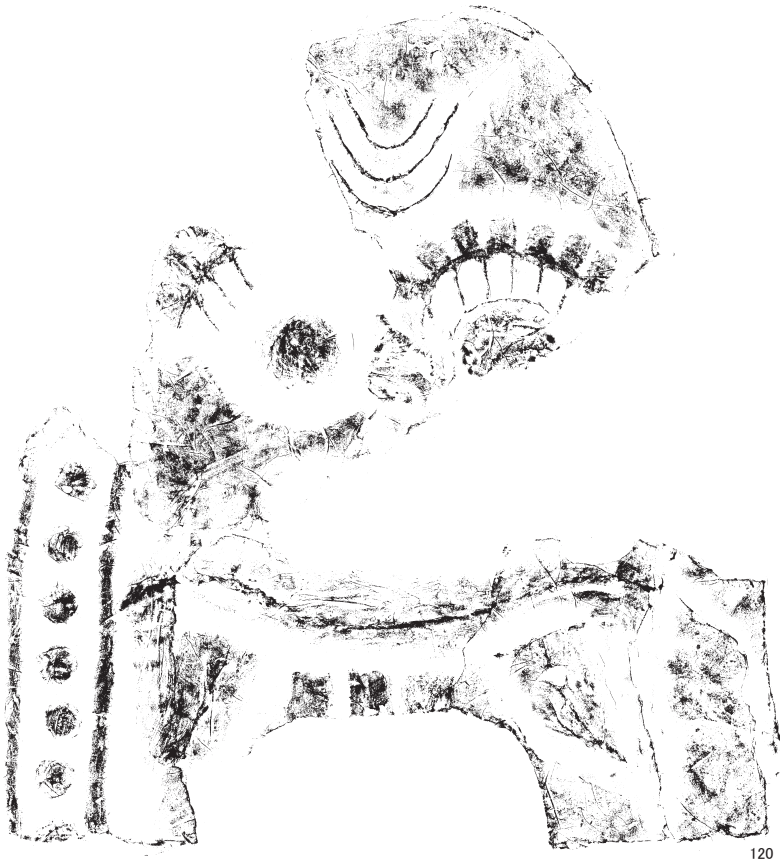


123



124





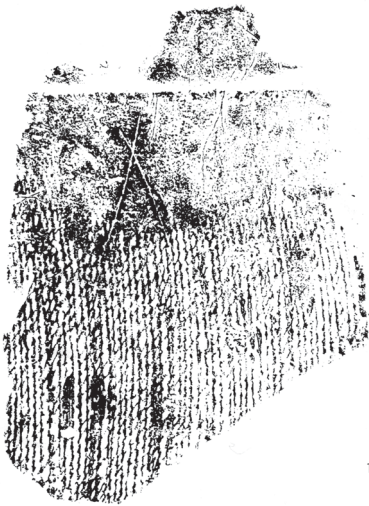
120



125



126



127

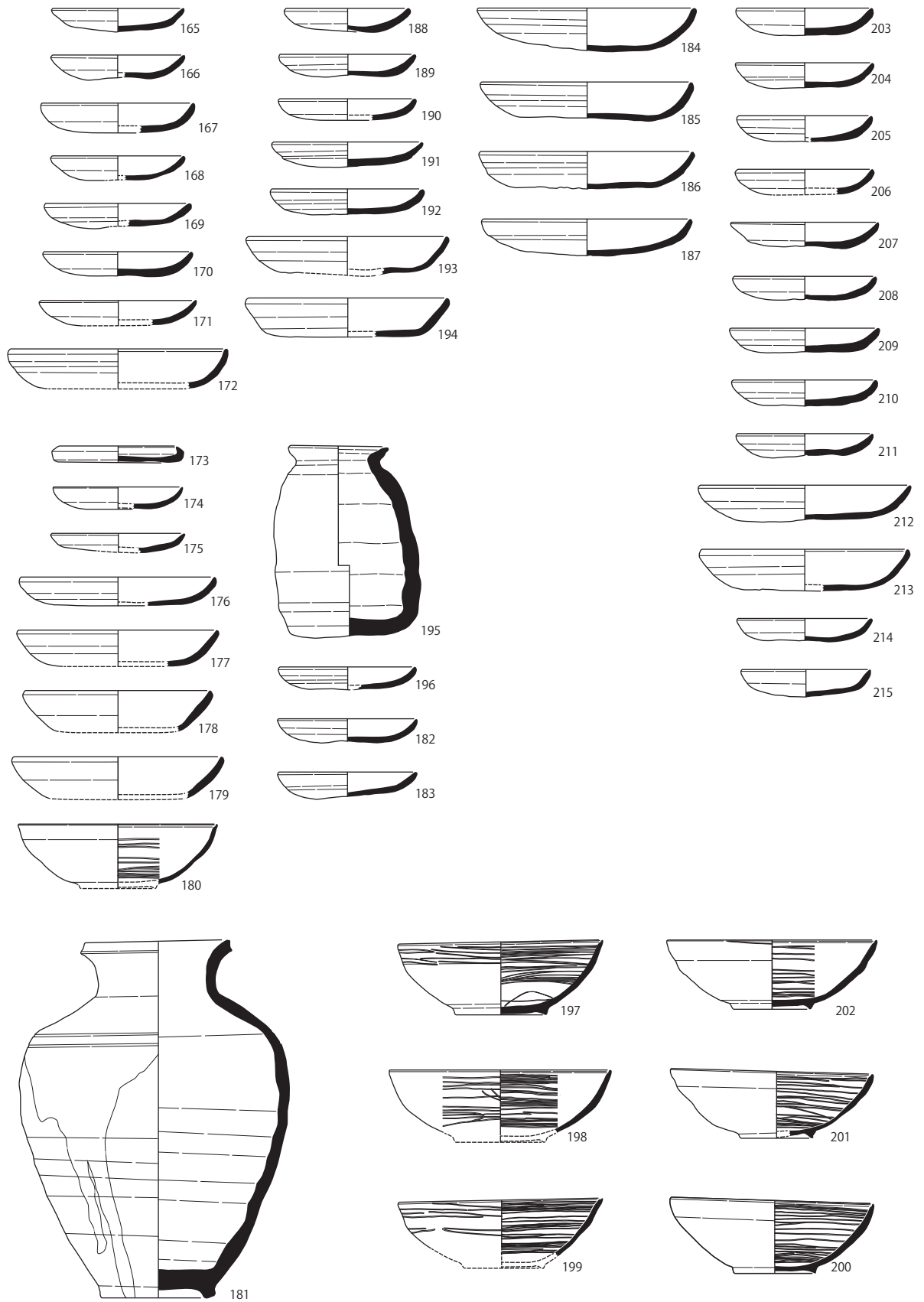


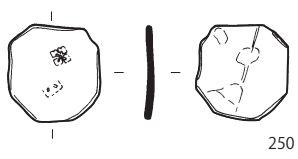
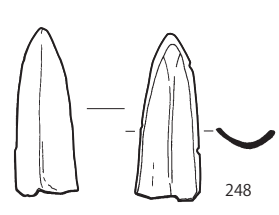
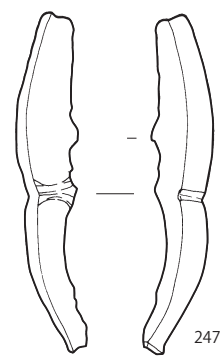
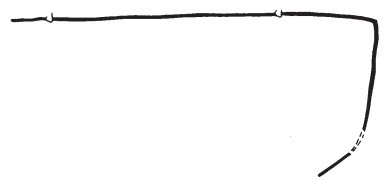
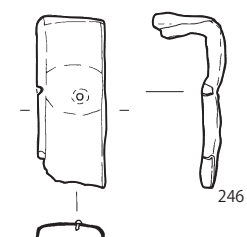
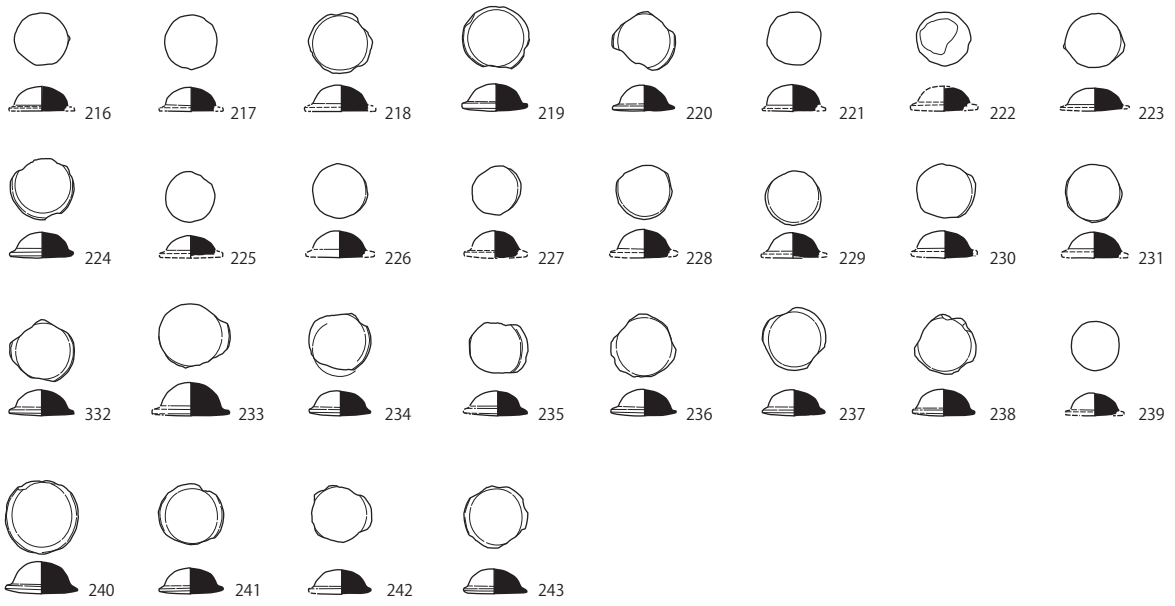
128

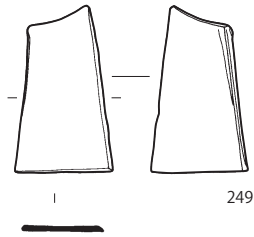


129

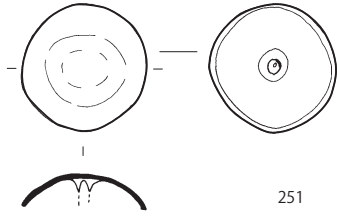




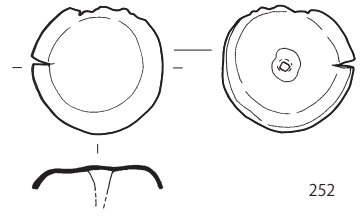




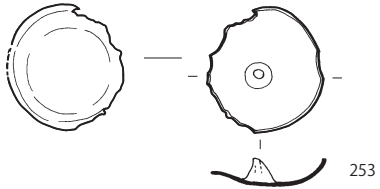
249



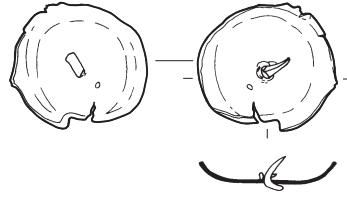
251



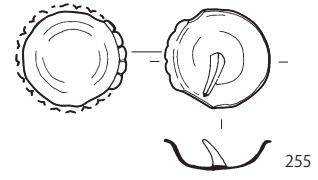
252



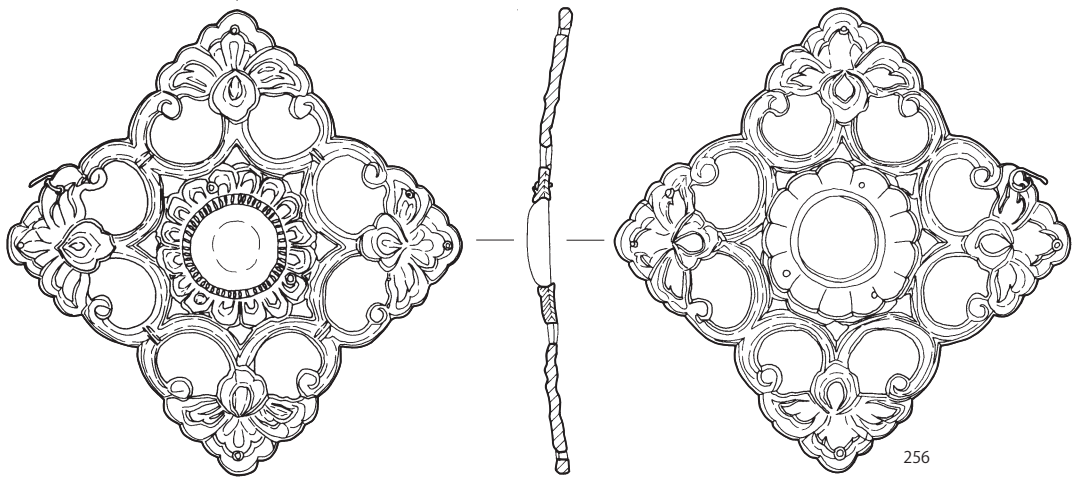
253



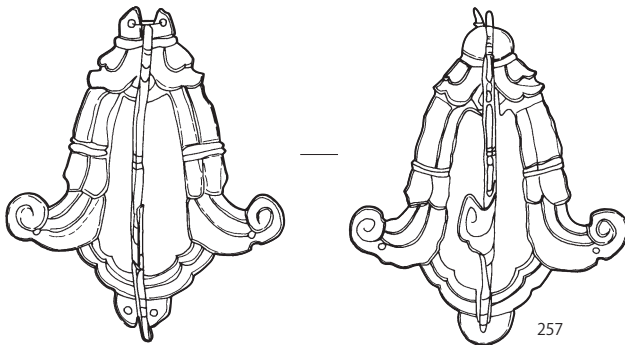
254



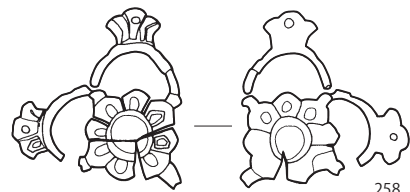
255



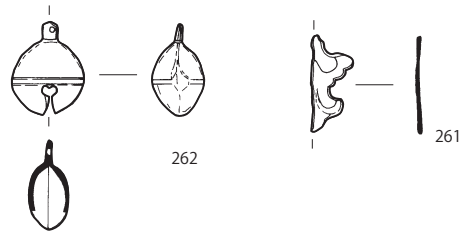
256



257

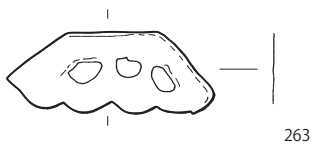


258

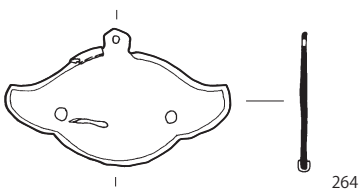


262

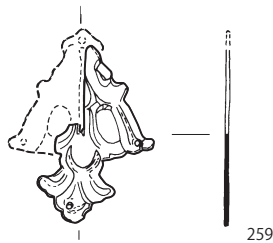
261



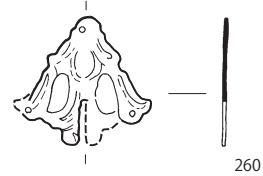
263



264

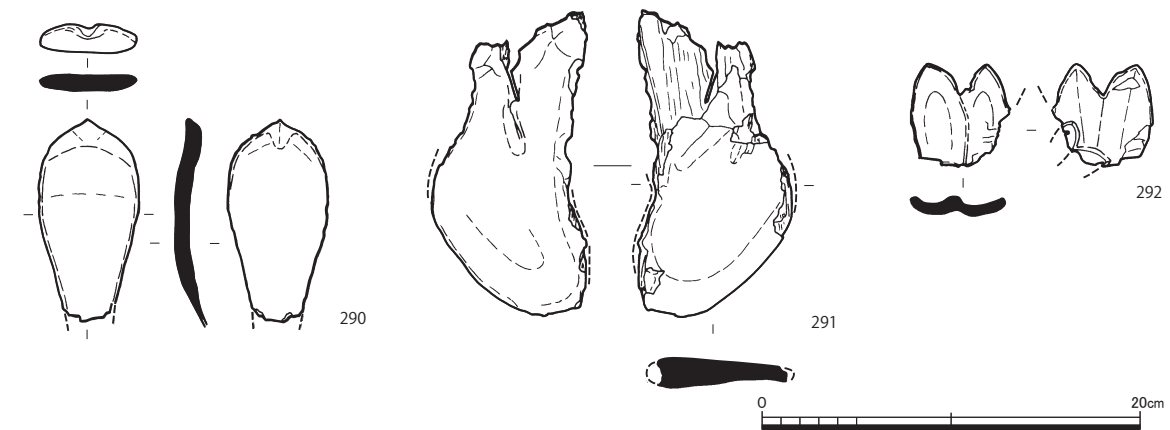
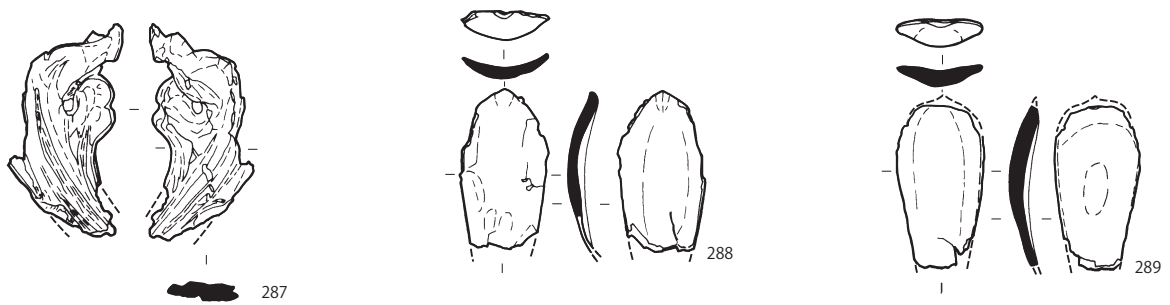
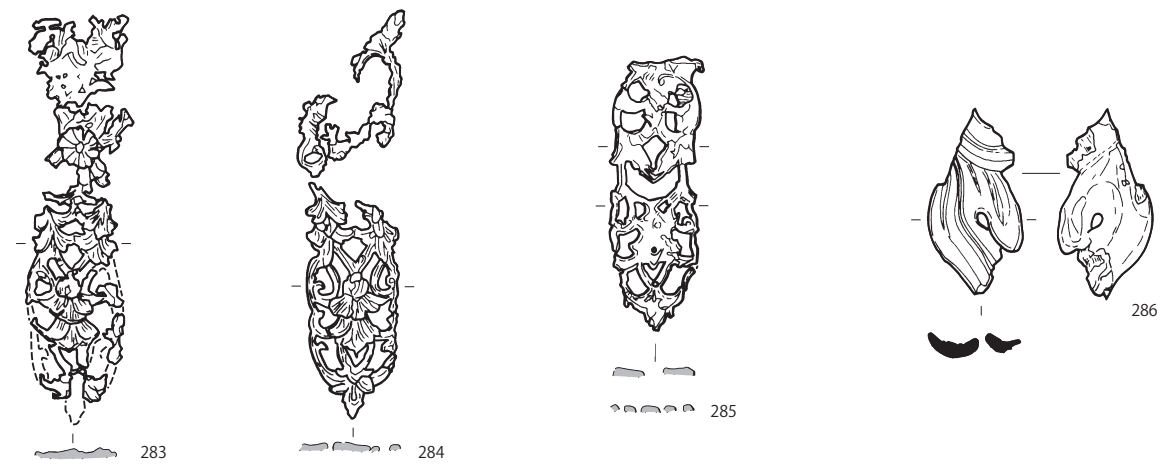
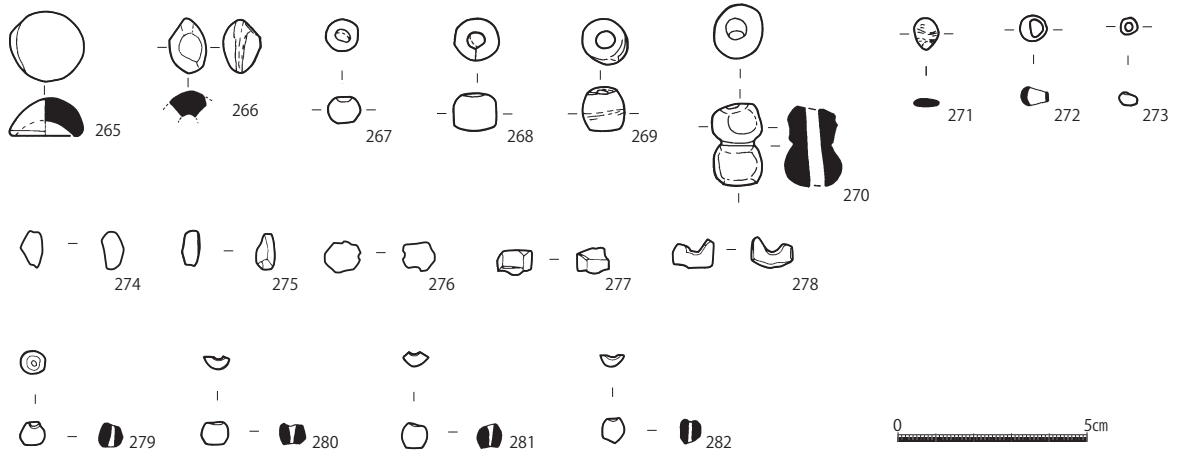


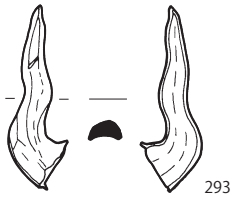
259



260







293



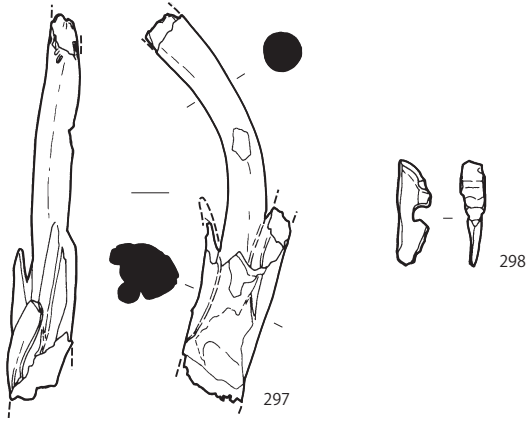
294



295



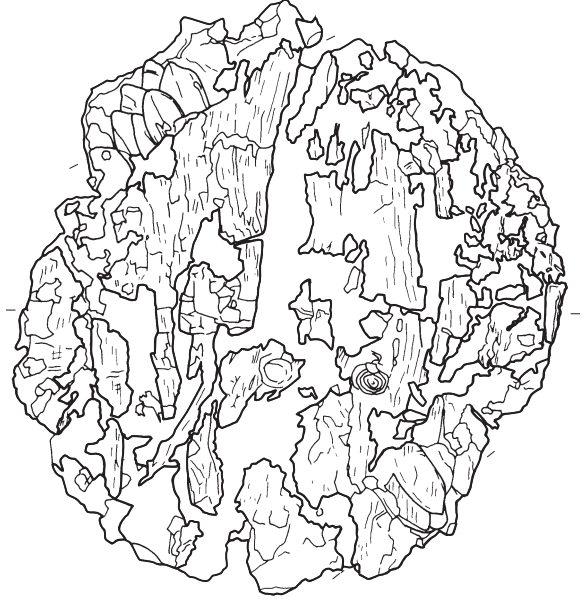
296



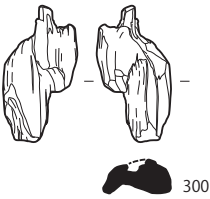
297



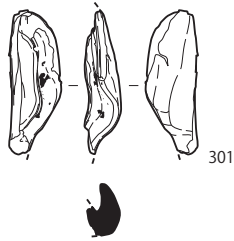
298



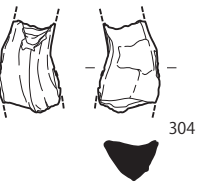
299



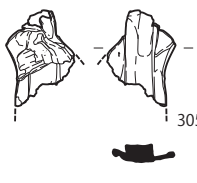
300



301



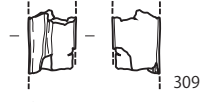
304



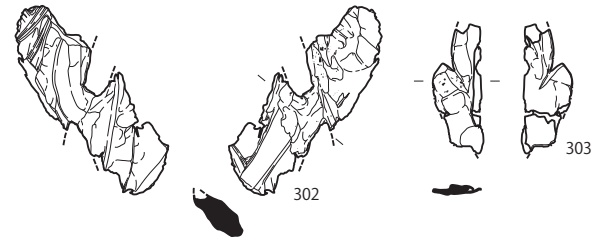
305



308

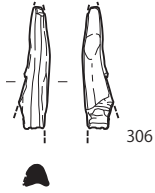


309

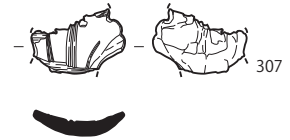


302

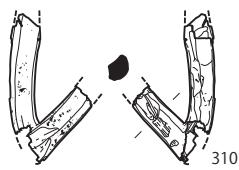
303



306

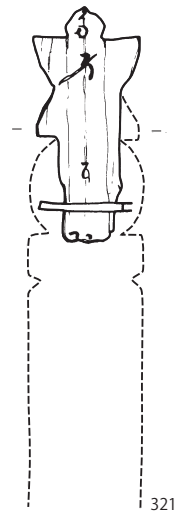
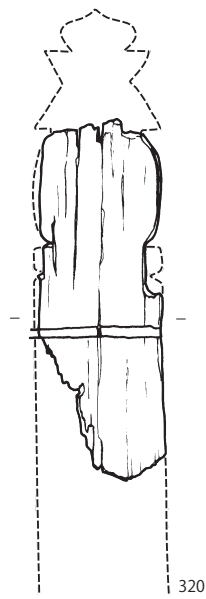
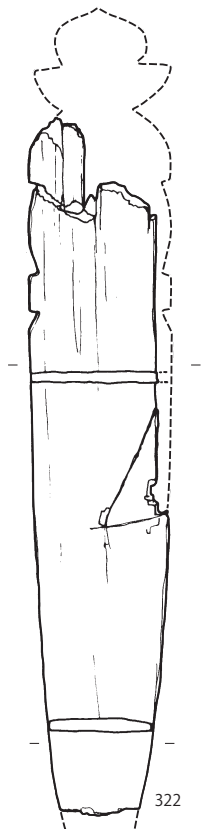
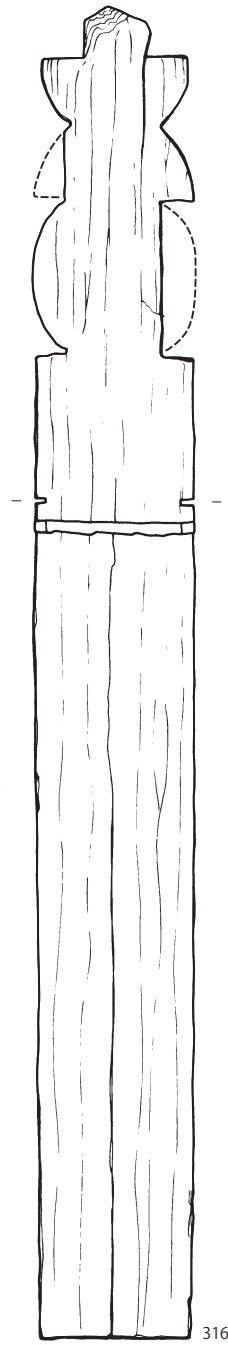
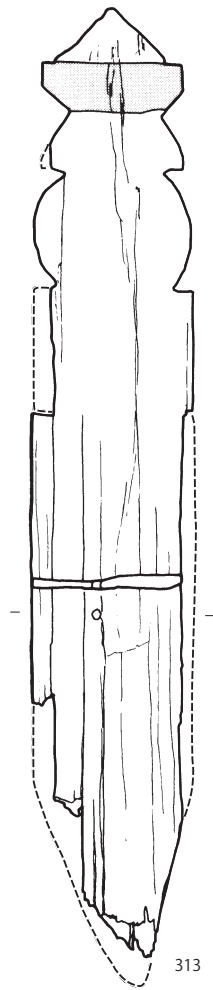
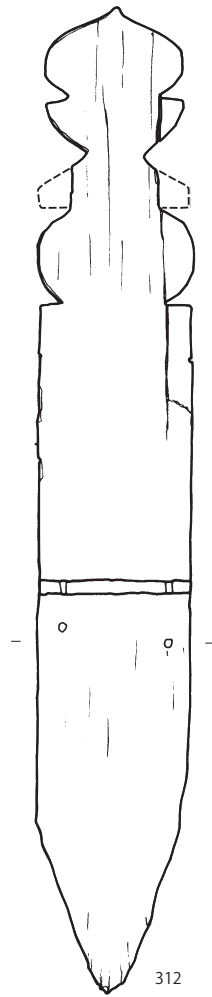
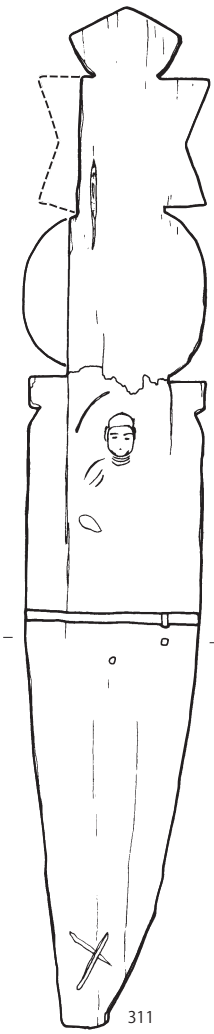


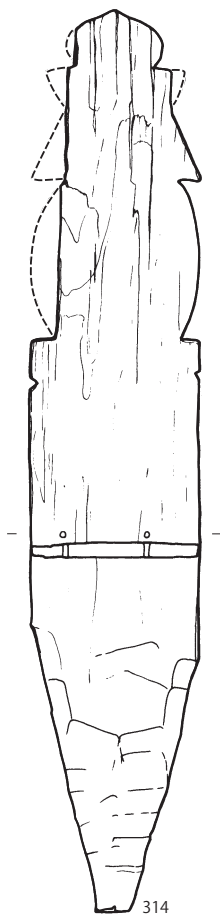
307



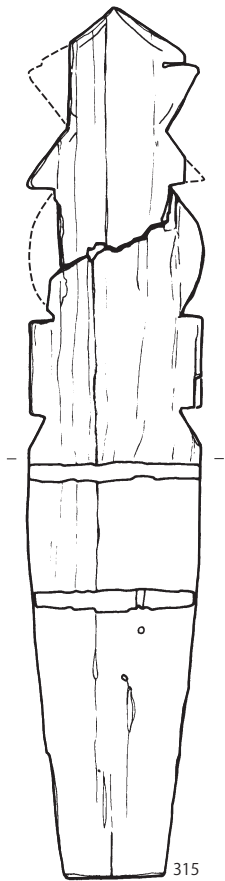
310



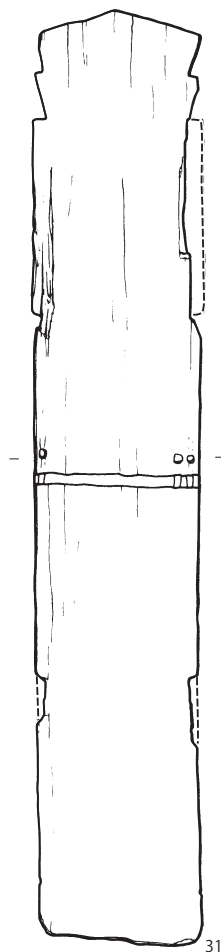




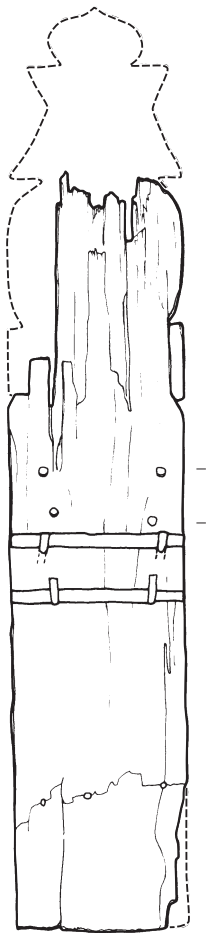
314



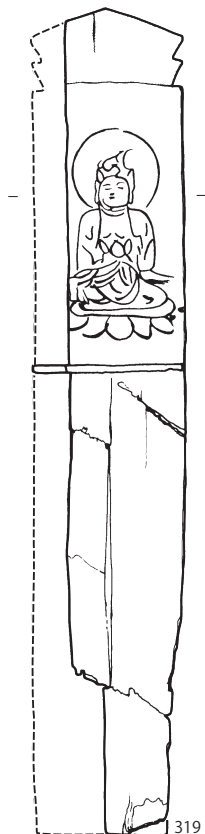
315



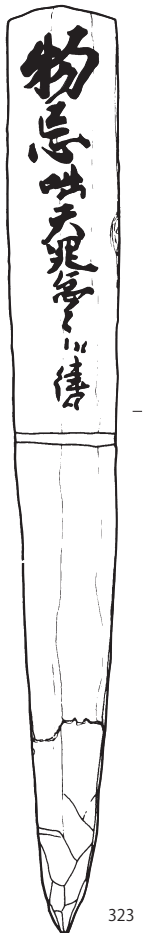
318



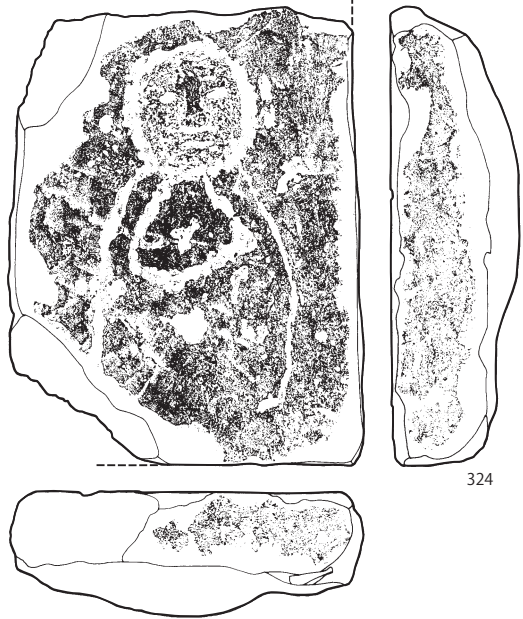
317



319



323



324



一覽表

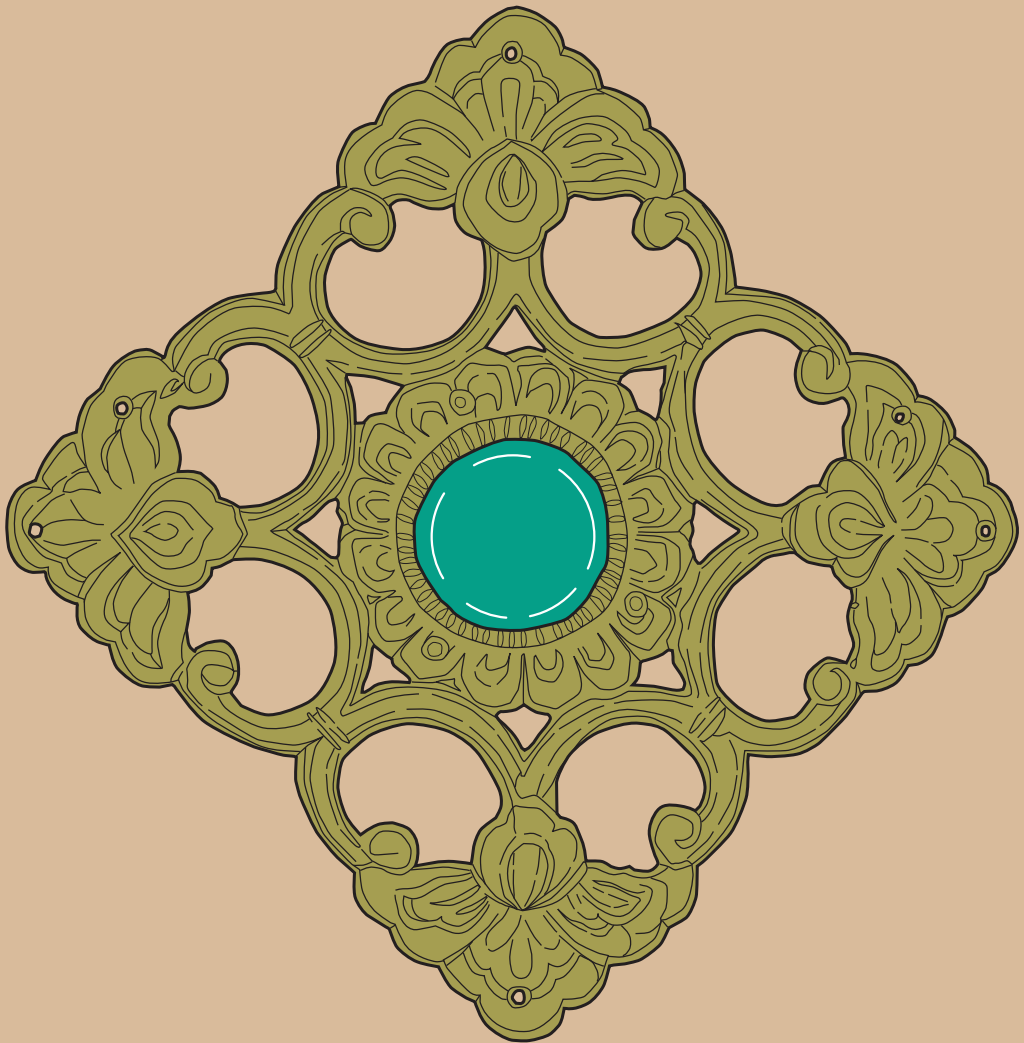


表 3-1 指定候補瓦類一覽表

指定番号	種類	瓦当径 残存幅	残存長 残存高	産地	〈文献1〉 掲載番号	調査回数	出土地点
1	軒丸瓦	14.9	37.0	播磨	30-01	109次	池 16
2	軒丸瓦	15.1	15.8	播磨	未掲載	79次	土坑 65
3	軒丸瓦	14.8	25.2	播磨	未掲載	79次	土坑 42
4	軒丸瓦	14.8	15.0	播磨	未掲載	79次	土坑 42
5	軒丸瓦	14.8	35.0	播磨	30-02	79次	土坑 65
6	軒丸瓦	15.0	8.5	播磨	未掲載	97次	土坑 44
7	軒丸瓦	-	-	播磨	138-137	75次	建物 3
8	軒丸瓦	15.0	7.5	播磨	未掲載	79次	土坑 65
9	軒丸瓦	14.6	35.8	播磨	30-03	79次	池 14
10	軒丸瓦	-	-	播磨	未掲載	92次	池 14
11	軒丸瓦	14.6	10.5	播磨	未掲載	97次	土坑 43
12	軒丸瓦	14.5	6.6	播磨	未掲載	79次	土坑 65
13	軒丸瓦	14.7	34.5	播磨	30-04	109次	池 16
14	軒丸瓦	14.8	33.2	播磨	未掲載	97次	池 14
15	軒丸瓦	14.5	33.3	播磨	30-05	79次	池 14
16	軒丸瓦	15.1	35.5	播磨	138-140	97次	池 14
17	軒丸瓦	14.5	9.3	播磨	31-06	109次	池 16
18	軒丸瓦	13.2	20.0	播磨	31-08	102次	溝 40
19	軒丸瓦	13.7	4.3	播磨	31-09	97次	池 14
20	軒丸瓦	14.0	8.9	播磨	31-07	109次	池 16
21	軒丸瓦	15.4	2.8	播磨	31-10	75次	建物 3
22	軒丸瓦	15.8	4.3	播磨	31-11	74-1	溝 33
23	軒丸瓦	14.7	6.0	播磨	31-12	97次	土坑 45
24	軒丸瓦	15.1	2.8	播磨	31-13	75次	土坑 66
25	軒丸瓦	14.9	3.5	播磨	31-15	97次	土坑 44
26	軒丸瓦	15.0	16.6	播磨	31-14	97次	土坑 44
27	軒丸瓦	14.0	-	讃岐	32-16	109次	池 16
28	軒丸瓦	15.7	20.0	讃岐	32-17	109次	池 16
29	軒丸瓦	16.6	5.5	讃岐	未掲載	97次	土坑 45
30	軒丸瓦	16.1	30.4	讃岐	32-18	79次	土坑 65
31	軒丸瓦	15.6	18.0	讃岐	32-19	74次	土坑 64
32	軒丸瓦	15.9	24.8	讃岐	32-20	97次	土坑 65
33	軒丸瓦	13.6	17.7	京都	33-21	102次	池 14
34	軒丸瓦	13.2	7.4	京都	33-22	79次	建物 3
35	軒丸瓦	13.8	4.5	京都	33-23	97次	第1層
36	軒丸瓦	15.0	-	京都	33-24	97次	池 14
37	軒丸瓦	-	-	京都	33-25	101次	SX4
38	軒丸瓦	12.1	16.0	京都	33-26	79次	土坑 65
39	軒丸瓦	10.0	-	京都	33-27	90次	SK5
40	軒丸瓦	-	-	京都	33-28	75次	雨落溝 60
41	軒丸瓦	14.5	18.7	京都	33-29	79次	池 14
42	軒丸瓦	-	3.7	京都	33-30	97次	上げ土
43	軒丸瓦	-	-	京都	33-31	102次	池 14
44	軒丸瓦	-	-	京都	33-32	97次	土坑 45
45	軒丸瓦	-	-	京都	33-33	80次	その他
46	軒丸瓦	13.4	9.5	京都	33-34	75次	土坑 66
47	軒丸瓦	13.5	8.0	京都	34-35	79次	土坑 65
48	軒丸瓦	14.6	12.0	京都	34-36	79次	土坑 65
49	軒丸瓦	13.2	7.8	京都	34-37	79次	土坑 65
50	軒丸瓦	12.0	7.7	京都	34-38	75次	土坑 66
51	軒丸瓦	11.2	26.2	京都	34-39	79次	土坑 65
52	軒丸瓦	11.6	11.2	京都	34-40	75次	雨落溝 57
53	軒平瓦	25.1	13.0	播磨	35-42	79次	土坑 42
54	軒平瓦	23.2	18.6	播磨	未掲載	75次	建物 3
55	軒平瓦	24.2	10.3	播磨	35-43	79次	土坑 65
56	軒平瓦	24.1	34.7	播磨	35-44	109次	池 16
57	軒平瓦	16.4	7.6	播磨	未掲載	75次	土坑 66
58	軒平瓦	23.9	8.4	播磨	未掲載	97次	堤 69

表 3-2 指定候補瓦類一覽表

指定番号	種類	瓦当径 残存幅	残存長 残存高	産地	〈文献1〉 掲載番号	調査次数	出土地点
59	軒平瓦	11.7	7.0	播磨	138 - 138	97 次	第 1 層
60	軒平瓦	24.5	20.1	播磨	未掲載	97 次	土坑 45
61	軒平瓦	25.1	34.4	播磨	35 - 45	97 次	池 14
62	軒平瓦	22.5	13.8	播磨	未掲載	109 次	池 16
63	軒平瓦	24.7	34.8	播磨	35 - 46	109 次	池 16
64	軒平瓦	24.6	33.9	播磨	35 - 47	97 次	池 14
65	軒平瓦	25.5	34.4	播磨	138 - 139	97 次	池 14
66	軒平瓦	15.0	16.2	播磨	未掲載	97 次	土坑 45
67	軒平瓦	24.8	34.4	播磨	35 - 48	97 次	池 14
68	軒平瓦	22.5	15.2	播磨	未掲載	109 次	池 16
69	軒平瓦	24.7	13.6	播磨	36 - 49	79 次	土坑 42
70	軒平瓦	24.5	33.3	播磨	未掲載	79 次	池 14
71	軒平瓦	23.4	10.3	播磨	未掲載	97 次	土坑 44
72	軒平瓦	24.2	20.7	播磨	36 - 50	79 次	土坑 65
73	軒平瓦	24.5	19.0	播磨	36 - 51	109 次	池 16
74	軒平瓦	13.5	11.5	播磨	未掲載	109 次	池 16
75	軒平瓦	23.3	28.7	播磨	36 - 52	109 次	池 16
76	軒平瓦	24.0	12.7	播磨	36 - 53	103 次	溝 38
77	軒平瓦	23.9	10.3	播磨	36 - 54	103 次	溝 37
78	軒平瓦	18.3	10.0	播磨	36 - 55	74 次 - I	溝 33
79	軒平瓦	20.5	2.2	播磨	36 - 56	74 次 - I	溝 33
80	軒平瓦	16.3	16.2	播磨	36 - 57	79 次	土坑 42
81	軒平瓦	20.0	29.7	播磨	37 - 58	97 次	池 14
82	軒平瓦	13.1	9.5	播磨	37 - 59	97 次	土坑 45
83	軒平瓦	5.3	4.5	播磨	37 - 60	109 次	SK29
84	軒平瓦	6.7	6.5	播磨	37 - 61	97 次	建物 1
85	軒平瓦	13.5	6.4	播磨	37 - 62	80 次	第 3 層
86	軒平瓦	11.5	4.5	播磨	37 - 63	74 次 - I	溝 33
87	軒平瓦	24.9	14.3	播磨	37 - 64	109 次	池 16
88	軒平瓦	24.1	22.5	播磨	37 - 65	75 次	土坑 66
89	軒平瓦	23.8	24.0	播磨	未掲載	99 次	溝 32
90	軒平瓦	21.2	12.0	播磨	37 - 66	97 次	土坑 44
91	軒平瓦	11.6	4.4	播磨	37 - 67	75 次	土坑 66
92	軒平瓦	25.5	13.3	播磨	37 - 68	109 次	建物 2
93	軒平瓦	17.3	12.7	播磨	37 - 69	75 次	雨落溝 57
94	軒平瓦	9.0	10.5	讃岐	38 - 71	76 次	溝 31
95	軒平瓦	26.8	26.0	讃岐	38 - 72	80 次	土坑 50
96	軒平瓦	26.5	16.0	讃岐	38 - 73	99 次	SX12
97	軒平瓦	25.4	19.8	讃岐	38 - 74	75 次	建物 3
98	軒平瓦	11.5	7.5	京都	38 - 75	79 次	土坑 65
99	軒平瓦	12.0	4.5	京都	未掲載	79 次	土坑 65
100	軒平瓦	11.8	6.8	京都	38 - 76	97 次	第 2 層
101	軒平瓦	11.0	5.6	京都	38 - 77	89 次	溝 31
102	軒平瓦	13.8	10.5	京都	38 - 78	97 次	土坑 44
103	軒平瓦	22.2	4.7	京都	38 - 79	79 次	土坑 65t
104	軒平瓦	22.1	12.3	京都	未掲載	97 次	土坑 45
105	軒平瓦	7.5	5.0	京都	38 - 80	109 次	建物 2
106	軒平瓦	22.8	17.0	京都	38 - 81	79 次	土坑 42
107	軒平瓦	23.3	17.8	京都	39 - 82	97 次	土坑 44
108	軒平瓦	24.0	11.3	京都	39 - 83	79 次	土坑 42
109	軒平瓦	23.5	31.2	京都	39 - 84	97 次	池 14
110	軒平瓦	22.4	17.3	京都	39 - 85	79 次	Pit59
111	軒平瓦	17.4	21.0	京都	39 - 86	101 次	溝 35
112	軒平瓦	22.2	11.9	京都	39 - 87	79 次	土坑 65
113	軒平瓦	14.1	12.0	京都	39 - 88	109 次	池 16
114	軒平瓦	12.8	12.4	京都	39 - 89	109 次	池 16
115	軒平瓦	12.2	9.6	京都	39 - 90	97 次	土坑 44
116	軒平瓦	8.0	10.5	京都	39 - 91	75 次	第 2 層

表 3-3 指定候補瓦類一覽表

指定番号	種類	瓦当径 残存幅	残存長 残存高	産地	〈文献1〉 掲載番号	調査次数	出土地点
117	軒平瓦	10.6	6.0	京都	39 - 92	75 次	雨落溝 60
118	鬼瓦	29.4	29.7	播磨	40 - 94	75 次	不明
119	鬼瓦	33.0	36.4	播磨	40 - 95	97 次	土坑 44
120	鬼瓦	37.9	39.6	播磨	未掲載	79 次	土坑 65
121	鬼瓦	25.2	29.8	播磨	未掲載	79 次	池 14
122	鬼瓦	11.9	11.4	播磨	未掲載	79 次	土坑 65
123	鬼瓦	9.0	15.4	播磨	未掲載	79 次	土坑 65
124	鬼瓦	18.8	15.5	不明	未掲載	80 次	SD4
125	ㇿ記号	10.7	15.5	京都	19 - 96	97 次	土坑 45
126	ㇿ記号	11.6	21.0	京都	19 - 97	97 次	土坑 45
127	ㇿ記号	12.8	27.6	京都	19 - 98	109 次	整地層
128	ㇿ記号	9.2	9.3	京都	19 - 99	97 次	土坑 44
129	ㇿ記号	9.0	7.9	京都	19 - 100	97 次	池 15
130	丸瓦	16.2	35.9	播磨	41 - 101	109 次	池 16
131	丸瓦	16.5	33.7	播磨	41 - 102	109 次	池 16
132	丸瓦	17.0	37.8	播磨	42 - 103	109 次	池 16
133	丸瓦	16.7	33.5	播磨	42 - 104	109 次	池 16
134	丸瓦	18.3	35.4	播磨	43 - 105	99 次	溝 32
135	丸瓦	16.3	38.1	播磨	43 - 106	99 次	溝 32
136	丸瓦	15.0	21.2	播磨	44 - 107	99 次	溝 32
137	丸瓦	16.6	30.4	播磨	44 - 109	99 次	溝 32
138	平瓦	24.1	32.9	播磨	47 - 110	79 次	井戸 28
139	平瓦	24.5	33.6	播磨	47 - 111	79 次	井戸 28
140	平瓦	23.2	33.0	播磨	48 - 112	79 次	井戸 28
141	平瓦	23.4	29.8	播磨	48 - 113	79 次	井戸 28
142	平瓦	24.5	32.6	播磨	49 - 114	79 次	井戸 28
143	平瓦	24.1	32.6	播磨	49 - 115	79 次	井戸 28
144	平瓦	22.7	32.0	播磨	50 - 116	109 次	池 16
145	平瓦	22.6	32.1	播磨	50 - 117	109 次	池 16
146	平瓦	25.2	35.3	播磨	52 - 118	109 次	池 16
147	平瓦	25.2	37.1	播磨	51 - 119	109 次	池 16
148	平瓦	24.1	35.9	播磨	51 - 120	109 次	池 16
149	平瓦	23.7	36.0	播磨	52 - 121	109 次	池 16
150	平瓦	23.7	33.6	播磨	53 - 122	109 次	池 16
151	平瓦	23.4	33.2	播磨	53 - 123	109 次	池 16
152	平瓦	23.6	32.5	播磨	5 4 - 124	109 次	池 16
153	平瓦	23.8	32.3	播磨	5 4 - 125	109 次	池 16
154	平瓦	20.0	27.3	播磨	55 - 126	109 次	整地層
155	平瓦	21.2	26.6	播磨	55 - 127	109 次	整地層
156	平瓦	21.6	29.6	播磨	55 - 128	109 次	整地層
157	平瓦	26.3	36.5	讃岐	56 - 129	79 次	井戸 28
158	平瓦	26.7	36.4	讃岐	56 - 130	79 次	井戸 28
159	平瓦	25.2	35.3	讃岐	57 - 131	79 次	井戸 28
160	平瓦	25.3	35.2	讃岐	57 - 132	79 次	井戸 28
161	平瓦	26.0	35.3	讃岐	58 - 133	79 次	井戸 28
162	平瓦	25.1	36.2	讃岐	58 - 134	79 次	井戸 28
163	平瓦	25.1	35.3	讃岐	59 - 135	79 次	井戸 28
164	平瓦	25.6	35.9	讃岐	59 - 136	79 次	井戸 28

表4 指定候補土器一覽表

指定番号	種類	器形	口径 (cm)	器高 (cm)	調査次数	出土地点
165	土師器	皿	9.2	1.6	80次	土坑 50
166	土師器	皿	9.3	1.7	80次	土坑 50
167	土師器	皿	10.6	2.0	80次	土坑 50
168	土師器	皿	9.3	1.7	80次	土坑 50
169	土師器	皿	10.2	1.7	80次	土坑 50
170	土師器	皿	10.4	1.8	80次	土坑 50
171	土師器	皿	10.9	1.8	80次	土坑 50
172	土師器	皿	15.3	2.8	80次	土坑 50
173	土師器	皿	9.2	1.2	80次	土坑 51
174	土師器	皿	9.0	1.6	80次	土坑 51
175	土師器	皿	9.3	1.4	80次	土坑 51
176	土師器	皿	13.6	2.0	80次	土坑 51
177	土師器	皿	14.0	2.5	80次	土坑 51
178	土師器	皿	13.2	2.9	80次	土坑 51
179	土師器	皿	14.3	3.0	80次	土坑 51
180	瓦器	椀	13.8	4.2 残	80次	土坑 51
181	灰釉陶器	壺	10.4	24.8	80次	地鎮 49
182	土師器	皿	9.7	1.7	97次	東区第1層
183	土師器	皿	9.7	1.9	97次	東区第1層
184	土師器	皿	15.2	3.0	97次	東区第1層
185	土師器	皿	14.8	2.7	97次	東区第1層
186	土師器	皿	15.0	2.5	97次	東区第1層
187	土師器	皿	14.6	2.6	97次	東区第1層
188	土師器	皿	8.8	1.7	97次	池 14 腐植土層
189	土師器	皿	9.5	1.5	97次	池 14 腐植土層
190	土師器	皿	9.6	1.5	97次	池 14 腐植土層
191	土師器	皿	10.5	1.7	97次	池 14 腐植土層
192	土師器	皿	10.7	1.8	97次	池 14 腐植土層
193	土師器	皿	14.1	2.6	97次	池 14 腐植土層
194	土師器	皿	14.2	2.7	97次	池 14 腐植土層
195	土師器	壺	7.0	13.3	97次	池 14 腐植土層
196	土師器	皿	9.6	1.6	97次	池 14 底
197	瓦器	椀	14.3	5.2	97次	池 14
198	瓦器	椀	15.4	4.3 残	97次	池 14
199	瓦器	椀	14.2	4.0 残	97次	池 14
200	瓦器	椀	14.2	5.3	97次	池 14
201	瓦器	椀	14.1	4.9	97次	池 14
202	瓦器	椀	14.6	4.8	97次	池 14
203	土師器	皿	9.5	1.9	109次	池 16
204	土師器	皿	9.6	1.8	109次	池 16
205	土師器	皿	9.4	1.8	109次	池 16
206	土師器	皿	9.6	1.8	109次	池 16
207	土師器	皿	10.3	1.9	109次	池 16
208	土師器	皿	10.0	1.7	109次	池 16
209	土師器	皿	10.4	1.7	109次	池 16
210	土師器	皿	10.1	1.8	109次	池 16
211	土師器	皿	9.5	1.7	109次	池 16
212	土師器	皿	14.7	2.5	109次	池 16
213	土師器	皿	14.6	2.9	109次	池 16
214	瓦器	皿	9.4	1.7	109次	池 16
215	瓦器	皿	9.0	1.9	109次	池 16

表5 指定候補土製円塔一覧表

指定番号	残存直径 (cm)	復原直径 (cm)	残存高 (cm)	重量 (g)	調査回数	出土地点
216	2.9	3.6	1.3	9.6	79次	建物1
217	2.9	3.8	1.2	9.4	79次	土坑42
218	3.2	3.6	1.3	12.4	79次	池14
219	3.7	3.6	1.4	12.7	79次	池14
220	3.3	3.8	1.3	9.6	79次	池14
221	3.0	3.7	1.2	9.7	79次	池14
222	2.9	3.5	1.3	8.7	97次	土坑44
223	3.3	3.4	1.3	10.0	97次	土坑44
224	3.4	3.4	1.3	11.4	97次	土坑44
225	2.6	3.7	1.2	6.1	97次	土坑44
226	2.9	3.3	1.4	10.8	97次	土坑44
227	2.8	3.3	1.4	70.4	97次	土坑44
228	3.1	3.3	1.5	10.1	97次	土坑44
229	2.9	3.2	1.3	9.2	97次	土坑44
230	3.1	3.3	1.4	10.9	97次	土坑44
231	3.1	3.3	1.4	11.5	97次	土坑44
232	3.5	3.6	1.4	11.1	97次	土坑44
233	3.8	4.2	1.8	18.3	97次	土坑44
234	3.4	3.4	1.3	11.3	97次	土坑44
235	3.2	3.4	1.2	9.6	97次	土坑44
236	3.3	3.3	1.4	12.6	97次	池15
237	3.4	3.4	1.5	12.6	97次	池15
238	3.3	3.3	1.4	12.1	97次	第2層
239	2.5	3.2	1.5	7.0	97次	土坑45
240	4.0	4.0	1.7	19.7	97次	土坑45
241	3.5	3.5	1.3	12.2	109次	第1層
242	3.1	3.5	1.2	9.7	109次	池16
243	3.4	3.4	1.3	11.3	109次	池16

表6 指定候補金属製品一覧表

指定番号	名称	高さ(長さ)×幅 (cm)	厚さ (cm)	調査回数	出土地点
244	鴛鴦文金具	12.2×25.7	0.1	109次	建物2
245	唐草文金具	1.3×15.6	0.1	97次	池15第2層
246	金具	4.6×1.8	0.1	79次	建物1
247	金具	9.1×1.6	0.4	79次	建物3
248	金具	4.4×1.6	0.2	97次	第2層
249	金具	4.4×2.6	0.2	109次	池16第2層
250	金具	2.5×2.4	0.2	97次	第2層
251	釘隠し	3.4(直径)	0.1	97次	池15第2層
252	釘隠し	3.5(直径)	0.1	97次	第2層
253	釘隠し	3.4(直径)	0.1	97次	池15第2層
254	釘隠し	3.6〔直径〕	0.1	97次	池15第2層
255	釘隠し	2.8(直径)	0.1	109次	池16第2層
256	方形金具	12.3×12.0	0.6	92次	池14
257	瓔珞	8.9×7.3	-	101次	建物7
258	瓔珞	4.7×4.3	-	109次	池16
259	瓔珞	4.7×2.6	0.1	97次	池15第2層
260	瓔珞	3.5×3.2	0.1	97次	池15第2層
261	瓔珞	2.6×1.1	0.1	97次	池15第2層
262	鈴	2.5×1.9	1.4	109次	池16第2層
263	風招形	2.1×5.4	0.02	97次	池14
264	風招形	3.6×6.0	0.2	97次	池15

表7 指定候補玉類一覧表

指定番号	材 質	大きさ (cm)	重量 (g)	調査回数	出土地点
265	水晶	2.0×1.0	3.587	97 次	k13sw 整地層
266	ガラス	1.5×1.0	1.410	75 次	建物 I 地業
267	ガラス	0.8×0.7	0.208	109 次	池 16
268	ガラス	1.1×1.0	0.631	109 次	池 16
269	ガラス	1.1×1.2	2.709	109 次	池 16
270	ガラス	1.3×2.2	7.683	109 次	池 16
271	ガラス	0.8×0.6	0.302	109 次	池 16
272	ガラス	0.7×0.5	0.154	109 次	池 16
273	ガラス	0.5×0.3	0.037	109 次	池 16
274	ガラス	0.6×0.9	0.552	80 次	地鎮 49 壺内
275	ガラス	0.5×1.0	0.438	80 次	地鎮 49 壺内
276	ガラス	1.0×0.8	0.185	80 次	地鎮 49 壺内
277	ガラス	1.0×0.6	0.324	80 次	地鎮 49 壺内
278	ガラス	1.1×0.8	0.274	80 次	地鎮 49 壺内
279	水晶	0.7×0.6	0.151	80 次	地鎮 49 壺内
280	水晶	0.7×0.6	0.214	80 次	地鎮 49 壺内
281	水晶	0.7×0.7	0.221	80 次	地鎮 49 壺内
282	水晶	0.6×0.6	0.133	80 次	地鎮 49 壺内

表8 指定候補漆製品一覧表

指定番号	名 称	長さ (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	調査回数	出土地点
283	垂飾	20.3	5.5	-	1 0 9 次	池 16
284	垂飾	21.6	5.0	-	1 0 9 次	池 16
285	垂飾	14.4	4.5	-	1 0 9 次	池 16
286	光背・台座断片	9.8	5.0	0.5	1 0 9 次	池 16
287	光背・台座断片	11.4	4.7	0.8	1 0 9 次	池 16
288	光背・台座断片	8.4	4.6	0.5	1 0 9 次	池 16
289	光背・台座断片	8.5	4.6	0.7	1 0 9 次	池 16
290	光背・台座断片	10.5	5.3	0.7	1 0 9 次	池 16
291	光背・台座断片	16.0	7.7	1.5	1 0 9 次	池 16
292	光背・台座断片	5.3	5.3	0.6	1 0 9 次	池 16
293	光背・台座断片	9.6	2.6	0.8	1 0 9 次	池 16
294	光背・台座断片	6.7	2.1	0.8	1 0 9 次	池 16
295	光背・台座断片	7.8	2.1	1.1	1 0 9 次	池 16
296	光背・台座断片	9.4	2.6	0.7	1 0 9 次	池 16
297	光背・台座断片	20.3	4.3	3.7	1 0 9 次	池 16
298	光背・台座断片	5.5	1.7	-	1 0 9 次	池 16
299	八葉蓮華	直径 31.9	-	0.9	1 0 9 次	池 16
300	光背・台座断片	7.2	4	1.9	1 0 9 次	池 16
301	光背・台座断片	7.6	2.6	1.7	1 0 9 次	池 16
302	光背・台座断片	4.4	11.6	1.4	1 0 9 次	池 16
303	光背・台座断片	7	2.6	0.6	1 0 9 次	池 16
304	光背・台座断片	4.8	3.2	1.9	1 0 9 次	池 16
305	光背・台座断片	5.2	3.76	1.0	1 0 9 次	池 16
306	光背・台座断片	6.6	1.6	1.2	1 0 9 次	池 16
307	光背・台座断片	3.4	4.8	0.9	1 0 9 次	池 16
308	光背・台座断片	3.6	1.6	0.9	1 0 9 次	池 16
309	光背・台座断片	3.6	2.4	0.5	1 0 9 次	池 16
310	光背・台座断片	10.4	1.6	1.1	1 0 9 次	池 16

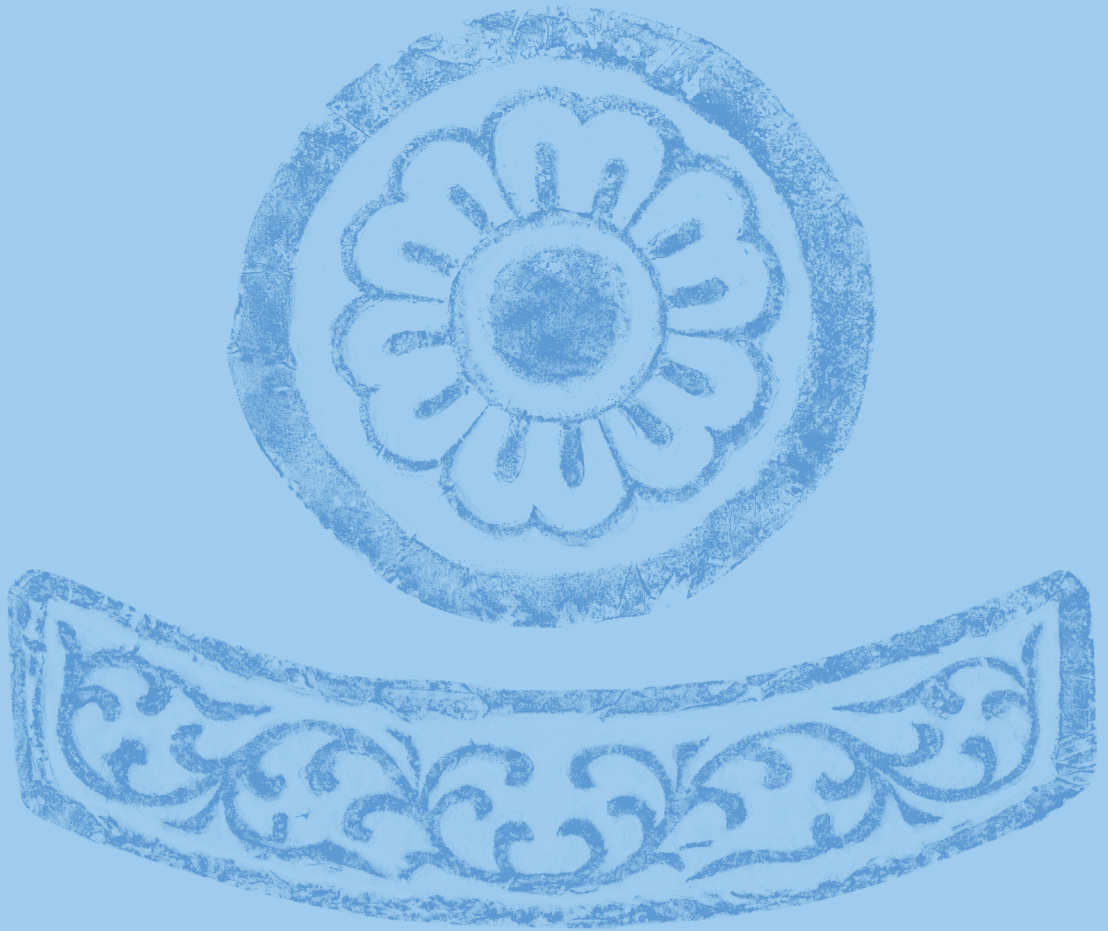
表9 指定候補木製品一覧表

指定番号	種類	高さ〈長さ〉×幅 (cm)	厚さ (cm)	調査回数	出土地点
311	卒塔婆	54.0×9.6	0.6	97次	池14
312	卒塔婆	52.2×8.0	0.7	97次	池14
313	卒塔婆	50.0×8.4	0.8	97次	池14
314	卒塔婆	48.0×9.0	0.9	97次	池14
315	卒塔婆	46.0×9.0	1.2	97次	池14
316	卒塔婆	70.8×8.6	0.8	97次	池14
317	卒塔婆	40.2×1.2	0.8	97次	池14
318	卒塔婆	51.2×83.8	0.6	97次	池14
319	卒塔婆	43.6×6.2	0.5	97次	池14
320	卒塔婆	19.2×6.4	0.6	97次	池14
321	卒塔婆	12.4×5.6	0.4	97次	池14
322	卒塔婆	36.8×7.0	0.8	97次	池14
323	物忌札	49.2×5.8	0.8	102次	溝40

表10 指定候補石製品一覧表

指定番号	種類	長さ×幅 (cm)	厚さ	調査回数	出土地点
324	線刻仏 (建物基壇化粧石)	48.8×38.0	13.8	109次	池16の州浜上面

附 編



はじめに

鳥羽離宮金剛心院跡から出土した瓦類については、前田義明氏が『鳥羽離宮跡Ⅰ－金剛心院跡の調査－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊』（以下、『鳥羽Ⅰ』とする）で、すでに詳細な分析を行っている。今回、指定品候補選定に伴い再検討を行い、前田氏の分析に則して、いくつかの問題点について考えてみたい。

1. 瓦類の概要

金剛心院跡で出土した瓦類には、平安時代前期・平安時代中期のものも含まれるが、ここでは、金剛心院に関連した平安時代後期の瓦を取り上げて報告する。〔註1〕

出土した瓦類の種類は、軒瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦、へら記号を施した軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。出土点数は、軒丸瓦1424点、軒平瓦973点、鬼瓦49点、丸瓦46点、平瓦85点、総計2577点である。出土瓦の中には、へら記号を施した軒平瓦4点・丸瓦5点・平瓦1点も含まれる。〔註2〕

なお、出土瓦の内訳は軒瓦一覧表〔表1〕、個々の瓦の詳細については瓦類観察表〔表5〕に掲載した。

(1) 軒丸瓦

軒丸瓦は、瓦当紋様によって分類すると、23型式39種1146点で、小片又は紋様が不明瞭なため型式が認定できないものが278点ある。

瓦当紋様は、蓮華紋と巴紋に大別できる。蓮華紋は12型式17種829点、巴紋は11型式22種317点である。各型式毎の点数は、蓮華紋では複弁のHM1型式A～E種が735点と圧倒的多数を占める。次いで大きく隔たり、単弁のKM6型式が54点である。巴紋では、HM5・6型式が83点、KM9A型式が72点、SM2・3型式が67点、KM12・13型式が57点である。その他の型式の瓦は、各型式10点前後にとどまり、

合計しても78点と極端に少ない。

このことから、複弁蓮華紋HM1型式が主体的に使用され、単弁蓮華紋KM6型式、巴紋HM5・6型式、KM9型式、SM2・3型式、KM12・13型式が副次的に使用されたと理解できる。

HM1型式の内訳は、A種162点、B種105点、C種198点、D種134点、E種136点である。各種類毎の点数は100点程度で、大きな差は見られない。

(2) 軒平瓦

軒平瓦は、瓦当紋様によって分類すると、20型式50種833点、小片又は紋様が不明瞭なため型式が認定できないものが140点ある。

瓦当紋様は、唐草紋・連巴紋・剣巴紋・剣頭紋に分類できる。唐草紋は12型式26種689点、連巴紋は4型式10種83点、剣巴紋は3型式7種33点、剣頭紋は1型式7種28点出土した。各型式毎の点数は、外行唐草紋HH1型式A～J種が640点と圧倒的多数を占める。次いで大きく隔たり、連巴紋HH9・10型式が32点、SH2型式が44点、剣巴紋KH6・7型式が28点と続く。その他の型式の瓦は、各型式10点前後にとどまり、合計しても89点と極めて少ない。

このことから、外行唐草紋HH1型式が主体的に使用され、連巴紋HH9・10型式、SH3型式と、剣巴紋KH6・7型式が副次的に使用されたと理解できる。

HH1型式の内訳は、A種99点、C種100点、D種77点、E種73点、F種70点、H種143点と100点前後であるのに対し、B種35点、G種25点、I種9点、J種9点で、軒丸瓦に比べ差が大きい。

(3) 鬼瓦

鬼瓦は、瓦当紋様によって分類すると3型式7種23点で、小片又は紋様が不明瞭なため型式が認定できないものが26点ある。

瓦当紋様は、全て鬼面紋で、鬼面の容貌や外区珠紋の形状などによって細分できる。1型式はA～Eの5種に分類でき、内訳はA種1点、B種1点、C種4点、D種8点、E種6点である。2型式は2点、3型式は1点である。

2. 瓦類の時期

出土瓦類の時期は、同範瓦・同紋瓦の出土した遺跡の年代、及び瓦当紋様の系譜や成形技法の特徴から判断できる。

瓦の時期は、11世紀後葉～12世紀前葉（平安時代後期前葉）のものと、12世紀後葉（平安時代後期後葉）のものとが明らかに判別され、これ以外の型式が金剛心院造営期の12世紀中葉（平安時代後期中葉）と推定できる。

11世紀後葉～12世紀前葉 軒平瓦SH2型式は、同紋瓦が鳥羽南殿（1086年造営）から出土した。軒丸瓦HM3A型式・KM3・6・11型式、軒平瓦HH2・3・4A・5A・5B・7型式は、同紋瓦が尊勝寺（1102年造営）から出土した。軒丸瓦KM1型式は、同紋瓦が鳥羽成菩提院陵（1109年造営）から出土した。軒丸瓦HM3B型式は、同紋瓦が鳥羽勝光明院（1136年造営）から出土した。軒丸瓦HM4型式は、同紋瓦が御室法金剛院（1130年造営）・鳥羽勝光明院から出土した。

以上のことから軒平瓦SH2型式は11世紀後葉と推定でき、軒丸瓦HM3A型式・KM1・3・6・11型式、軒平瓦HH2・3・4A・5A・5B・7型式は12世紀初葉に比定できる。また、軒丸瓦HM3B・4型式は12世紀前葉に比定できる。この他、瓦当紋様系譜・成形技法などから考え、軒丸瓦HM2型式・KM2型式、軒平瓦HH6・8型式は、おおむね12世紀前葉に属する。

12世紀後葉 軒丸瓦KM4・9B型式は、同紋瓦が法住寺殿・蓮華王院（1161年頃造営）から出土した。

軒平瓦HH4B型式は、同紋瓦が六波羅蜜寺（1178年再建）から出土した。軒平瓦

KH2・4・5A・5B・8G型式は、同紋瓦が法住寺殿から出土した。

以上のことから、軒丸瓦KM4・9B型式、軒平瓦HH4B型式、KH2・4・5A・5B・8G型式は、12世紀後葉に比定できる。この他、瓦当紋様系譜・成形技法などから、軒丸瓦SM1型式、KM5・7・8・9C・10・14型式、軒平瓦HH4C・D型式、KH1・3・8型式は、おおむね12世紀後葉に属する。

12世紀中葉 12世紀前葉以前・12世紀後葉と推定した瓦を、全出土瓦から除くと、軒丸瓦HM1・5・6型式、SM2・3型式、KM9A・12・13型式、軒平瓦HH1・9・10型式、SH3型式、KH6・7型式が残る。

当該期の軒瓦は、後に述べるように他の遺跡から出土した同範瓦・同紋瓦例が少なく、時期の類推が難しいが、瓦当紋様系譜・成形技法などから、12世紀代中葉に属する特徴を持つ。また、先述したように金剛心院での出土量が圧倒的に多く、当寺院の主要瓦と判断でき、金剛心院造営期の所用瓦と捉えられる。

3. 瓦類の生産地

出土瓦類の生産地は、同範瓦・同紋瓦の出土した生産遺跡・周辺遺跡、及び瓦当紋様の系譜や成形技法の特徴などから判断できる。

産地は、播磨国・讃岐国・山城国に分類できる。産地分類は基本的に『鳥羽I』に準ずる。**播磨国** 播磨産と推定できる軒丸瓦は6型式14種830点、軒平瓦は10型式28種711点出土した。

軒丸瓦HM1型式は、神出窯・林崎三本松窯・魚橋窯で同範・同紋瓦を確認した。HM2型式は、魚住窯で同紋瓦を確認した。HM3A型式は、神出窯・林崎三本松窯で同範・同紋瓦を確認した。HM3B・4・5B型式は、林崎三本松窯で同紋瓦を確認した。HM6A型式は、神出窯で同紋瓦を確認した。

軒平瓦HH1型式は、神出窯・林崎三本松窯・魚橋窯で、同範・同紋瓦を確認した。HH2・4A

表1 金剛心院出土軒瓦一覽表

產地	型式名	点数	計	紋様	時期
播磨	HM1A	162	↑	蓮華	12C 中葉
	HM1B	105	↑	蓮華	12C 中葉
	HM1C	198	735	蓮華	12C 中葉
	HM1D	134	↓	蓮華	12C 中葉
	HM1E	136	↓	蓮華	12C 中葉
	HM2	4		蓮華	12C 前葉
	HM3A	2		蓮華	12C 初葉
	HM3B	5		蓮華	12C 前葉
	HM4	1		三巴	12C 前葉
	HM5A	37	↑	三巴	12C 中葉
	HM5B	15	↑	三巴	12C 中葉
	HM5C	10	83	三巴	12C 中葉
	HM6A	17	↓	三巴	12C 中葉
HM6B	4	↓	三巴	12C 中葉	
讃岐	SM1	1		蓮華	12C 後葉
	SM2A	34	↑	三巴	12C 中葉
	SM2B	28	67	三巴	12C 中葉
	SM3A	2	↓	三巴	12C 中葉
SM3B	3	↓	三巴	12C 中葉	
山城	KM1	2		蓮華	12C 前葉
	KM2	11		蓮華	12C 前葉
	KM3	1		蓮華	12C 初葉
	KM4	2		蓮華	12C 後葉
	KM5	1		蓮華	12C 後葉
	KM6	54	54	蓮華	12C 初葉
	KM7	3		蓮華	12C 後葉
	KM8	8		蓮華	12C 後葉
	KM9A	72	72	三巴	12C 中葉
	KM9B	1		三巴	12C 後葉
	KM9C	1		三巴	12C 後葉
	KM10A	1		三巴	12C 後葉
	KM10B	11		三巴	12C 後葉
	KM11	4		四巴	12C 初葉
	KM12	45	↑	三巴	12C 中葉
	KM13A	8	57	三巴	12C 中葉
	KM13B	4	↓	三巴	12C 中葉
	KM14A	1		三巴	12C 後葉
KM14B	12		三巴	12C 後葉	
KM14C	6		三巴	12C 後葉	
軒丸不明	278				
軒丸計	1424				

軒丸瓦

產地	型式名	点数	計	紋様	時期
播磨	HH1A	99	↑	外行唐草	12C 中葉
	HH1B	35		外行唐草	12C 中葉
	HH1C	100		外行唐草	12C 中葉
	HH1D	77		外行唐草	12C 中葉
	HH1E	73	640	外行唐草	12C 中葉
	HH1F	70		外行唐草	12C 中葉
	HH1	25		外行唐草	12C 中葉
	HH1H	143		外行唐草	12C 中葉
	HH1I	9		外行唐草	12C 中葉
	HH1J	9	↓	外行唐草	12C 中葉
	HH2	5		外行唐草	12C 初葉
	HH3	1		外行唐草	12C 初葉
	HH4A	3		外行唐草	12C 初葉
	HH4B	11		外行唐草	12C 後葉
	HH4C	10		外行唐草	12C 後葉
	HH4D	1		外行唐草	12C 後葉
	HH5A	1		外行唐草	12C 初葉
	HH5B	1		外行唐草	12C 初葉
	HH6	1		外行唐草	12C 前葉
	HH7	1		外行唐草	12C 初葉
HH8A	2		外行唐草	12C 前葉	
HH8B	2		外行唐草	12C 前葉	
HH9A	7	↑	5連巴	12C 中葉	
HH9B	4	↑	5連巴	12C 中葉	
HH9C	4		5連巴	12C 中葉	
HH9D	3	32	5連巴	12C 中葉	
HH10A	8	↓	5連巴	12C 中葉	
HH10B	6	↓	5連巴	12C 中葉	
讃岐	SH2	2		偏行唐草	11C 後葉
	SH3A	27	↑	5連巴	12C 中葉
	SH3B	14	44	5連巴	12C 中葉
SH3C	3	↓	5連巴	12C 中葉	
山城	KH1	6		外行唐草	12C 後葉
	KH2	1		外行唐草	12C 後葉
	KH3	1		外行唐草	12C 後葉
	KH4	7		連巴	12C 後葉
	KH5A	4		劍巴	12C 後葉
	KH5B	1		劍巴	12C 後葉
	KH6A	13	↑	劍巴	12C 中葉
	KH6B	8		劍巴	12C 中葉
	KH7A	3	28	劍巴	12C 中葉
	KH7B	2	↓	劍巴	12C 中葉
	KH7C	2	↓	劍巴	12C 中葉
	KH8A	1		劍頭	12C 後葉
	KH8B	17		劍頭	12C 後葉
	KH8C	1		劍頭	12C 後葉
	KH8D	1		劍頭	12C 後葉
KH8E	5		劍頭	12C 後葉	
KH8F	2		劍頭	12C 後葉	
KH8G	1		劍頭	12C 後葉	
軒平不明	140				
軒平瓦計	973				

軒平瓦

型式は、神出窯で同紋瓦を確認した。HH5B 型式は、魚住窯で同紋瓦を確認した。HH3・6・8 型式・鬼 1 型式は、林崎三本松窯で同紋瓦を確認した。

この他、瓦当紋様系譜・成形技法などから考え、軒丸瓦 HM5A・5C・6B 型式、及び軒平瓦 HH4B～D・5A・7・9・10・鬼 2 型式は、播磨産と推定できる。

讃岐国 讃岐産と推定できる軒丸瓦は 3 型式 5 種 68 点、軒平瓦は 2 型式 4 種 46 点出土した。

軒丸瓦 SM 1 型式は、ますえ畑窯・庄屋原窯で同紋瓦を確認した。SM2A 型式は、丸山窯で同範瓦を確認した。SM2B 型式は、庄屋原窯で同紋瓦を確認した。

軒平瓦 SH2 型式は、丸山窯で同紋瓦を確認した。SH3 型式は、丸山窯・大谷窯で同範瓦を確認した。

この他、瓦当紋様系譜・成形技法などから考え、軒丸瓦 SM3 型式は、讃岐産と推定できる。

山城国 山城産と推定できる軒丸瓦は 14 型式 20 種 248 点、軒平瓦は 8 型式 18 種 76 点出土した。

軒丸瓦 KM1 型式は、鳥羽田中殿周辺窯で同範瓦を確認した。軒平瓦 KH2 型式は、栗栖野窯で同紋瓦を確認した。

この他、瓦当紋様系譜・成形技法などから考え、軒丸瓦 KM2～14 型式、及び軒平瓦 KH1・3～8 型式は山城産と推定できる。

4. 瓦類の出土状況

瓦類の遺構別の出土総数は、表 2 の通りである。この内、12 世紀中葉の軒瓦・鬼瓦などを中心にして、建物・築地毎にまとめて以下に述べる。

(1) 建物 1 (釈迦堂) に関連した瓦

75 次・79 次・97 次・109 次調査で検出した建物 1 の基壇上面・周囲などから出土した瓦は、建物 1 の所用瓦と推定できる。また、建物 1 周辺に位置する 79 次土坑 65、97 次土坑

43・44・45 は瓦溜で、建物 1 の瓦を一括投棄した土坑と推定でき、これらの瓦も建物 1 の所用瓦と考えられる。さらに、79 次・97 次・102 次で検出した池 14・堤 69 上面、及び 97 次池 15 などから出土した瓦は、建物 1 所用瓦の可能性が高い。

建物 1 に関連した 12 世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦 597 点・軒平瓦 434 点の計 1031 点が出土し、全出土量の約 4 割を占める。各内訳は、播磨産蓮華紋軒丸瓦 HM1 型式が 441 点、唐草紋軒平瓦 HH1 型式が 406 点と卓越する。他の軒丸瓦では山城産の巴紋 KM9・12・13 型式が 74 点と多いが、播磨産巴紋 HM5・6 型式は 48 点、讃岐産巴紋 SM2・3 型式は 34 点と少ない。これに対し、他の軒平瓦では播磨産連巴紋 HH9・10 型式が 15 点、山城産剣巴紋 KH6・7 形式が 9 点、讃岐産連巴紋 SH3 形式が 4 点と、いずれもかなり少ない。

以上のことから、建物 1 では播磨産蓮華紋軒丸瓦 HM1 型式と唐草紋軒平瓦 HH1 型式の組み合わせを主体的に使用したと理解できる。他の軒瓦では、軒丸瓦と軒平瓦の点数が大きく異なり、どのように使用したか不明な点が多い。

建物 1 に関連した鬼瓦は 31 点と、全出土量の大半を占める。大型の 1C 型式 3 点、中型の 1B 型式 1 点、小型の 1D 型式・1E 型式が 5 点・3 点、2 型式が 1 点、型式不明が 18 点である。このことから、大型・中型・小型の鬼瓦をセットで使用したと理解できる。

(2) 建物 2 (阿弥陀堂) に関連した瓦

75 次・109 次調査で検出した建物 2 の上層・周辺などから出土した瓦は、建物 2 の所用瓦と推定できる。さらに、109 次で検出した池 16 出土瓦は、全てとは言い難いが、位置的に考え建物 2 の所用瓦の可能性が高い。

建物 2 に関連した 12 世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦 149 点・軒平瓦 92 点の計 241 点が出土し、全出土量の約 1 割を占める。建物 1 と同様に軒丸瓦・軒平瓦共に、播磨産蓮華紋 HM1

型式が106点、唐草紋HH1型式が70点と大半を占める。他の軒丸瓦では、讃岐産巴紋SM2・3型式が17点、播磨産巴紋HM5・6型式が16点、山城産巴紋KM9・12・13型式が10点と一定量見られる。これに対し、他の軒平瓦では播磨産連巴紋HH9・10型式が11点、讃岐産連巴紋SH3型式が10点と軒丸瓦同様に一定量見られるが、山城産剣巴紋KH7型式が1点と少ない。

以上のことから、建物2では建物1と同様の播磨産軒丸瓦HM1型式と軒平瓦HH1型式の組み合わせを主体的に使用したと理解できる。他の軒瓦では、讃岐産SM2・3型式とSH3型式、播磨産HM5・6型式とHH9・10型式、巴紋軒丸瓦と連巴紋軒平瓦組み合わせを副次的に使用したと推定できる。従って建物2では軒先の紋様が揃っていないと想定できよう。

建物2に関連した鬼瓦出土数は10点と建物1に次いで多い。小型の1D型式が2点、1E型式が2点、2型式が1点、型式不明が5点出土した。このことから、小型の鬼瓦を使用したと考えられる。

(3) 建物5に関連した瓦

建物5に近接した75次土坑66出土の瓦は、建物5の所用瓦と推定できる。また、周辺で出土した瓦類もこれらの建物に関連した瓦と考えられる。

建物5に関連した12世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦28点・軒平瓦17点の計45点出土し、量が少ない。

軒丸瓦・軒平瓦共に、播磨産蓮華紋HM1型式が21点、播磨産唐草紋HH1型式が15点と同様に多い。他の播磨・山城産の軒瓦は10点未満と少ない。

以上のことから、建物5でも播磨産HM1型式・HH1型式の組み合わせを主体的に使用したと理解できる。また、型式不明鬼瓦が2点出土し、平瓦・丸瓦は確認されておらず、軒瓦の数量が少ないことと合わせると、この建物は総

瓦葺きではなく葺棟と推定できる。

(4) 建物4に関連した瓦

建物4に近接した79次土坑42は、建物4の瓦を一括投棄した土坑と考えられ、これらの瓦は、建物4所用瓦と推定できる。

建物4に関連した12世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦42点・軒平瓦38点の計80点出土し、量が少ない。

軒丸瓦・軒平瓦共に、播磨産蓮華紋HM1型式が38点、唐草紋HH1型式が34点と、他の建物と同様に大半を占める。他の播磨・山城産の軒瓦は数点に満たない。

以上のことから、建物4でも播磨産HM1型式とHH1型式の組み合わせを主体的に使用したと理解できる。

(5) 建物3に関連した瓦

75次・79次で検出した建物3周辺で出土した瓦は、建物3の所用瓦と推定できる。また、建物3に近接した井戸28出土瓦も建物3の所用瓦の可能性が高い。

建物3に関連した12世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦81点・軒平瓦53点の計134点出土した。

軒丸瓦・軒平瓦共に、播磨産蓮華紋HM1型式が49点、唐草紋HH1型式が41点で、他と同様に大半を占める。他の瓦では、山城産軒丸瓦KM9・12型式が20点、軒平瓦KH6・7型式が5点と比較的多い。播磨産巴紋・連巴紋・讃岐産の瓦は数点と少ない。

以上のことから、建物3では、播磨産HM1型式・HH1型式の組み合わせを主体的に使用し、山城産KM9・12型式、KH6・7型式を副次的に使用したと理解できる。

(6) 建物7（一間四面堂）に関連した瓦

101次で検出した建物7周辺で出土した瓦、及び溝36などで出土した瓦は、建物7の所用瓦の可能性が高い。

建物7に関連した軒瓦は、播磨産蓮華紋HM1型式が2点、播磨産連巴紋HH9が1点のみである。出土数量が極めて少なく、所用瓦

表2 軒瓦建物・築地別出土数量表

推定 建物	調査 回数	遺構名	軒丸瓦																								型 式 不 明	HH 1A	HH 1B							
			播磨												讃岐					山城																
			HM 1A	HM 1B	HM 1C	HM 1D	HM 1E	HM 5A	HM 5B	HM 5C	HM 6A	HM 6B	他 播 磨	SM 2A	SM 2B	SM 3A	SM 3B	他 讃 岐	KM 9A	KM 12	KM 13 A	KM 13 B	他 山 城													
建物1 釈迦堂	75	建物1	1		1		1											1	1																	
	79	建物1	1		2	1		1										3										3	1	1						
	79	土坑65	10	14	17	26	17	7			1	1					3	7			1					11	2	1	1	44	36	9	6			
	79	池14	9	2	13	6	6	3				1				2	1	1								9	1			5	17	4	1			
	97	土坑43	4	2	5	3	5																			1			1	1	2	2				
	97	土坑44	11	10	8	4	15	7	5	3	1	1	2	5	1				5	8						5	8		6	21	6	3				
	97	土坑45	11	10	16	10	10	3			1								2							1	16		4	27	11	3				
	97	池14	10	10	15	9	5	2			1	2				2										4			1	14	16	1				
	97	池15	10	8	19	10	14				1	1	1				5	1	1							1			5	24	1	2				
	97	堤69	4	6	1	6	7	1									4									1			1	7	5					
	97	他の遺構	6	6	9	2	7	1			2		1					1								1	4		3	10	1	2				
	102	池14	5	1	3	7	2											1									2			2	2	4	1			
	102	他の遺構		2	4		2									1														2						
建物2 阿弥陀堂	75	建物2	1									2				1	1									1			3	4						
	109	建物2上層			1		1	2			1		1		1															5						
	109	池16	15	11	31	17	17		4		1		2	4	2					1	4	5					2	36	11	5						
	109	他の遺構	2	2	6	1	1	3	2			1			2	6													16	1	1					
建物5	75	土坑66	5		10	4	2																		6	1		3	13	3	1					
建物4	79	土坑42	23	4	4	4	3																		4				5	10	1					
建物3	75	建物3	7	3	10	4	5	1	4		1					1	4									3						9	7	1		
	79	建物3	3	4	3	5	2																				14	1		6	11	1	2			
	79	井戸28	2				1																			2						1				
建物7	101	建物7など			1		1																					1								
築地 13 西辺 築地	74-1	土坑64	10	3	6	1	1					1			1		1	1													4	1				
	80	調査区全域		2	4	2	2				1						1		1										1	2	1					
	99	調査区全域														1			1											2						
	103	調査区全域				1		1									1													2						
北辺 築地	76	調査区全域																																		
	89	溝31																																		
	90	調査区全域			2																									1						
建物8	100	建物8																																		
他の遺構			12	5	7	11	9	5			5		1	2	1										4		7	3	30	5	3	2				
計			162	105	198	134	136	37	15	10	17	4	12	34	28	2	3	1	72	45	8	4	119	278	99	35										

軒平瓦																				他の瓦																			
播磨														讃岐				山城					型式不明	丸瓦	平瓦	鬼瓦	遺構別計												
HH 1C	HH 1D	HH 1E	HH 1F	HH 1G	HH 1H	HH 1I	HH 1J	HH 9A	HH 9B	HH 9C	HH 9D	HH 10A	HH 10B	他播磨	SH 3A	SH 3B	SH 3C	他讃岐	KH 6A	KH 6B	KH 7A	KH 7B						KH 7C	他山城										
			1		1				1																										1	9			
1		1			1																													3		1	20		
14	6	7	9	2	24	2	1	1				2				1				2	1											20	6	1		5	318		
5	3	4	2	1	8		1						1								1	1											14	1	1	2	126		
3	1	2	1																														1	3		1	38		
15	8	9	5		23	1	1			1		2									1												3	2	6		8	207	
10	7	1	9		7																												3	14	10		1	187	
4	16	3	11	8	9	1	1						1																				4	4		4	159		
6	4	6	5	2	5		1	1			1			1		2																	13	1		3	155		
2	3	3	1	1	5			1						1			1																	4				65	
4	1	4	1	1		2	2					1	1																				1		3		2	79	
4	1	3	1		2							1									1	1											1	2			3	50	
		1	1	1	1									1																					4				20
					1								1			2	1																						18
			1									1				2																		1	1			1	19
11	8	5	4	1	10	2	1	2	1	2		1	1	2		1																	5	12	10	18	8	274	
	1	2	1	1	3			1	1					1	3	1																		5	1	8	1	74	
5	2	1	1		2			1													1													3	3			2	69
4	3	3	4	1	7	1								1						3		1											1	5	1	1		94	
	4	3	2		4					1					3	0	1			1														10		1		90	
2	2	3	2		4		1		1											2	2												1	7	3	4		87	
1					1								1																							46	1		56
												1																						1					5
2	3	6		1	1																													2	5				50
1		1	1		17									1	6	2																		1	14			2	63
																	2	1																	5				15
1														3																					3				12
																				1															1				2
1																																			1				2
																																							3
																	1																						1
4	4	5	7	5	7						1			28	8	3		1	4	1	1												2	5	3		6	3	210
100	77	73	70	25	143	9	9	7	4	4	3	8	6	39	27	14	3	2	13	8	3	2	2	2	48	140	46	85	49								2577		

の特定はできない。

(7) 築地 13 (西辺築地) に関連した瓦

80 次・99 次で検出した築地 13 周辺や、西側溝 33・東側溝 32 の出土瓦は、築地 13 所用瓦と推定できる。また、74 次 I 検出の土坑 64 の出土瓦も築地 13 の所用瓦の可能性が高い。さらに、74 次 I・80 次・99 次周辺出土瓦も含めて築地 13 の所用瓦と推定しておく。

築地 13 に関連した 12 世紀中葉の軒瓦は、軒丸瓦 42 点・軒平瓦 50 点の計 92 点出土した。軒丸瓦・軒平瓦共に、播磨産蓮華紋 HM1 型式が 32 点、唐草紋 HH1 型式が 36 点と、他と同様に大半を占める。次いで讃岐産巴紋軒丸瓦 SM2・3 型式が 7 点、讃岐産連巴紋軒平瓦 SH3 型式が 14 点と多い。他の播磨産は 3 点と少なく、山城産は見られない。

以上のことから、築地 13 では、播磨産 HM1 型式と HH1 型式の組み合わせを主体的に使用し、讃岐産 SM2・3 型式と SH3 型式の組み合わせを副次的に使用したと理解できる。従って築地 13 は軒先紋様が揃っていなかったと想定できよう。

(8) 北辺築地に関連した瓦

76 次・89 次・90 次・106 次で検出した溝 31 の出土瓦は、北辺築地に関連した瓦と推定できる。また、溝 31 周辺で出土した瓦も含めておく。

北辺築地に関連した軒瓦は、播磨産蓮華紋 HM1 型式が 2 点、唐草紋 HH1 型式が 1 点のみである。出土数量が極めて少なく、所用瓦の特定はできない。

5. 播磨産軒瓦について

ここでは、出土瓦中最も多く、当寺院で主体的に使用された軒丸瓦 HM1 型式と軒平瓦 HH1 型式を中心に、播磨産軒瓦について分析しておく。

(1) 生産瓦屋

軒丸瓦 HM1 型式では、A～E 種のうち B 種

の同範瓦を神出窯南支群垣内小支群・田井支群釜ノ口小支群、魚橋窯で確認した。D 種の同範瓦を林崎三本松窯で確認した。E 種の同範瓦を神出窯老ノ口支群宮ノ裏小支群で確認した。

軒平瓦 HH1 型式では、A～J 種のうち B 種の同範瓦を林崎三本松窯で確認した。C 種の同範瓦を林崎三本松窯、神出窯南支群垣内小支群で確認した。D 種の同範瓦を魚橋窯で確認した。H 種の同範瓦を林崎三本松窯で確認した。

以上のことから、軒丸瓦 HM1 型式 B 種・D 種・E 種と、軒平瓦 HH1 型式 B 種・C 種・D 種・H 種は神出窯・林崎三本松窯・魚橋窯で生産されたことを確認した。さらに、軒丸瓦 HM1 型式 B 種は神出窯と魚橋窯、軒平瓦 HH1 型式 C 種は神出窯と林崎三本松窯の両方の窯で、同範瓦が確認されたことから、瓦当範が移動したと判断した。

また、軒瓦 HM1 型式と HH1 型式は、魚住窯・三木窯などの他の播磨の瓦屋では出土していないことから、この型式の軒瓦が 3ヶ所程度の瓦屋で生産された可能性が高い。また、軒丸瓦 HM1 型式 5 種類・軒平瓦 HH1 型式 10 種類は、いずれも瓦当紋様構成が酷似することから、一括して瓦当範を製作し、播磨国内の各瓦屋に分配されたことを示唆する。

ただ、これまで播磨の瓦屋で確認されていない軒丸瓦 HM1 型式 A 種・C 種と、軒平瓦 HH1 型式 A 種・E 種～G 種・I 種・J 種については、既検出瓦屋で出土していないか、もしくは未発見瓦屋の存在が想定できる。

(2) 供給先

軒丸瓦 HM1 型式・軒平瓦 HH1 型式の組み合わせは、金剛心院・鳥羽殿以外での出土例は少なく、出土量も各 1 点づつと極僅かである。また、それぞれの遺跡の主体的な瓦ではない。

軒丸瓦 HM1 型式は、同範瓦が蓮華王院東側〔京都府 66、図版 9-2〕・蓮華王院〔上村 85〕から出土した。また、HM1A 型式の同範瓦が円勝寺〔上村ほか 15、瓦 72〕から出土した。

軒平瓦 HH1 型式は、同紋瓦が蓮華王院東側〔柴野 84、図 52-15〕で出土した。HH1D 型式は、同範瓦が平安宮太政官〔前田 95、図 157-13〕、HH1E 型式は、同範瓦が法住寺殿北殿〔網 09、図版 37-瓦 30〕、同紋瓦が蓮華王院〔中谷 16、図 29-56〕、HH1G 型式は、同範瓦が尊勝寺〔奈文研 61、239 型式〕で出土した。

さらに、軒丸瓦 HM1 型式・軒平瓦 HH1 型式の軒瓦は、播磨国内の遺跡ではこれまで同紋瓦の出土例が見られない。

以上のことから、この型式の軒瓦のほぼ全てが、金剛心院に独占的に供給されたといっても過言ではない。つまり、当型式の軒瓦は、金剛心院を造営するにあたって生産した金剛心院専用瓦と捉えられる。

この状況は、軒丸瓦 HM5・6 型式と軒平瓦 HH9・10 型式の組み合わせでも同様で、これまで播磨の生産地・遺跡では同範例・同紋例が確認されておらず、生産地は不明であるが HM1・HH1 型式と同様に金剛心院専用瓦の可能性が高い。

(3) 成形技法

軒丸瓦 軒丸瓦 HM1 型式瓦当部の成形は、瓦当部裏面に溝を付け丸瓦を挿入して、接合粘土を使用して接合する「接合式」である。接合した丸瓦は、基本的に端面に加工を施さない「先端未加工」である。

丸瓦の取り付け位置は、瓦当部裏面上端付近で、凹面からの接合粘土は少なく、基本的に凸面側には接合粘土を使用しない。例外的に、取り付け位置が低く、凸面側に接合粘土を使用したものも（指定 014）も見られる。

瓦当部裏面は平坦であるが、裏面周辺が盛り上がり土堤状になる個体を数点確認した。A 種（指定 003・004）と C 種（指定 011・012）だけに見られる。

瓦当部裏面や中房上面に平行叩き板で叩いた痕跡のある個体を 2 点確認した。B 種（指定 007・008）だけに見られる。魚橋窯では、B

種の同範瓦で同様の技法を確認した〔今里 78、図 2-6〕。

軒平瓦 軒平瓦 HH1 型式瓦当部の成形は、瓦当部裏面に浅い溝を付け、平瓦を当て、接合粘土を使用して接合する「接合式」である。接合平瓦は、基本的に端面に加工を施さない「先端未加工」であるが、平瓦端面にへう刻みを施すものを 1 点確認した（指定 074）。

瓦当部部の形態は、平瓦の取り付け位置によって、段顎とバチ形顎の 2 種類に分けられる。段顎のものは、平瓦の取り付け位置が瓦当部裏面上端ないし上位で、凹面の接合粘土は少なく凸面側の接合粘土は多い。バチ形顎のものは、平瓦の取り付け位置が瓦当部裏面中位で、凹面・凸面両側に接合粘土を用いる。凹面側がかなり凹むもの（指定 071）も見られる。平瓦接合位置と顎部の形態は、ほぼ対応する。

さらに、瓦当部と平瓦の接合技法は、平瓦の接合方向によって 2 種類に分けられる。瓦当部裏面に平瓦狭端部を接合する a 技法と、瓦当部裏面に平瓦広端部を接合する b 技法である。〔図 1・2〕

a 技法は、瓦当部幅と平瓦狭端部幅が異なるものが多く、瓦当部左右両側が平瓦の外側にはみ出し、平瓦凸面側又は凹凸面側に加え両脇側からも粘土を付加するため、瓦当部左右両側がふくらむ。b 技法は、瓦当部幅と平瓦広端部幅がほぼ同じで、基本的に両脇から接合粘土は付加しない。a 技法は「包込式」技法と呼ばれるが、b 技法はそうではない〔木村 77〕。

このように、瓦当部接合技法と瓦当部の形状はおおむね対応する。

軒平瓦 HH1 型式以外の HH2～10 型式も含めて、瓦当部付近が完形に近い個体で、瓦当紋様別に集計すると、表 3 の通りとなる。出土した播磨産軒平瓦 711 点のうち、a 技法が 129 点、b 技法が 89 点と、a 技法の方がやや多い。瓦当紋様別には、A 種・H 種では a 技法の比率が高く、E 種では b 技法の比率が高い。しかし、

他の種類では大きな差はなく、瓦当紋様と接合技法との対応関係は不明である。

軒平瓦瓦当面中央に、割付け線と推定できる縦方向の細凸線を確認した〔前田 02〕。数点出土し、C種（指定 058・059）とF種（指定 066・012）に見られる。播磨の瓦屋では未確認である。

平瓦 軒平瓦 HH1 型式に接合した平瓦部は、基本的に粘土板成形で、粘土紐成形のものは認められない。

平瓦部の凸面成形は、I類：平行叩き、II類：無紋叩き・無紋叩き後ナデ、III類：ナデの3種類に分類できる。平行叩きには、側面と平行する縦方向叩きと、側面と平行でない斜方向叩きがあり、後者は2方向から叩き綾筋状となるものが多い。I類が186点、II類が237点、III類が33点と、II類が多く次いでI類で、III類はかなり少ない。

これを瓦当紋様別に集計すると表4の通りである。A種・D種・F種・J種はI類が主体で、B種・C種・G種・H種はII類が主体、E種はI類・II類が混在する。

以上のことから、瓦当紋様と平瓦凸面成形とは、ほぼ対応すると考えられる〔前田 02〕。

播磨の瓦屋では、神出窯でIII類が多くI類も見られる。魚橋窯ではI類とIII類が見られる。林崎三本松窯ではIII類が多く、II類は少なく、I類は見られない。このような平瓦部成形技法と同範関係を考え合わせると、B種とH種は林崎三本松窯、C種は神出窯と林崎三本松窯、D種は魚橋窯で生産されたと推定できる。

6. 讃岐産軒瓦について

ここでは、軒丸瓦 SM2・3 型式と軒平瓦 SH3 型式を中心として、讃岐産瓦について分析しておく。

(1) 生産瓦屋

軒丸瓦 SM2 型式では、A種の同範瓦を丸山窯で確認した。B種の同紋瓦を庄屋原窯で確認した。軒平瓦 SH3 型式では、A種の同範瓦を丸山窯・大谷窯で確認し、B種・C種の同範瓦を丸山窯で確認した。さらに、A種は、範傷の進行から丸山窯から大谷窯への瓦当範の移動が推定できる。

以上のことから、讃岐産軒丸瓦・軒平瓦は、十瓶山窯跡群の丸山窯・大谷窯・庄屋原窯などで生産されたことが明らかとなった。

さらに、丸山窯・ますえ畑窯で出土した平瓦



図1 a技法



図2 b技法

は、側面に凸型台の痕跡と粘土バリが残存し、凹面の布目が狭端面に連続する〔森下 16〕。金剛心院出土の讃岐産平瓦（指定 157～164）も、これと同様の痕跡が認められ、大きさや厚さも類似する〔前田 02〕。

（2）供給先

軒丸瓦 SM2 型式・軒平瓦 SH3 型式の組み合わせは、金剛心院・鳥羽殿以外の出土地は少なく、出土量も各 1 点ずつと極僅かである。また、それぞれの遺跡の主體的な瓦ではない。

軒平瓦 SH3C 型式は、同範瓦が平安宮南面大垣から出土した〔常磐井 80、NH13〕。

生産地である讃岐国の周辺遺跡では、軒平瓦 SH 3 の同範瓦が西村遺跡、SH3B の同範瓦が多度津鴨神社から出土しているが、いずれも範傷が進行する〔森下 16〕。

以上のことから、この型式の軒瓦の大半が金剛心院に供給されたと推定できる。つまり、当型式の軒瓦は、金剛心院を造営するにあたって生産した金剛心院専用瓦と捉えられる。

（3）小結

讃岐産の巴紋軒丸瓦 SM2 型式・連巴紋軒平瓦 SH3 型式のセットは、播磨産巴紋軒丸瓦 HM5・6 型式・連巴紋軒平瓦 HH9・10 型式と、大きさや紋様構成が酷似し、生産地が異なっても、軒先紋様を統一する意識が働いたと指摘される〔前田 02〕。さらに、山城産巴紋軒丸瓦 KM9A・12・13 型式も大きさや紋様構成が似通う。軒瓦の瓦当紋様は、型紙又は実物を基にして、各地で瓦当範の製作を行ったと考えざるを得ない。

また、以上の讃岐産・播磨産軒丸瓦・軒平瓦は、瓦当紋様は異なるものの、播磨産蓮華紋軒丸瓦 HM1 型式・唐草紋軒平瓦 HH1 型式や、山城産剣巴紋軒平瓦 KH6・7 形式と大きさがほぼ揃う。

このように、金剛心院造営時の軒瓦は生産地が異なっても、規格を重視したことが窺える。

註 1 各軒瓦の型式番号は、『鳥羽 I』の分類に準ずる。これに加えて、範傷の進行をアルファベットの後に数字で付した。なお、HM6C 型式は HM6A 型式と同範なのでこれに含めた。

註 2 報告書の NM1 型式・SH1 型式・KH9 型式は、当該期ではないので、指定から除いた。このため、軒丸瓦・軒平瓦の点数が『鳥羽 I』と異なる。

引用・参考文献（引用文献は観察表と共通）

木村 77：木村捷三郎「出土遺物」『六勝寺跡 六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1976』六勝寺研究会、1977 年

前田 02：前田義明「瓦」『鳥羽離宮跡 I - 金剛心院跡の調査 - 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 20 冊』同研究所、2002 年

謝辞 本文作成にあたり、前田義明・池田征弘・森内秀造・森下英治氏に御教示を得た。また、資料調査にあたり、池田征弘・稲原昭嘉・山上雅弘・斎木巖・森下英治・三好勇太・松尾史子・浜中邦弘氏にお世話になり、明石市文化スポーツ部文化振興課・兵庫県立考古博物館・神戸市教育委員会社会教育部文化財課・香川県埋蔵文化財調査センター・綾川町教育委員会・京都府山城郷土資料館・同志社大学歴史資料館にご配慮を頂いた。記して感謝します。

表3 播磨産軒平瓦接合技法分類表

型式名	a技法（狭端部を接合）	b技法（広端部を接合）	接合部不明	計
HH1A	24	9	66	99
HH1B	4	2	29	35
HH1C	14	12	74	100
HH1D	14	15	48	77
HH1E	4	15	54	73
HH1F	15	12	43	70
HH1G	4	7	14	25
HH1H	38	2	103	143
HH1I		4	5	9
HH1J		2	7	9
HH2	1	1	3	5
HH3		1		1
HH4A	1		2	3
HH4B	1	1	9	11
HH4C			10	10
HH4D		1		1
HH5A		1		1
HH5B			1	1
HH6			1	1
HH7			1	1
HH8A	1		1	2
HH8B		1	1	2
HH9A	4		3	7
HH9B		2	2	4
HH9C	1		3	4
HH9D			3	3
HH10A	3	1	4	8
HH10B			6	6
計	129	89	493	711

表4 播磨 HH1 形式凸面成形分類表

型式名	Ⅰ類：平行叩き			Ⅱ類：無紋叩き		Ⅲ類：ナデ	成形不明	計
	斜方向 平行叩き	縦方向 平行叩き	平行叩き	無紋叩き	無紋叩き後 ナデ	ナデ		
HH1A	2	1	42	25	4	2	23	99
HH1B			1	14		2	18	35
HH1C			1	51	10	10	28	100
HH1D	8	1	44	3		1	20	77
HH1E	1	1	24	22	4	6	15	73
HH1F	3	1	39	7	1		19	70
HH1G			4	8	1	2	10	25
HH1H			5	65	18	6	49	143
HH1I			1	3		3	2	9
HH1J	1		6	1		1		9
計	15	4	167	199	38	33	184	640

表5-1 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6

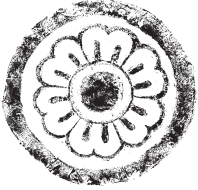
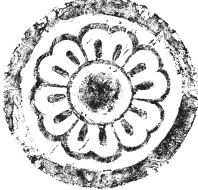
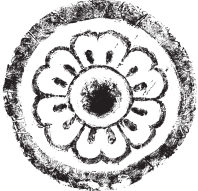
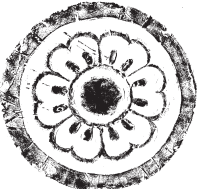


型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HM1A-1	001 003 004		複弁6弁蓮華紋。中房は半球状、周囲に圏線。蓮弁・子葉は凸線、蓮弁は互いに接する。圏線・蓮弁上面丸い。周縁は素紋直立縁。子葉長さ1.6～1.7cm・幅0.7cmで、他より長い。中房径4.9～5.0cm、蓮弁長さ2.9cmで大きい。中房周囲に範傷あり。	瓦当成形不明。瓦当上面横ナデ・下面横ナデ・裏面ナデ。裏面平坦。丸瓦凸面横ナデ・凹面布目糸切痕残存・側面縦ケズリ後ナデ。No.003・004は、瓦当裏面中央が凹み、周囲は土堤状となり、上面ケズリ。裏面凹み円周状にナデ。	播磨産。円勝寺(上村ほか15)瓦72と同範。『鳥羽I』掲載番号図版30-1。HM1Aは162点出土。
HM1A-2	002		HM1A-1と同範で、中房周囲・蓮弁内外範傷進行。	裏面ナデ	播磨産。
HM1B-1	005		HM1Aと同紋。圏線・蓮弁上面丸い。子葉長さ1.5cm・幅0.7cmで短く太い。中房径4.9～5.0cm、蓮弁長さ2.7cm。蓮弁内外に範傷あり。	HM1Aと同様。	播磨産。35、神出窯(春成14)269、神出窯(池田98)855～857と同範。『鳥羽I』掲載番号図版30-2。HM1Bは105点出土。
HM1B-2	006		HM1B-1と同範で、B-1より蓮弁内外範傷進行。	HM1Aと同様。	播磨産。
HM1B	007		HM1Bと同範。	瓦当裏面不定方向の平行タタキ。側面横ケズリ。	播磨産。魚橋窯(今里80)6と同範・同技法。『鳥羽I』掲載番号図版138-137。
HM1B	008		HM1Bと同範。	中房上面・瓦当部裏面不定方向の平行タタキ。	播磨産。

表 5 - 2 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6

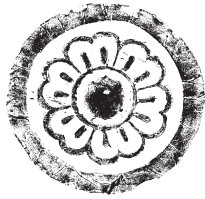

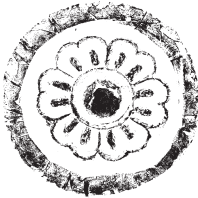
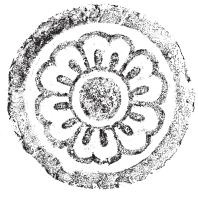
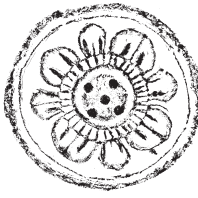
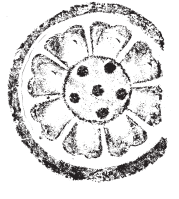
型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HM1C	009 011 012		HM1A と同紋。圏線・蓮弁上面丸い。子葉長さ 1.6 ~ 1.7 cm・幅 0.6 cm で細い。中房径 4.9 cm、蓮弁長さ 2.6 cm。中房周囲・蓮弁内外に範傷あり。瓦当面糸切痕残存のものもある。	HM1A と同様。No. 011・012 は、瓦当裏面中央が凹み、周囲は土堤状となり、上面ケズリ。裏面凹み円周状にナデ。	播磨産。『鳥羽 I』掲載番号図版 30-3。HM1C は 198 点出土。
HM1C	010		HM1C と同範。中房に棒の刺突 2ヶ所あり。	裏面ナデ。	播磨産。
HM1D	013 014		HM1A と同紋。圏線・蓮弁上面鋭い。子葉長さ 1.7 ~ 1.8 cm・幅 0.7 cm。中房径 4.9 cm、蓮弁長さ 2.6 cm。蓮弁子葉基部・蓮弁接合部に範傷あり。	HM1A と同様。No. 014 は丸瓦取り付け位置低い。	播磨産。三本松窯(春成 14) 35 と同範。『鳥羽 I』掲載番号図版 30-4。HM1D は 134 点出土。
HM1E	015 016		HM1A と同紋。圏線・蓮弁上面鋭い。子葉長さ 1.3 cm・幅 0.7 cm で最短。中房径 5.0 cm、蓮弁長さ 2.2 cm で最小。蓮弁内・外区に範傷あり。	HM1A と同様。No. 016 は丸瓦凸面・凹面成形痕跡明瞭。	播磨産。『鳥羽 I』掲載番号図版、No. 015 は図版 30-5、No. 016 は図版 139-140。HM1E は 136 点出土。
HM2	017		複弁 8 弁蓮華紋。蓮弁は上 4 弁・下 4 弁で、下は覗き弁となる。凸中房で中央盛り上がり、1+4。周囲に葦帯。周縁は素紋直立縁。瓦当面に範傷少しあり。	瓦当成形不明。瓦当上面縦ナデ、下面横ケズリ、裏面盛り上がりナデ。	播磨産。魚住窯(植山 85) 37-1 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-6。HM2 は 4 点出土。
HM3A	018		単弁 8 弁蓮華紋。凸中房、1+5。弁端切り込む。周縁は素紋直立縁。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。丸瓦部平瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ケズリ。	播磨産。三本松窯(春成 14) 32・神出窯 310、尊勝寺(木村ほか 77) SWA03 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-7。HM3A は 2 点出土。

表 5-3 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HM3B	019		HM3A と同紋。凸中房で径大きく、1+8。弁端切り込む。蓮弁外に範傷多い。	HM1A と同様。裏面盛り上がる。	播磨産。三本松窯(春成 14) 31、勝光明院経蔵(前田ほか 79) 19 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-8。HM3B は 5 点出土。
HM4	020		右巻三巴紋。頭は連結、尾は接しない。巴の上面平坦。界線太い。珠紋 35 個。周縁は素紋直立縁。珠紋帯に範傷あり。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。	播磨産。三本松窯(春成 14) 58 と同紋、勝光明院経蔵(前田ほか 79) 23、法金剛院(小松ほか 98) 52-5、成勝寺(網ほか 95) 6 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-9。HM4 は 1 点出土。
HM5A	021		左巻三巴紋。頭は離れ、尾は周縁に接する。巴の幅広い。巴の上面平坦。周縁は素紋直立縁。瓦当面に範傷多い。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。	播磨産。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-10。HM5A は 37 点出土。
HM5B	022		HM5A と同紋で、大型。頭は離れ、尾は周縁に接しない。A より巴の幅狭い。瓦当面に範傷あり。	HM1A と同様。	播磨産。三本松窯(春成 14) 73 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-11。HM5B は 15 点出土。
HM5C	023		HM5B と同紋で、同径。B より頭接近し、A・B より巴の幅狭い。瓦当面に範傷多い。	HM1A と同様。	播磨産。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-12。HM5C は 10 点出土。
HM6A-1	024		右巻三巴紋。頭は離れ、尾は周縁に接する。巴の幅広い。巴の上面平坦。周縁は素紋直立縁。瓦当面に範傷あり。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。	播磨産。神出窯(池田 98) 885 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 31-13。HM6A は 17 点出土。

表5-4 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HM6A-2	025		HM6A-1と同範。A-1より瓦当面範傷進行。	HM1A-1と同様。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版31-15(旧HM6C)。
HM6B	026		HM6Aと同紋。巴の頭やや丸く、幅狭い。	HM1Aと同様。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版31-14。HM6Bは4点出土。
SM 1	027		単弁6弁蓮華紋。中房は盛り上がり、周囲に圏線。間弁独立。界線あり。周縁は直立素紋縁。	瓦当成形不明。瓦当下面横ナデ、裏面ナデ。裏面縄タタキ。	讃岐産。ますえ畑窯(松本68)20-3、庄屋原窯(安藤67)137、宝菩提院廃寺(高橋87)と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版32-16。SM1は1点出土。
SM2A-1	028		左巻三巴紋。頭は離れ、尾は他の巴に1ヶ所だけ接する。巴の幅太く、上面丸い。周縁は素紋直立縁。瓦当面中央に範割れがあり、2ヶ所鏝で留める。範傷あり。	瓦当成形不明。瓦当上面縦ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ後縄タタキ。丸瓦凸面縦ナデ、凹面布目、側面縦ケズリ。	讃岐産。丸山窯(森下16)TMY101a1、陶邑(松本68)20-6と同範。『鳥羽I』掲載番号図版37-17。SM2Aは34点出土。
SM2A-2	029		SM2A-1と同範。A-1より範傷進行。範割れ・鏝がやや明瞭。	SM2A-1と同様。瓦当裏面ナデ後縄タタキ。	讃岐産。
SM2B	030		SM2Aと同紋。Aより頭は離れ、尾は他の巴に接する。瓦当面に範傷あり。	SM2Aと同様。瓦当裏面ナデ。	讃岐産。庄屋原窯(安藤67)136と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版32-18。SM2Bは28点出土。

表 5- 5 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6


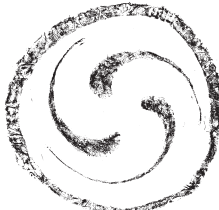
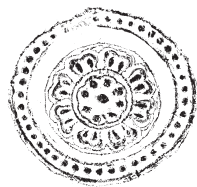
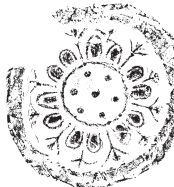
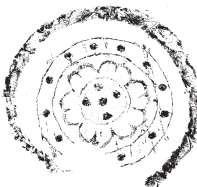

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
SM3A	031		左巻三巴紋。頭は離れ、尾は接しない。巴の幅狭く、尾は短く、上面丸い。周縁は素紋直立縁。	SM2A と同様。瓦当裏面縄タタキ。	讃岐産。『鳥羽 I』掲載番号図版 32-19。SM3A は 2 点出土。
SM3B	032		SM3A と同紋で、A より頭離れる。	SM2A と同様。瓦当裏面縄タタキ。丸瓦広端部凸面の接合面にヘラでキザミを付ける。	讃岐産。『鳥羽 I』掲載番号図版 32・138-20。SM3B は 3 点出土。
KM 1	033		複弁 8 弁蓮華紋。凸中房で花形、1+8。蓮弁区は一段高く、輪郭線廻る。周縁は直立縁で、上面密な珠紋 42 個。	瓦当成形不明。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。丸瓦部平瓦凸面縦ナデ、凹面布目後ナデ、側面縦ケズリ。	山城産。播磨から範を搬入し、鳥羽田中殿周辺で生産。久留美窯（池田 99）NM5、成菩提院陵（前田ほか 87）8-1 と同範。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-21。KM 1 は 2 点出土。
KM2	034		複弁 6 弁蓮華紋。凸中房、1+6。間弁独立、周縁に接する。周縁は素紋直立縁。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面ナデ、裏面オサエ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 37-22。KM2 は 11 点出土。
KM3	035		複弁 6 弁蓮華紋。凸中房、1+4。蓮弁は互いに接する。外区に界線・珠紋 12 個。周縁は素紋直立縁。外区に範傷多い。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面・下面横ケズリ、裏面オサエ・下半ケズリ。	山城産。尊勝寺（奈文研 61）31 型式、円勝寺（上村ほか 15）瓦 12 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-23。KM3 は 1 点出土。
KM4	036		単弁 4 弁蓮華紋。中房は半円形。蓮弁基部連結。間弁独立。界線は花形。珠紋 23 個。周縁は直立素紋縁。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当下面横ナデ、裏面オサエ。	山城産。法住寺殿（網ほか 11）35 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-24。KM4 は 2 点出土。

表 5 - 6 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6



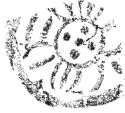



型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
KM5	037		単弁蓮華紋。凹中房で、右巻巴配す。尾は周囲に接する。密な珠紋。周縁は直立素紋縁。	瓦当成形不明。瓦当下面縄タタキ、裏面オサエ	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-25。KM5 は 1 点出土。
KM6	038		単弁 5 弁・複弁 1 弁の単複混合蓮華紋。圏線中房、1+4、凸線・突起配す。蓮弁・間弁周縁に接する。周縁は素紋直立縁。	瓦当成形不明。瓦当上面・下面横ナデ、裏面ナデ。丸瓦凸面縦縄タタキ、凹面布目、側面縦ケズリ。	山城産。尊勝寺(奈文研 61) 82 型式と同範。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-26。KM6 は 54 点出土。
KM7	039		蓮華紋。圏線中房、1+4。蓮弁は不定方向。周縁は素紋直立縁。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当下面縄タタキ、裏面オサエ。	山城産。朝堂院(平博 77) 228・円勝寺(上村ほか 15) 瓦 34 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-27。KM7 は 3 点出土。
KM8	040		単弁蓮華紋。圏線中房。蓮弁は互いに接する。子葉なし。周縁は素紋直立縁。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面ナデ、裏面ナデ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-28。KM8 は 8 点出土。
KM9A	041		右巻三巴紋。頭は離れ、尾は界線に接しない。外区に界線、密な珠紋を大小交互に配す。周縁は素紋直立縁。内外区に範傷多い。	瓦当成形不明。瓦当上面ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。裏面平坦。丸瓦凸面縦縄タタキ後ナデ、凹面布目、側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-29。KM9A は 72 点出土。
KM9B	042		KM9A と同紋で、小型。尾は他の巴に接する。巴上面丸い。	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当上面ナデ、裏面ナデ。	山城産。法住寺殿(柴野 84) 60-24 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 33-30。KM9B は 1 点出土。

表 5-7 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6






型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
KM9C	043		KM9Aと同紋。界線なし。A・Bより尾幅広い。	瓦当成形不明。瓦当下面横ナデ、裏面ナデ。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版33-31。KM9Cは1点出土。
KM10A	044		左巻三巴紋。頭は離れ、尾は界線に接しない。密な珠紋。周縁は素紋直立縁。小型	瓦当裏面溝付け丸瓦挿入成形。瓦当下面ナデ、裏面ナデ。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版33-32。KM10Aは1点出土。
KM10B	045		KM10Aと同紋。界線なし。巴上面丸い。	KM10Aと同様。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版33-33。KM10Bは11点出土。
KM11	046		右巻四巴紋。頭は離れ、尾は界線に接する。外区に界線、密な珠紋23個。周縁は素紋直立縁。	瓦当成形不明。瓦当上面ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。裏面平坦。丸瓦平瓦凸面縦縄タタキ、凹面布目、側面縦ケズリ。	山城産。尊勝寺(奈文研61)148型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版33-34。KM11は4点出土。
KM12	047		右巻三巴紋。頭は連結、尾は周縁に接しない。巴上面丸い。周縁は素紋直立縁。	瓦当成形不明。瓦当上面縦ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。裏面平坦。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版34-35。KM12は45点出土。
KM13A	048		右巻三巴紋。頭は離れ、尾は周縁に接する。巴上面丸い。周縁は素紋直立縁。	瓦当成形不明。瓦当上面縦ナデ、下面横ナデ、裏面ナデ。丸瓦凸面縦縄タタキ、凹面布目、側面縦ケズリ。裏面平坦。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版34-36。KM13Aは8点出土。

表 5 - 8 軒丸瓦観察表

拓本 S=1/6

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
KM13B	049		KM13A と同紋。A より巴幅狭い。	瓦当裏面丸瓦貼付成形。瓦当上面・下面・裏面ナデ。裏面平坦。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 34-37。KM13B は 4 点出土。
KM14A	050		左巻三巴紋。頭は離れ、尾は周縁に接しない。巴幅広い。周縁は素紋直立縁。小型。	瓦当成形不明。瓦当上面縦ナデ、下面ナデ、裏面オサエ。裏面盛り上がる。	山城産。朝堂院（平博 77）248 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 34-38。KM14A は 1 点出土。
KM14B	051		KM14A と同紋で、小型。A より巴幅狭い。	KM14A と同様。丸瓦凸面縦縄タタキ、凹面布目、側面縦ケズリ。裏面盛り上がる。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 34-39。KM14B は 12 点出土。
KM14C	052		KM14B と同紋で、小型。B より巴幅狭い。	KM14A と同様。裏面盛り上がる。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 34-40。KM14C は 6 点出土。

表6-1 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HH1A	053 074		外行3転唐草紋。中心紋は上向きC字。唐草は連続。主葉1転目は支葉内1外1、2転目内3、3転目内3外1。HH1Aのみ1転目外に支葉1あり。唐草太く上面丸い。周縁は素紋直立縁。瓦当面に範傷1ヶ所あり。	段頸。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面平行タタキ、側面縦ケズリ。No.074は、接合部平瓦端面にヘラキザミをつける。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版35-42。HH1Aは99点出土。
HH1A	054		HH1Aと同範で、瓦当部の反り強い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面平行タタキ。	播磨産。
HH1B	055		HH1Aと同紋。1転目主葉先端巻き強い。唐草上面鋭い。瓦当面左側を範型縮小。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面ナデ。	播磨産。三本松窯(春成14)86と同範。『鳥羽I』掲載番号図版35-43。HH1Bは35点出土。
HH1C-1	056 057		HH1Aと同紋。唐草は彫りが深く、上面鋭い。瓦当面右側を範型縮小。瓦当面に範傷1ヶ所あり。No.057は下周縁広い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面無紋タタキ後縦ナデ。	播磨産。神出窯(池田98)899・900と同範。『鳥羽I』掲載番号図版35-44。HH1Cは100点出土。
HH1C-2	058		HH1C-1と同範で、C-1より範傷進行。瓦当面中央に縦方向細凸線を確認。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面無紋タタキ。	播磨産。
HH1C-2	059		HH1C-2と同範。瓦当面中央に縦方向細凸線を確認。	HH1Aと同様。平瓦凸面ナデ。凹面布目、糸切痕残存。凸面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版138-138。
HH1C-3	060		HH1C-1・2と同範で、C-2より範傷進行。C-1・2より唐草太くなる。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。
HH1D	061		HH1Aと同紋。中心紋先端巻き強い。左2転目3・4支葉の巻が揃う・唐草太く上面丸い。範傷少しあり。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面斜平行タタキ。	播磨産。魚橋窯(今里80)9と同範。平安宮太政官(前田95)157-13と同範。『鳥羽I』掲載番号図版35-45。HH1Dは77点出土。

表6-2 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6









型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HH1D	062		HH1Dと同範で、瓦当部の反り強い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面平行タタキ。	播磨産。
HH1E	063		HH1Aと同紋。左1転2転間、2転3転間の芽が凹みあり。左1転2転間の芽が主葉に接しない。唐草上面鋭い。範傷なし。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面ナデ。	播磨産。法住寺殿(網09)瓦30と同範。蓮華王院(中谷16)56と同紋。『鳥羽1』掲載番号図版35-46。HH1Eは73点出土。
HH1F	064 065		HH1Aと同紋。中心紋先端巻き強い。唐草太く上面丸い。範傷1ヶ所あり。No.065は平瓦凹面狭端側ヘラ記号あり。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面斜平行タタキ。	播磨産。『鳥羽1』掲載番号、No.64は図版35-47、No.65は図版138-139。HH1Fは70点出土。
HH1F	066		HH1Fと同範。瓦当面中央に縦方向細凸線を確認。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦を接合、平瓦凸面調整不明。	播磨産。
HH1G	067		HH1Aと同紋。1転目主葉先端巻き強い。両1転2転間・2転3転間の芽が主葉に接しない。唐草太く上面丸い。範傷なし。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。尊勝寺(奈文研61)239型式と同紋。『鳥羽1』掲載番号図版35-48。HH1Gは25点出土。
HH1G	068		HH1Gと同範で、瓦当部の反り強い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面平行タタキ。	播磨産。
HH1H-1	069 071		HH1Aと同紋。左1転2転間の芽が主葉に接しない。唐草上面鋭い。瓦当面下半に斜範傷多い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面無紋タタキ後縦ナデ。No.071は、平瓦の取り付け位置が低く、バチ形顎。	播磨産。三本松窯(春成14)85と同紋。『鳥羽1』掲載番号図版36-49。HH1Hは143点出土。
HH1H-2	070		HH1H-1と同範で、H-1より範傷進行。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面無紋タタキ後ナデ。	播磨産。

表6-3 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6









型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HH1I	072		HH1Aと同紋。1転目主葉先端巻き強い。両2転3転間の芽が主葉に接しない。両3転目外支葉が周縁に接する。唐草上面鋭い。瓦当面中央に横範傷多い。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版36-50。HH1Iは9点出土。
HH1J	073		HH1Aと同紋。中心紋の幅23mmで最小。範傷少しあり。	HH1Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面斜平行タタキ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版36-51。HH1Jは9点出土。
HH2	075		外行2転唐草紋。中心紋は上向きC字で、下向き三葉紋配す。唐草は連続。瓦当面両側を範型縮小。周縁は素紋直立縁。	段顎。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。瓦当上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面・側面縦ナデ。	播磨産。神出窯(池田98)902、尊勝寺(奈文研61)223型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版36-52。HH2は5点出土。
HH3	076		外行3転唐草紋。中心下部に水滴形配す。唐草は分離。瓦当面両側を範型縮小。周縁は素紋直立縁。瓦当面横範傷多い。	段顎。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。瓦当上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目後ナデ、凸面斜平行タタキ、側面ナデ。	播磨産。三本松窯(春成4)101・102、尊勝寺(奈文研61)222型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版36-53。HH3は1点出土。
HH4A	077		外行1転唐草紋。中心紋は上向きC字で、中心に水滴形配す。唐草は連続。周縁は素紋直立縁。	段顎。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面・側面ナデ。	播磨産。神出(池田99)903、尊勝寺(奈文研61)224型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版36-54。HH4Aは3点出土。
HH4B	078		HH4Aと同紋。Aより幅が狭い。1転目外支葉の形状異なる。	HH4Aと同様。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。平瓦凸面平行タタキ。	播磨産。六波羅密寺(元興寺72)5-8と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版36-55。HH4Bは11点出土。
HH4C	079		HH4Aと同紋。1転目外支葉の形状異なる。中心水滴形ゆがむ。	HH4Aと同様。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版36-56。HH4Cは10点出土。
HH4D	080		HH4Aと同紋。1転目外支葉の形状異なる。	HH4Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面無紋タタキ後縦ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版36-57。HH4Dは1点出土。

表6-4 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6








型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HH5A	081		外行3転唐草紋。中心紋は下向きC字。唐草は連続。唐草3転目は両側小さい。周縁は素紋直立縁。瓦当面範傷多い。	段顎。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。瓦当上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目後ナデ、凸面・側面縦ナデ。	播磨産。吉田南遺跡(春成15)88、尊勝寺(奈文研61)251型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-58。HH5Aは1点出土。
HH5B	082		HH5Aと同紋で唐草は2回反転。2転目外支葉が周縁に接する。	HH5Aと同様。平瓦凸面平行タタキ。	播磨産。魚住窯(大村ほか83)587、尊勝寺(奈文研61)251型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-59。HH5Bは1点出土。
HH6	083		外行唐草紋。中心紋なし。唐草は分離。周縁は素紋直立縁。	段顎。瓦当裏面に平瓦を接合。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凸面ナデ。	播磨産。三本松窯(春成14)129、白河(市理文96)529と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-60。HH6は1点出土。
HH7	084		外行唐草紋。唐草は連続。周縁は素紋直立縁。	バチ形顎。瓦当裏面に平瓦を接合。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面・凸面ナデ。	播磨産。尊勝寺(奈文研61)228型式と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-61。HH7は1点出土。
HH8A	085		外行2転唐草紋。中心紋は半裁花紋。唐草は連続。周縁は素紋直立縁。	段顎。瓦当裏面に平瓦を接合。瓦当上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面・凸面ナデ。	播磨産。三本松窯(春成14)144と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-62。HH8Aは2点出土。
HH8B	086		HH8Aと同紋。唐草太い。	HH8Aと同様。	播磨産。三本松窯(春成14)145と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版37-63。HH8Bは2点出土。
HH9A	087		5単位連巴紋。巴は右巻三巴紋。頭は接し、尾は接続して圏線となる。巴上面平坦。周縁は素紋直立縁。瓦当面範傷多い。	段顎。瓦当裏面に平瓦狭端面を接合、両側面に粘土を付加する包込技法。瓦当部上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面平行タタキ後ナデ、側面縦ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-64。HH9Aは7点出土。

表6-5 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6








型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
HH9B	088 089		HH9Aと同紋で、小型。巴上面盛り上がる。	HH9Aと同様。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。平瓦凸面斜無紋タタキ後ハケ目・ナデ。No.089は、平瓦凸面に軒平瓦范型によるタタキ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-65。HH9Bは4点出土。
HH9C	090		HH9Aと同紋。巴上面やや尖る。瓦当面范傷多い。	HH9Aと同様。瓦当裏面に平瓦を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-66。HH9Cは4点出土。
HH9D	091		HH9Aと同紋。巴上面尖る。瓦当面范傷多い。	HH9Aと同様。瓦当裏面に平瓦を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-67。HH9Dは3点出土。
HH10A	092		5単位連巴紋。巴は右巻き三巴紋。頭・尾は離れる。巴幅広く、上面盛り上がる。周縁は素紋直立縁。	段顎。瓦当裏面に平瓦広端面を接合。瓦当上面・下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目後ナデ、凸面・側面縦ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-68。HH10Aは8点出土。
10B	093		HH10Aと同紋。Aより巴幅が狭い。	HH10Aと同様。瓦当裏面に平瓦を接合。平瓦凸面ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版37-69。HH10Bは6点出土。
SH2	094		陰刻又は陽刻の偏行唐草紋。唐草主葉は連続せず、支茎は3つで強く巻き込む。瓦当面范傷多い。	直線顎。瓦当成形不明。瓦当上面横ケズリ、下面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面斜縄タタキ、側面縦ナデ。	讃岐産。丸山窯(森下16) TMY203a、綾川寺(安藤67)156、庄屋原窯(安藤67)140と同紋。鳥羽南殿(細谷68)H6と同范。平安京北辺四坊(加納04)97-15・16と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版38-71。SH2は2点出土。
SH3A	095		5単位連巴紋。巴は右巻三巴紋。頭は左1・2・5は接し、他は離れる。尾は全て連続して、圏線となる。巴上面やや丸い。周縁は素紋直立縁。	直線顎。瓦当成形不明。瓦当上面・下面横ケズリ。平瓦凹面布目、凸面斜縄タタキ、側面縦ケズリ。	讃岐産。丸山窯(森下16) MY201a5-2・大谷窯(森ほか71)図版25-2と同范。『鳥羽I』掲載番号図版38-72。SH3Aは27点出土。

表 6-6 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6








型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
SH3B	096		SH3A と同紋。頭・尾は全て接する。巴上面尖る。	段顎。瓦当成形不明。瓦当上面・下面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面斜縄タタキ、側面縦ケズリ。	讃岐産。丸山窯（森下 16）MY201a5-1、多度津鴨神社（安藤 67）328 と同範。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-73。SH3B は 14 点出土。
SH3C	097		SH3B と同紋。頭・尾は全て接する。巴上面盛り上がる。	SH3A と同様。	讃岐産。丸山窯（森下 16）MY201a5-3 と同範。平安宮南面大垣（常磐井 80）NH13 と同範。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-74。SH3C は 3 点出土。
KH1	098 099		左 6 転・右 7 転外行唐草紋。中心紋は下向き C 字。唐草は連続。唐草右端は周縁に接する。周縁は素紋直立縁。瓦当面布目残存。	薄顎。完全折曲成形。瓦当下面縦縄タタキ、裏面オサエ曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ。	山城産。尊勝寺（奈文研 61）179 型式、六波羅密寺（元興寺 72）5-1・2 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-75。KH1 は 6 点出土。
KH2	100		外行 3 転唐草紋。中心紋は楕円形。唐草は連続。外区に界線。周縁は素紋直立縁。	薄顎。完全折曲成形。調整不明。	山城産。法住寺殿（網 09）瓦 23、栗栖野窯（吉村 93）図 26-96 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-76。KH2 は 1 点出土。
KH3	101		左偏行唐草紋。唐草は連続。周縁は素紋直立縁。瓦当面布目残存。	薄顎。完全折曲成形。瓦当下面横ナデ、裏面縄タタキ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-77。KH3 は 1 点出土。
KH4	102		連巴紋。右卷三巴・米印を交互に配す。巴頭・尾は離れる。周縁は素紋直立縁。平瓦凸面にヘラ記号あり。	薄顎。完全折曲成形。瓦当下面横ナデ、裏面縄タタキ曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ。	山城産。法住寺殿（加納 10）瓦 17、東寺東門（引原 92）16 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-78。KH4 は 7 点出土。
KH5A-1	103		剣巴紋。陰刻剣頭 2 単位・右卷三巴を交互に配す。巴頭は離れ、尾は周縁に接する。剣頭紋は上に珠紋配し、配置は放射状。	段顎。完全折曲成形。瓦当下面縄タタキ、裏面オサエ。平瓦凸面縦縄タタキ。	山城産。尊勝寺（奈文研 61）296 型式、法住寺殿（加納 10）瓦 15 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 38-79。KH5A は 4 点出土。

表6-7 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/6

型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
KH5A-2	104		KH5A-1 と同範で、A-1 より範傷進行。	KH5A と同様。平瓦凸面縦ナデ。	山城産。
KH5B	105		剣巴紋。陰刻剣頭2単位・左巻三巴を交互に配す。巴頭は連結し、尾は周縁に接する。剣頭は短い。	段顎。完全折曲成形。瓦当下面・裏面縄タタキ曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ。	山城産。鳥羽北殿(上村82)13-8、法住寺殿(柴野84)66-98と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版38-80。KH5Bは1点出土。
KH6A	106		剣巴紋。中心に左巻三巴、両側に陰刻剣頭4単位配す。巴頭は連結し、尾は接しない。剣頭紋配置は垂直。瓦当布目残存。	段顎。完全折曲成形。瓦当上面ケズリ面取、下面横ケズリ、裏面オサエ曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面・側面縦ナデ。	山城産。上賀茂神社(木村ほか80)211と同紋。『鳥羽I』掲載番号図版38-81。KH6Aは13点出土。
KH6B	107		KH5A と同紋で、Aより剣頭長い。	KH5A と同様。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版39-82。KH6Bは8点出土。
KH7A	108		剣巴紋。中心に右巻三巴、両側に陰刻剣頭4単位配す。巴頭は連結し、尾は離れる。剣頭紋配置は垂直。	段顎。完全折曲成形。瓦当上面ケズリ面取、下面・裏面横ナデ。平瓦凹面布目、凸面・側面縦ナデ。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版39-83。KH7Aは3点出土。
KH7B	109		KH7A と同紋で、Aより剣頭長い。	KH7A と同様。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版39-84。KH7Bは2点出土。
KH7C	110		KH7A と同紋で、Aより剣頭短い。	KH7A と同様。裏面曲げ皺あり。	山城産。『鳥羽I』掲載番号図版39-85。KH7Cは2点出土。
KH8A	111		陰刻剣頭紋。7単位。中心にXを配す。鎬は三角形。剣頭紋配置は垂直。小型。	段顎。完全折曲成形。瓦当下面・裏面ナデ。平瓦凹面布目、凸面縦縄タタキ、側面縦ナデ。	山城産。円勝寺(上村ほか15)瓦289と同範。『鳥羽I』掲載番号図版39-86。KH8Aは1点出土。

表 6 - 8 軒平瓦・鬼瓦観察表

軒平瓦拓本 S=1/6 鬼瓦拓本 S=1/8







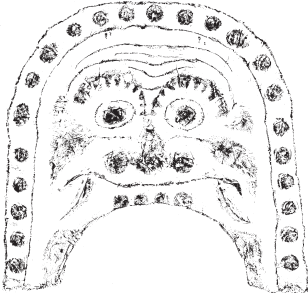
型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
KH8B	112		陰刻剣頭紋。8 単位。鑄は棒状。剣頭紋配置は垂直。	段顎。完全折曲成形。瓦当上面ケズリ面取、下面縄タタキ横ケズリ、裏面ナデ曲げ皺あり。平瓦凹面布目、凸面オサエ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-87。KH8B は 17 点出土。
KH8C	113		KH8B と同紋。右端は半分で鑄なし。剣頭紋配置は放射状。筈傷多い。平瓦凸面にヘラ記号あり。	KH8B と同様。瓦当部裏面縄タタキ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-88。KH8C は 1 点出土。(図版 137-83)
KH8D	114		KH8B と同紋。左端は半分で鑄なし。剣頭紋配置は放射状。平瓦凸面にヘラ記号あり。	KH8B と同様。瓦当部裏面縄タタキ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-89。KH8D は 1 点出土。(図版 137-89)
KH8E	115		KH8B と同紋。鑄は三角形。剣頭紋配置は放射状。	KH8B と同様。瓦当裏面・平瓦凸面横ナデ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-90。KH8E は 5 点出土。
KH8F	116		KH8B と同紋。剣頭紋右端は半分で鑄なし。剣頭紋配置は垂直。瓦当面布目残存。	KH8B と同様。瓦当裏面・平瓦凸面横ナデ。	山城産。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-91。KH8F は 2 点出土。
KH8G	117		KH8B と同紋。鑄は棒状。剣頭紋配置は垂直。小型。	KH8B と同様。完全折曲成形。調整不明。	山城産。法住寺殿(柴野 84) 66-95 と同紋。『鳥羽 I』掲載番号図版 39-92。KH8G は 1 点出土。
鬼 1A	118		鬼面紋鬼瓦。目・頬・鼻が盛り上がる。額に三本皺あり。眉の下側に縦皺あり。歯・牙は上側のみで、下顎無し。外区に密な珠紋配す。裏面は平坦、固定施設なし。中型。	筈型による成形。側面・刳形内縦ケズリ、裏面縦ナデ。	播磨産。玉津田中遺跡(春成 14) 500 と類似。『鳥羽 I』掲載番号図版 40-94。鬼 1A は 1 点出土。

表 6-9 軒平瓦・鬼瓦観察表

拓本 S=1/8

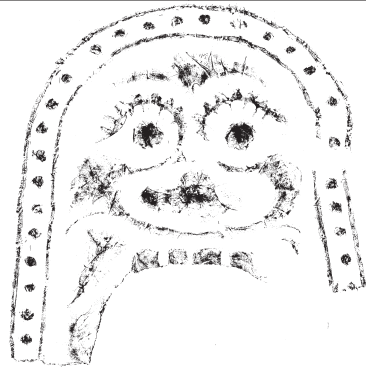

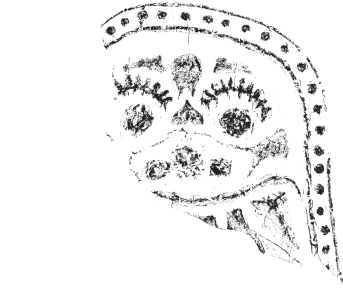


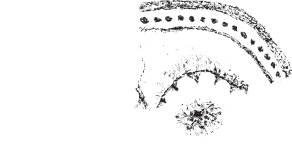
型式番号	指定番号	拓本・図	瓦当紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
鬼 1B	119		鬼 1A と同紋。額に皺無し。眉の上下側に縦皺あり。裏面は平坦、固定施設なし。中型。	鬼 1A と同様。	播磨産。『鳥羽 1』掲載番号図版 40-95。鬼 1B は 1 点出土。
鬼 1C	120		鬼 1A と同紋。額の皺は U 字形。割り形が隅丸方形。両足部切り取り。裏面は平坦、固定施設なし。大型でやや縦長。	鬼 1A と同様。	播磨産。三本松窯 (春成 14) 189・190 と同紋。鬼 1C は 4 点出土。
鬼 1D	121		鬼 1A と同紋。鼻が高い。裏面は平坦、固定施設なし。小型。	鬼 1A と同様。	播磨産。鬼 1D は 8 点出土。
鬼 1E	122		鬼 1A と同紋。内区・外区が同一面で、界線が幅広い。小型。	范型による成形。側面・裏面縦ナデ。	播磨産。神出遺跡 (春成 14) 417 と同紋。鬼 1E は 6 点出土。
鬼 2	123		鬼面紋鬼瓦、右足部残存。外区は竹管押捺で、珠紋とする。小型。	側面・割形内縦ケズリ、裏面ハケ目。	播磨産。鬼 2 は 2 点出土。
鬼 3	124		鬼面紋鬼瓦。内区・外区が同一面で、小型の珠紋配す。裏面は平坦、固定施設なし。小型。	范型による成形。側面縦ナデ・裏面縦ケズリ。	産地不明。鬼 3 は 1 点出土。

表7-1 記号瓦・丸瓦・平瓦観察表

形式番号	指定番号	紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
ㄏ1	125	玉縁丸瓦。丸瓦凸面狭端部にㄏ記号あり。	丸瓦凸面縦縄タタキ。凹面布目。側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図19-96。
ㄏ2	126	玉縁丸瓦。丸瓦凸面狭端部にㄏ記号あり。	丸瓦凸面縦縄タタキ、後ナデ。凹面布目、側縁面取。側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図19-97。
ㄏ3	127	玉縁丸瓦。丸瓦凸面狭端部にㄏ記号あり。	丸瓦凸面縦縄タタキ、後狭端部ナデ。凹面布目、側縁面取。側面縦ケズリ。玉縁部凸面ナデ。	山城産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図19-98。
ㄏ4	128	玉縁丸瓦。丸瓦凸面狭端部にㄏ記号あり。	丸瓦凸面縦縄タタキ。凹面布目。側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図19-99。
ㄏ5	129	玉縁丸瓦。丸瓦凸面狭端部にㄏ記号あり。	丸瓦凸面縦縄タタキ。凹面布目、側縁面取。側面縦ケズリ。	山城産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図19-100。
丸1	130	玉縁丸瓦。長さ35.9 cm・広端幅16.2 cm・狭端幅13.5 cm・玉縁幅10.1 cm。	凸面ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面横ナデ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版41-101。
丸2	131	玉縁丸瓦。長さ33.7 cm・広端幅16.5 cm・狭端幅14.7 cm・玉縁幅9.1 cm。	凸面縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。分割凸帯あり。端面内側面取。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面横ナデ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版41-102。
丸3	132	玉縁丸瓦。長さ37.8 cm・広端幅17.0 cm・狭端幅15.5 cm・玉縁幅11.8 cm。	凸面縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面横ナデ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版42-103。
丸4	133	玉縁丸瓦。長さ33.5 cm・広端幅16.7 cm・狭端幅14.7 cm・玉縁幅10.2 cm。	凸面縦平行タタキ後ナデ。凹面布目、糸切痕残存。端面内側面取。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面横ナデ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版42-104。
丸5	134	玉縁丸瓦。残存長35.4 cm・広端幅18.3 cm。	凸面縦タタキ後横ナデ。凹面布目。側面縦ㄏ切り。布綴じ合わせ2ヶ所あり。	讃岐産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版43-105。
丸6	135	玉縁丸瓦。長さ38.1 cm・広端幅16.3 cm・狭端幅14.5 cm・玉縁幅11.4 cm。	凸面横ナデ。凹面布目、糸切痕残存。広端部内面取。側面縦ケズリ。玉縁部凸面横ナデ。	讃岐産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版43-106。
丸7	136	玉縁丸瓦。残存長21.2 cm・狭端幅15.0 cm・玉縁幅9.5 cm。丸瓦・玉縁接合面なだらか。	凸面ナデ。凹面布目。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面横ナデ。布綴じ合わせあり。	讃岐産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版44-107。
丸8	137	玉縁丸瓦。残存長30.4 cm・狭端幅16.6 cm・玉縁幅12.0 cm。	成形は粘土帯(幅約3 cm)積み上げ。凸面縦タタキ後ナデ。凹面布目。側面縦ㄏ切り。玉縁部凸面縦タタキ後横ナデ。布綴じ合わせあり。	讃岐産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版44-109。
平1	138	長さ32.9 cm・広端幅24.1 cm・狭端幅23.0 cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目後ナデ、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。端部内外面取。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版47-110。
平2	139	長さ33.6 cm・広端幅24.5 cm・狭端幅23.4 cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版47-111。
平3	140	長さ33.0 cm・広端幅23.2 cm・狭端幅22.9 cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。端部内外面取。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版48-112。
平4	141	長さ32.9 cm・広端幅23.4 cm・狭端幅23.1 cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版48-113。
平5	142	長さ32.6 cm・広端幅24.5 cm・狭端幅22.5 cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目、部分的にナデ。端面・側面ケズリ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版49-114。
平6	143	長さ32.6 cm・広端幅24.1 cm・狭端幅24.1 cm。	凸面縦平行タタキ。凹面布目。端面・側面ケズリ。両端部内外面取。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版49-115。
平7	144	長さ32 cm・広端幅22.7 cm・狭端幅22.5 cm。	凸面縦平行タタキ。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。	播磨産。『鳥羽Ⅰ』掲載番号図版50-116。

表7-2 記号瓦・丸瓦・平瓦観察表

形式番号	指定番号	紋様の特徴	成形技法の特徴	備考
平8	145	長さ32.1cm・広端幅22.6cm・狭端幅22.4cm。	凸面斜平行タタキ。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ。端部内外面面取。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版50-117。
平9	146	長さ35.3cm・広端幅25.2cm・狭端幅24.3cm。	凸面縦無紋タタキ、後縦ナデ。凹面布目。端面・側面ケズリ	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版52-118。
平10	147	長さ37.1cm・広端幅25.2cm・狭端幅24.9cm。	凸面縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ケズリ。端面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版51-119。
平11	148	長さ35.9cm・広端幅24.1cm・狭端幅23.5cm。	凸面縦ナデ。凹面布目。側面縦ケズリ。端面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版51-120。
平12	149	長さ36.0cm・広端幅23.7cm・狭端幅23.3cm。	凸面縦ナデ。凹面布目。側面縦ケズリ。端面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版52-121。
平13	150	長さ33.6cm・広端幅23.7cm・狭端幅22.8cm。	凸面斜無紋タタキ、後縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ケズリ。両端部内面面取。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版53-122。
平14	151	長さ33.2cm・広端幅23.4cm・狭端幅22.8cm。	凸面斜無紋タタキ、後縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ケズリ。端部内外面面取。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版53-123。
平15	152	長さ32.5cm・広端幅23.6cm・狭端幅23.3cm。	凸面斜ハケ、後縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ケズリ。端部内面面取。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版54-124。
平16	153	長さ32.3cm・広端幅23.8cm・狭端幅22.1cm。	凸面縦ナデ。凹面布目、糸切痕残存。側面縦ケズリ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版54-125。
平17	154	長さ27.3cm・広端幅20.0cm・狭端幅20.0cm。	凸面斜無紋タタキ、後ナデ、一部ハケ目。凹面布目、糸切痕残存。端面・側面ケズリ	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版55-126。
平18	155	長さ26.6cm・広端幅21.2cm・狭端幅20.8cm。	凸面縦ナデ、砂付着。凹面縦ハケ後ナデ、砂付着。側面縦ナデ。狭端部内外面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版55-127。
平19	156	長さ29.6cm・幅21.6cm。	凸面斜無紋タタキ、後縦ナデ。凹面縦ナデ。狭端部内外面横ナデ。	播磨産。『鳥羽I』掲載番号図版55-128。
平20	157	長さ36.5cm・広端幅26.3cm・狭端幅25.2cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面縦ナデ。両端部内面面取。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版56-129。
平21	158	長さ36.4cm・広端幅26.7cm・狭端幅25.6cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面縦ナデ。端面ナデ。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版56-130。
平22	159	長さ35.3cm・広端幅25.2cm・狭端幅24.9cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面凹型台圧痕残存。端面ナデ。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版57-131。
平23	160	長さ35.2cm・広端幅25.3cm・狭端幅25.0cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面凹型台圧痕残存。端面不調整。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版57-132。
平24	161	長さ35.3cm・広端幅26.0cm・狭端幅26.0cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目、広端面に布目連続。側面凸型台圧痕、バリ残存。狭端面ナデ。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版58-133。
平25	162	長さ36.2cm・広端幅26.3cm・狭端幅26.2cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面縦ナデ。端面横ナデ。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版58-134。
平26	163	長さ35.3cm・広端幅25.1cm・狭端幅24.5cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目。側面・広端面凸型台圧痕、バリ残存。狭端面不調整。側面一部布目残存。両端部内面面取。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版59-135。
平27	164	長さ35.9cm・広端幅25.6cm・狭端幅26.4cm。	凸面斜縄タタキ。凹面布目、広端面に布目連続。側面凸型台圧痕、バリ残存。狭端面不調整。	讃岐産。『鳥羽I』掲載番号図版59-136。

参考文献

あ

網ほか 95：網伸也・会下和宏・桜井みどり「成勝寺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』同研究所、1995年。

網 09：網伸也「瓦類」『京都国立博物館構内発掘調査報告書 - 法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡 -』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書第23冊、同研究所、2009年。

安藤 67：安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8、香川県文化財保護協会、1967年。

池田 98：池田征弘「瓦」『神出窯跡群 - 神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 -』兵庫県文化財調査報告第171冊、兵庫県教育委員会、1998年。

池田 99：池田征弘「出土瓦の検討」『久留美・跡部窯跡群 - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X X -』兵庫県文化財調査報告第186冊、兵庫県教育委員会、1999年。

今里 80：今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会、1980年。

上村 82：上村和直「第72次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光課・京都市埋蔵文化財研究所、1982年。

上村ほか 15：上村和直・李銀眞「瓦類」『円勝寺・岡崎遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-13、同研究所、2015年。

植山 85：植山茂「瓦類」『魚住古窯跡群発掘調査報告書 - 中尾土地地区画整理事業に伴う -』明石市教育委員会・平安京博物館、1985年。

大村ほか 83：大村敬通・水口富夫『魚住窯跡群』兵庫県文化財調査報告第19冊、兵庫県教育委員会、1983年。

か

加納 04：加納敬二「瓦類」『平安京左京北辺四条一第1分冊（公家町形成前） -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊』同研究所、2004年。

加納 10：加納敬二「瓦類」『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8、同研究所、2010年。

元興寺 72：元興寺文化財研究所『六波羅密寺民俗資料緊急調査報告書』1972年。

木村ほか 77：木村捷三郎・渡辺和子・梶川敏夫「出土遺物」『六勝寺跡 六盛西店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 1976』六勝寺研究会、1977年。

木村ほか 80：木村捷三郎・渡辺和子『板東善平収蔵品目録』京都市埋蔵文化財研究所、1980年。

小松ほか 98：小松武彦・吉村正親・小桧山一良「平安京右京一条四坊・法金剛院」『平成8年度 京都市埋蔵文化財研究所調査概要』京都市埋蔵文化財研究所、1998年。

さ

柴野 84：柴野康之「出土瓦・磚の分類と考察類」『法住寺殿跡』平安京跡研究調査報告第13輯、古代學協會、1984年。

市埋文 96：京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』同研究所、1996年。

た

高橋 87：高橋美久二「宝菩提院廃寺の瓦」『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集』向日市教育委員会、1987年。

常磐井 80：常磐井智行「瓦、平安京跡（二条大路）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』第3分冊、京都府教育委員会、1980年。

な

中谷ほか 16：中谷正和・松本敬子『法住寺殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2016-3』同研究所、2016年。

奈文研 61：奈良国立文化財研究所編「尊勝寺発掘調査報告 - 京都会館建設地の調査 -」『平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告 奈良国立文化財研究所学報第十冊』同研究所、1961年。

は

春成 14：春成秀爾「明石の古瓦集成2」『古代の明石II』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市、2014年。

春成 15：春成秀爾「明石の古瓦集成3」『古代の明石III』発掘された明石の歴史展実行委員会・明石市、2015年。

引原 92：引原茂治「史跡 - 教王護国寺」『京都府遺跡調査概報 第 48 冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター、1992 年。

平博 77：平安博物館編『平安京古瓦図録』雄山閣、1977 年。

細谷 68：細谷義治「鳥羽離宮跡出土軒瓦の整理」『埋蔵文化財発掘調査概報（1968）』京都府教育委員会、1968 年。

ま

前田ほか 79：前田義明・会下和宏「第 43 次（田中殿Ⅶ）発掘調査」『鳥羽離宮跡 国庫補助による発掘調査概要 昭和 53 年度』京都市文化観光課・京都市埋蔵文化財研究所、1987 年。

前田ほか 87：前田義明・鈴木久男「第 121 次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光課・京都市埋蔵文化財研究所、1987 年。

前田 95：前田義明「太政官跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告書第 13 冊、同研究所、1995 年。

松本 68：松本豊胤「ますえ畑窯跡」『香川県陶邑古窯跡群調査報告』香川県教育委員会、1968 年。

森ほか 71：森浩一・伊藤勇輔「香川県綾南町十瓶山北麓窯跡調査報告」『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告第 4 冊、同大学、1971 年。

森下 16：森下英治『丸山窯跡 水道局第 3 投棄場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会、2016 年。

や

吉村 93：吉村正親「栗栖野瓦窯跡の調査(その 2)」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成 4 年度』京都市文化観光局、1993 年。

第2章 鳥羽離宮金剛心院跡出土資料の科学調査

龍谷大学・文学部・歴史学科（文化遺産学）北野 信彦

はじめに

鳥羽離宮跡出土金属製品・漆製品・玉製品の材質・技法に関する科学調査を実施した。この調査の目的は、理化学的な手法を援用して院制期における本資料群の生産技術的な性格を明らかにすることである。本報では、この調査結果を報告する。

1. 観察および分析

本調査は、平成27年度中に京都市埋蔵文化財研究所において現地調査を実施するとともに、龍谷大学・文化遺産学・北野研究室設置の機器を使用して幾つかの項目に分けた観察および分析調査を実施した。以下、調査対象試料と、観察および分析方法を記す。

1-1 調査資料

金属製品：22点

玉製品：18点

漆製品：27点

1-2 調査方法

①金属製品の鑿加工および塗箔塗装膜表面の拡大観察

採取試料について、まず塗装状態を目視観察した後、細部の観察は（株）スカラ社製のDG-3型デジタル現場顕微鏡を使用して50倍から200倍の倍率で行った。さらに個々の顔料粒子形態や集合状態、色相に関する詳細な拡大観察は、（株）キーエンス社製VHX-1000型デジタルマイクロスコープを用いて500倍から2,000倍の倍率で行った。

② 金属・ガラス・使用顔料および金箔の材質分析（構成無機元素の調査）

各試料の無機元素の定性分析は、（株）堀場製作所MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管ターゲットはRh、X線管電圧は15kVおよび50kV、電流

は240 μ Aおよび20 μ A、検出強度は20.0～80.0cps、である。

また、分析試料室に入らない一部の大型の金属製品や漆製品の金箔に関する定性分析は、（株）リガクのNiton XL3t-950 S 携帯型成分分析計（エネルギー分散型蛍光X線分析装置）を使用した。分析は大気曝露中で測定視野は8.0mm、X線管ターゲットはAg、X線管電圧は50kV、測定条件はSoil Mode（土壌モード：Main領域10秒、Low領域10秒、High領域10秒）とMining Mode（鉱物モード：Cu/Zn系：Main領域10秒、Low領域10秒、High領域30秒、Light領域30秒）の併用である。

③ 漆塗装膜の断面観察

各試料は、まず目視観察した後、1mm×3mm角程度の試料剥落小片を、合成樹脂（エポキシ系樹脂/アラルダイトAER-2500、ハードナ-HY837）に包埋した後、断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で、断面薄層試料の厚さや色調、下地、使用顔料や漆箔技法などの状態を、金属顕微鏡および生物顕微鏡を用いて落射観察した。

2. 調査結果

2-1 金属製品

① 本資料群のうち、金属資料No.250からは、銅（Cu）の実のピークが、資料No.249から銅（Cu）・スズ（Sn）・鉛（Pb）のピークがそれぞれ検出された。このため、No.250は刻印入の純銅製品、No.249は青銅製品であるが、比較的スズ（Sn）の含有量が多いので、いわゆる白銅製品である。

② 本資料群には表面に金の塗装痕跡が確認される資料が幾つか確認された。このうちの資料No.246など、金の発色が黄金色ではなく、

やや青みを帯びた金色を呈する資料群も多い。これらの資料群からは、金 (Au) とともに銀 (Ag)、さらには水銀 (Hg) のピークも同時に検出された。そのため、これらは純金の鍍金ではなく銀を多く混和した青金の鍍金である。

③ 本資料群には、No.244 のように表面に鑿彫りやナナコ技法による高度な彫金技法を有する資料が含まれていた。この資料の彫金箇所を拡大観察した結果、金鍍金層を押した状態でシャープな彫金鑿彫の状況が多く見出された。地金にはスズ (Sn) と鉛 (Pb) はほとんど検出されないため、比較的軟らかい銅地金の上に金鍍金を施し、この地金の表面に鑿彫りする技法が用いられたものであろう。

2-2 玉製品

① 本資料群のうち、玉資料 No.269,271,272 は、すでに東京理科大学の中井泉教授によるガラス分析仕様の蛍光X線分析装置による微量分析調査が実施されている。今回の調査は、中井研究室と機器が異なるとともに、ガラス分析仕様の分析値補正計算を行わない一般分析仕様の蛍光X線装置による分析調査であるため、詳細な分析値の比較は困難であるが、いずれも PbO-SiO₂ 系のガラスである点は同じ結果であった。

② 本資料のなかには、緑色系の色相を呈するガラス資料も存在しているが、これらには銅 (Cu) のピークが検出されるので銅材料が呈色材料として使用されたと考えられる。この結果は、緑色系ガラスの一般的な傾向を踏襲しているといえる。

③ 玉資料 No.267・268・272～278 の9点は珊瑚玉や貝製玉、真珠玉と報告されている資料であるが、今回の調査の結果、いずれの資料もカルシウム (Ca) の検出はほぼみられず、共通する主な検出元素は SiO₂ と鉛 (Pb) であった。よって、これら玉製品も PbO-SiO₂ 系のガラス玉であるといえる。なお、水晶玉と報告されている No.279～282・265 については、い

ずれも透明感が強いとともに SiO₂ のみが分析で検出されたため、水晶製品と考えて良いであろう。

2-3 漆製品

① 漆製品は仏具や仏像関連の塗装資料が多く、いずれも上塗りの漆層は比較的艶光沢を有するやや肉持ちが良い黒色漆であった。そして、一部の資料では金箔が押された漆箔仕上げが為されていた。

② 各資料の小破片を塗膜分析した結果、木地の上に粘土鉱物を生漆などに混和して下地とするサビ下地を施し、その上に灰スミ漆→上塗りの黒褐色系漆を塗装する資料群と、木地の上に直接灰スミ漆で木地固めし、その上に黒褐色漆を上塗り塗装する資料群に大別された。

③ 資料 No.284,304,309,290 などの漆製品の資料群では、木地の上に布着せ補強を行い、その上にサビ下地を施す堅牢性を重視した技法が採用されていた。

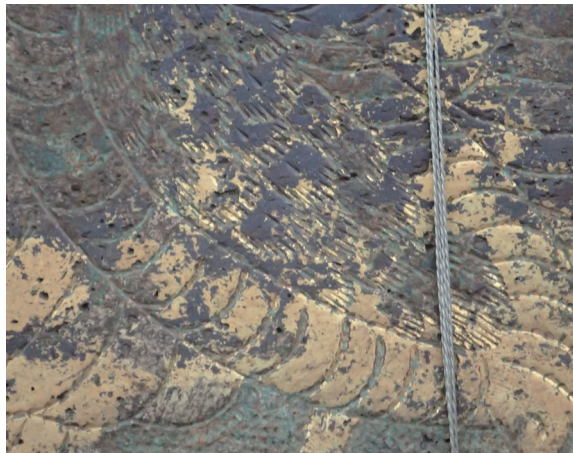
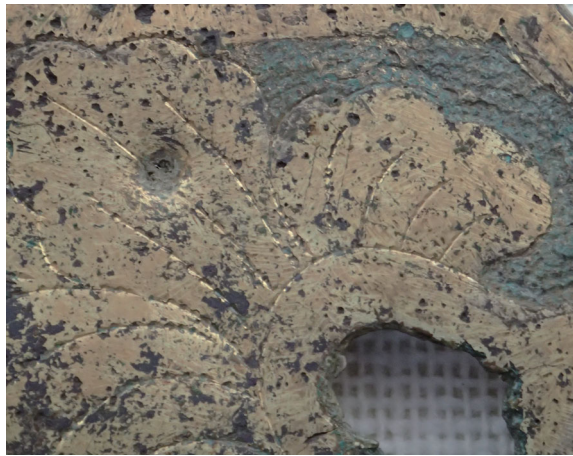
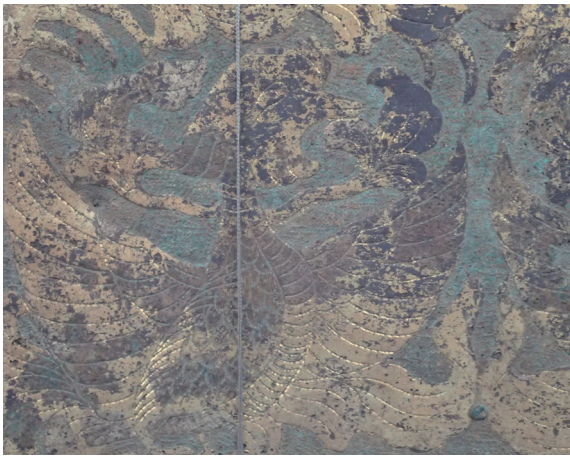
④ 資料 No.305,288,297 などの漆製品の漆箔技法を観察すると、黒褐色系漆を金箔押しした塗装面の上にやや透明感がある赤褐色系漆の中に金箔が混和された加飾層が確認された。これは塗り直し補修の痕跡であるのか、何らかの意図を持った漆工技法であるのかは、現段階では判断できないものの、これまでの漆工史分野では報告例がない貴重な調査成果である。

⑤ 資料 No.283 では、黒褐色系漆の上に粒度が異なる朱顔料 (天然朱顔料=辰砂: HgS) を漆塗料に混和した結果、比重の重い朱顔料が漆塗膜層内で沈殿固化した状態が確認された。このような塗膜層もこれまでの漆工史分野では報告例がない貴重な調査成果である。

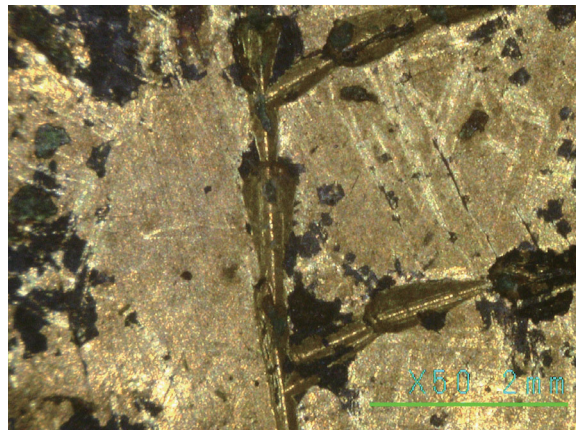
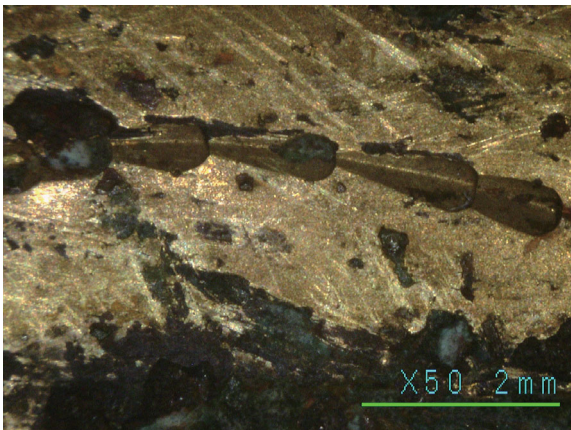
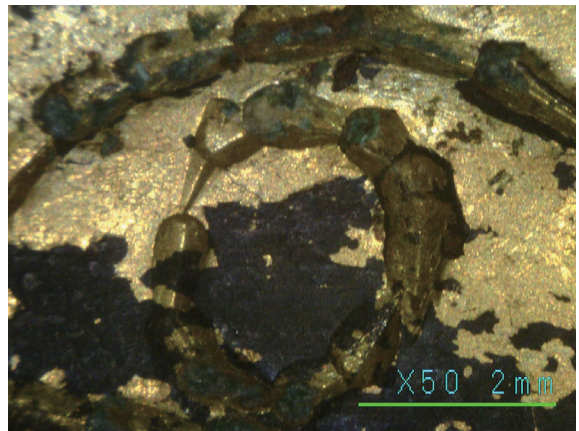
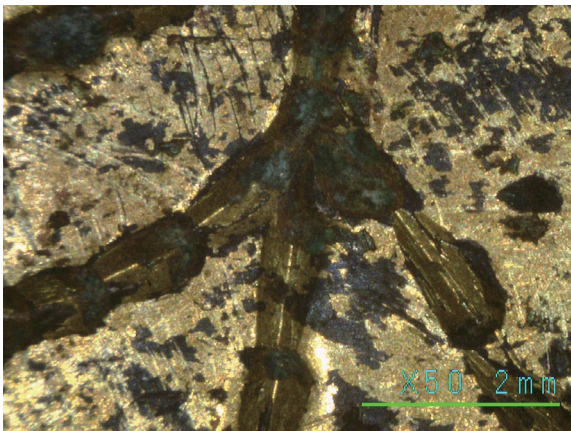
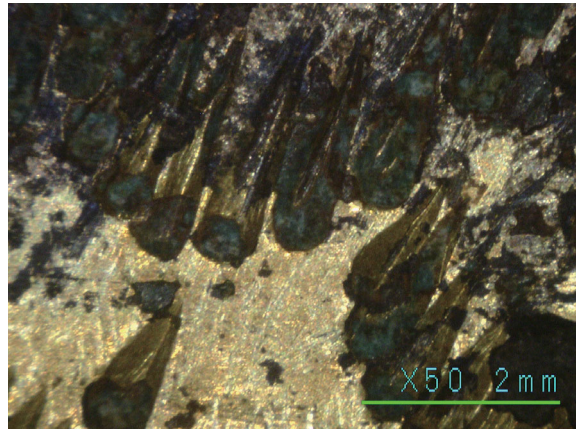
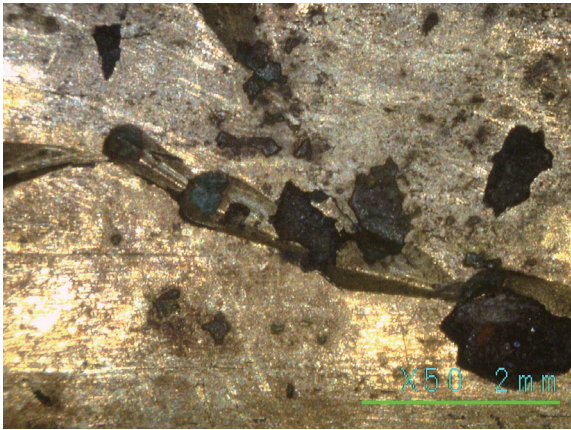
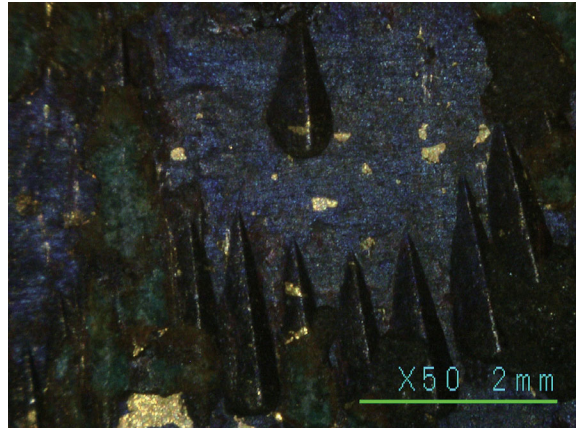
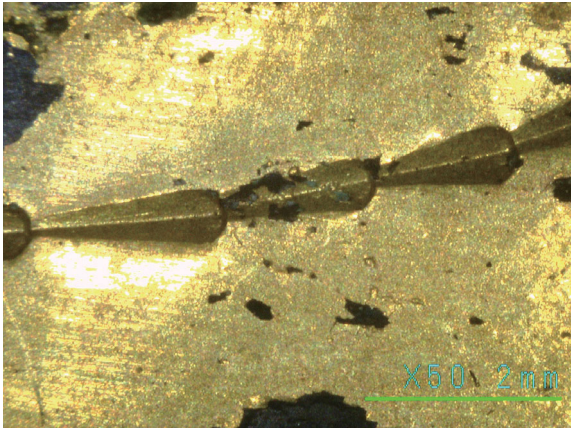
【参考文献】

1) 前田義明ほか『鳥羽離宮 I 金剛心院跡の調査』(財)京都市埋蔵文化財研究所、2002年

【金属製品】可搬型蛍光X線分析結果一覧



No.244



No.244 顕微鏡拡大写真



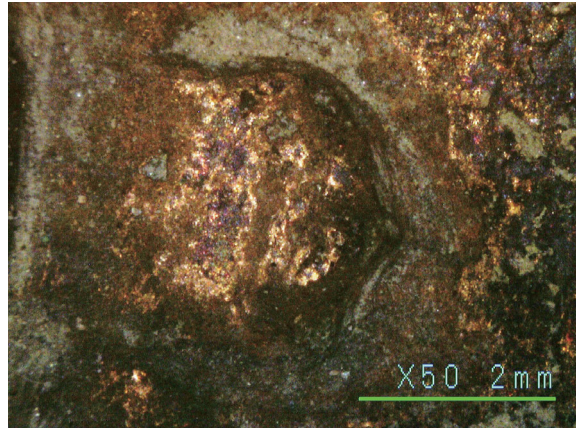
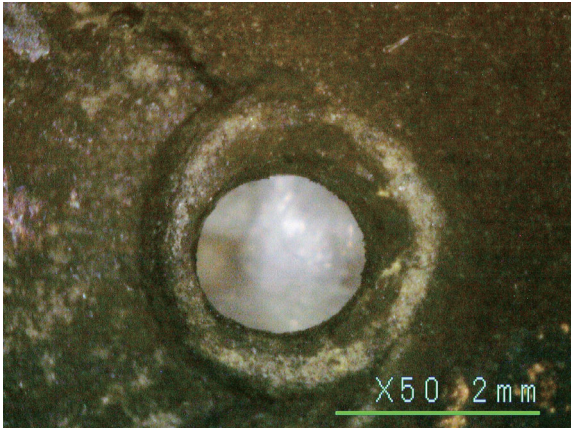
No.246



No.247



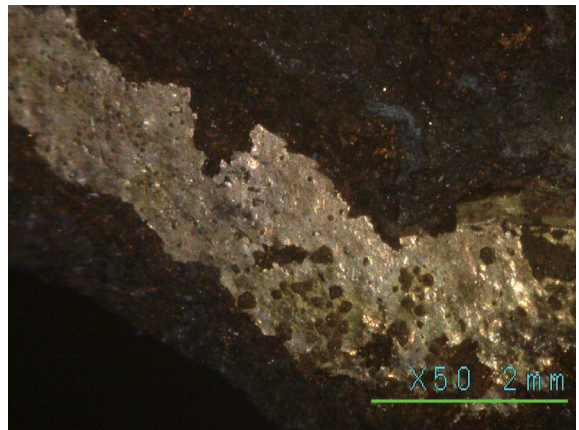
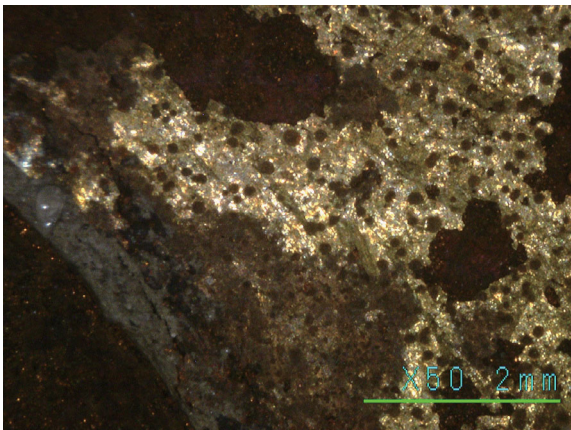
No.256



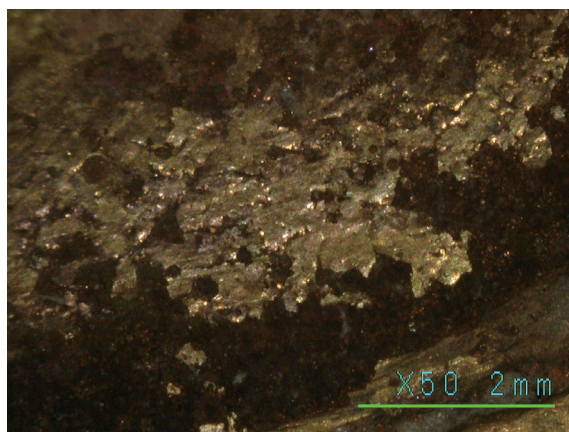
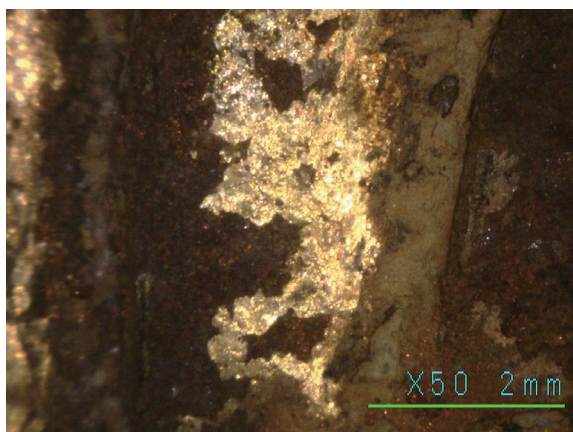
No.256 顕微鏡拡大写真



No.257



No.257 顕微鏡拡大写真



No.257 顕微鏡拡大写真

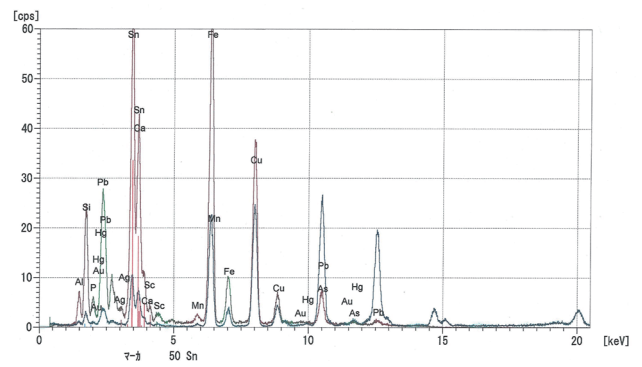
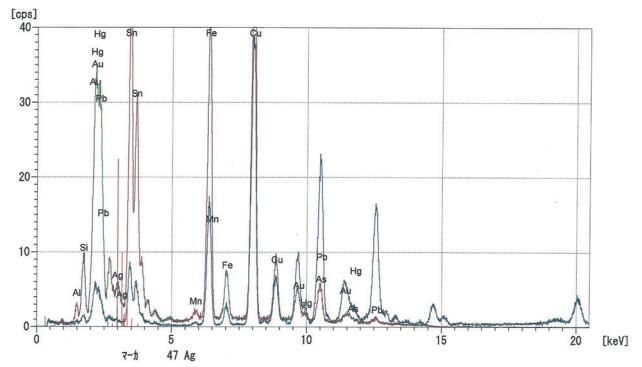
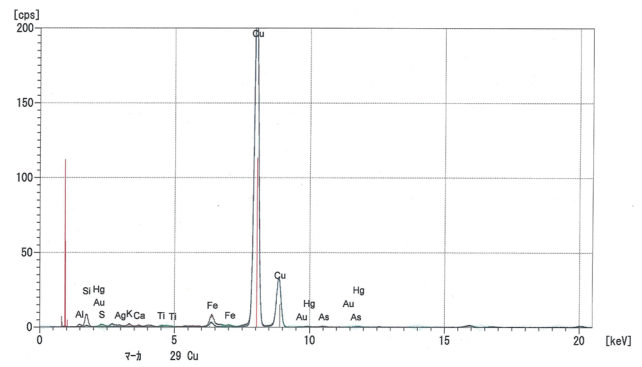
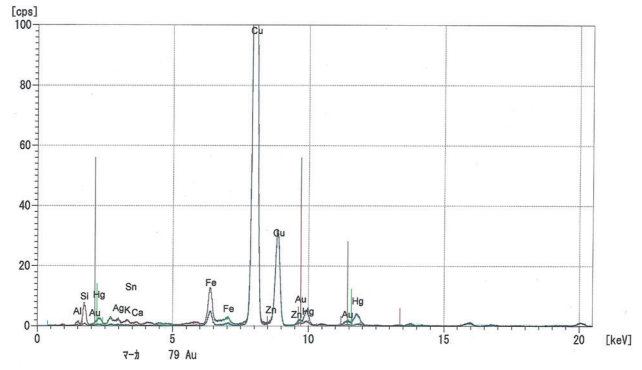
表 1 : 金属製品蛍光X線写真分析結果 (可搬型蛍光X線分析)

No.244		Au	Ag	Cu	As	Hg	Pb	Sn	Zn	Fe	S	Si	P	Al	Ti	Mn
金地箇所①	(%)	10.3	0.3	68.5	0.3		0.4	0.0	0.1	0.1	3.7	4.8	6.3	2.1		
金地箇所②	(%)	14.3	0.2	58.3	0.2		0.4	0.0	0.0	0.0	7.9	0.2	13.0	0.7		
金地箇所③	(%)	8.8	0.2	65.4	0.2		0.3	0.0	0.0	0.0	7.2	0.4	12.6	1.3		
	(PPM)	146.7K	7208.0	4M	2902.0	26.1K	5059.0	798.0			55.5K					
魚々子箇所①	(%)	2.3	0.8	63.0	0.2		0.1	0.0	0.1	0.8	0.5	8.2	0.5			
魚々子箇所②	(%)	7.2	1.1	62.4	0.2		0.2	0.0	0.0	0.4	1.9	6.6	2.5			
魚々子箇所③	(%)	5.8	2.1	69.0	0.2		0.2	0.0	0.2	0.5	1.2	7.5	1.2			
	(PPM)	55.5K	22.3K	3M	3580.0	17.9K	2480.0	307.0		41K	6903.0					
黒色箇所①	(%)	3.8	0.2	82.4	0.1		0.4	0.1	0.0	0.0	2.0	1.3	3.4	1.4		
黒色箇所②	(%)	1.3	0.2	89.9	0.1		0.4	0.1	0.0	0.0	0.8	1.2	0.8	0.8		
	(PPM)	29.3K	3712.0	5M	1581.0	6160.0	4075.0	519.0			12.7K					
No.257		Au	Ag	Cu	As	Hg	Pb	Sn	Zn	Fe	S	Si	P	Al	Ti	Mn
金地箇所	(%)	6.1	0.4	81.8	0.2		0.0	0.0	0.1	0.9	2.0	1.8	3.5	1.3		
	(PPM)	133.9K	13.2K	5M	5995.0	23K		451.0		65.9K	40.6K					
地金箇所	(%)	0.4	0.5	87.7	0.3		0.0	0.0	0.0	0.2	0.0					
	(PPM)	3186.0	9437.0	5M	2873.0	952.0		449.0		27.3K	3390.0					
No.256		Au	Ag	Cu	As	Hg	Pb	Sn	Zn	Fe	S	Si	P	Al	Ti	Mn
ガラス箇所	(%)		0.0	1.1	2.5		36.1	0.0	0.0	1.6	12.2	13.9	2.1	1.0	0.0	0.1
	(PPM)		1526.0	73.2K	71.6K		1M	1078.0		127.4K	118.4K				337.0	6167.0
下部地金箇所①	(%)	6.2	0.2	76.0	0.2		0.3	0.0	0.0	0.3	3.9	6.4	0.7	4.2		
	(PPM)	62.1K	5124.0	5M	2869.0	12.5K	3581.0	445.0	0	35.5K	17.4K					
下部地金箇所②	(%)	4.6	0.2	77.4	0.2		0.3	0.0	0.0	0.3	3.5	6.2	0.6	5.3		
	(PPM)	441.4K	15.7K	3M	4458.0	87.7K	11.7K	763.0	11.1K	25.3K	48K					
上部地金箇所	(%)	24.5	0.4	44.8	0.1		0.2	0.0	0.1	0.2	9.9	1.9	3.5	1.0		
	(PPM)	458.9K	16.5K	3M	1967.0	104.3K	2793.0	774.0	11.4K	18K	63.2K					
右部地金箇所	(%)	10.2	0.3	69.5	0.1		0.2	0.0	0.0	0.3	6.1	2.5	5.5	1.9		
	(PPM)	140.7K	9166.0	4M	1410.0	27.3K	2395.0	691.0	0.0	29.4K	27.5K					
左部地金箇所	(%)	19.1	0.3	50.2	0.1		0.2	0.0	0.1	0.3	7.5	5.3	6.9	4.9		
	(PPM)	121.9K	7595.0	5M	3083.0	27.3K	3822.0	632.0	0.0	48.1K	29.9K					
No.247		Au	Ag	Cu	As	Hg	Pb	Sn	Zn	Fe	S	Si	P	Al	Ti	Mn
	(%)	2.6	0.1	6.8	4.7		22.7	13.7	0.0	1.0	9.4	2.9	1.9	1.1	0.1	0.1
	(PPM)	29.8K	2166.0	173.9K	102.4K	1035.0	481.2K	67.5K	1301.0	26.2K	91.4K				264	
No.246		Au	Ag	Cu	As	Hg	Pb	Sn	Zn	Fe	S	Si	P	Al	Ti	Mn
	(%)	19.7	0.6	47.3	0.2		0.1	0.0	0.0	0.1	4.2	0.3	6.1		0.0	
	(PPM)	227K	19.4K	3M	3944.0	51.5K	0	641.0	6092.0	0	64.9K					

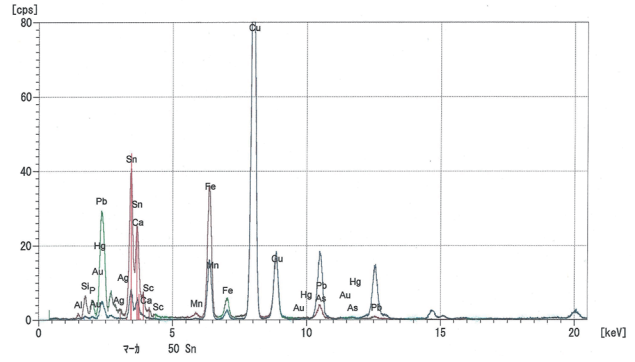
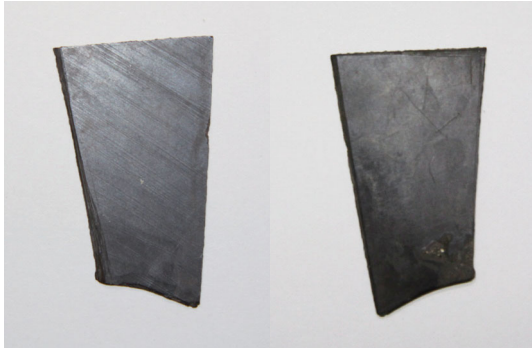
【金属製品】 蛍光X線分析結果一覧



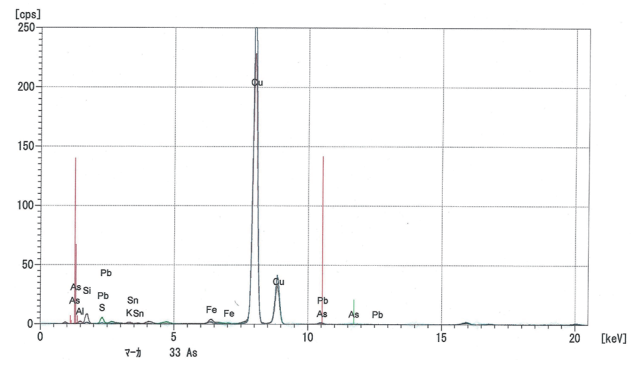
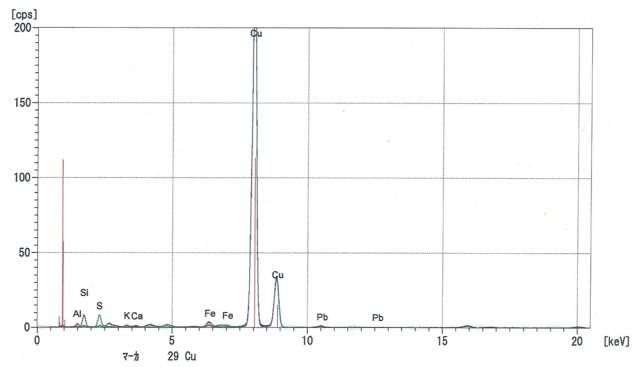
No.245 スペクトル



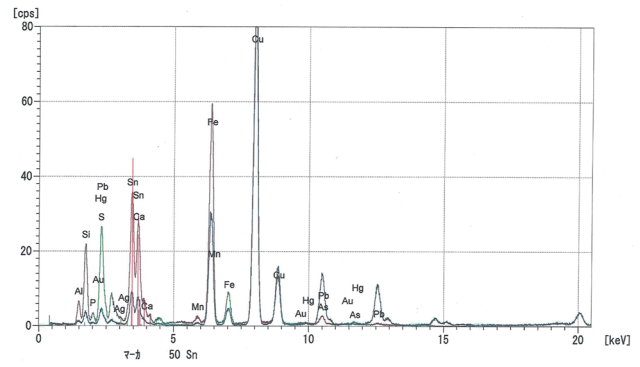
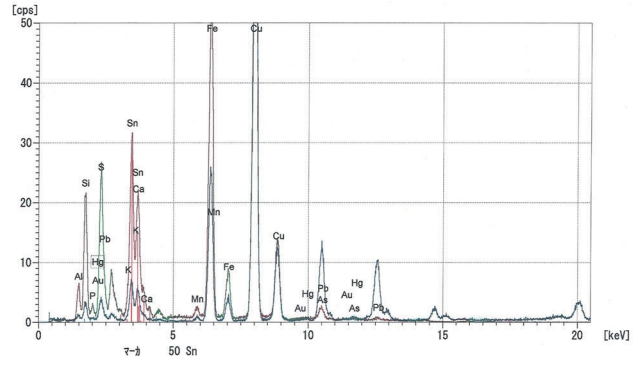
No.248 スペクトル



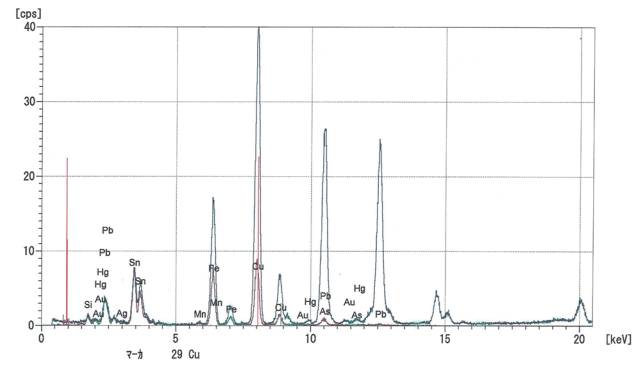
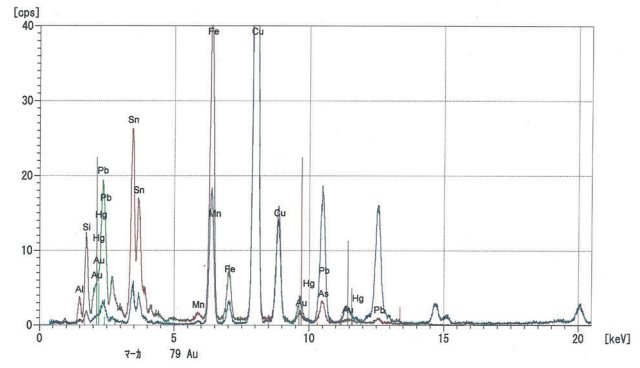
No.249 スペクトル



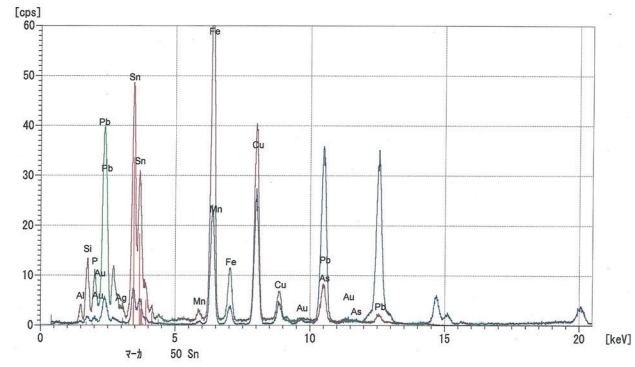
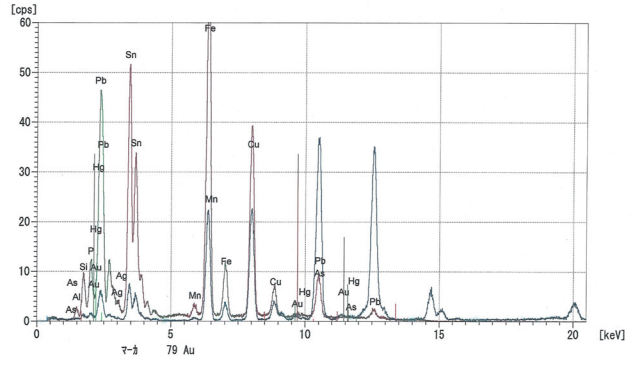
No.250 スペクトル



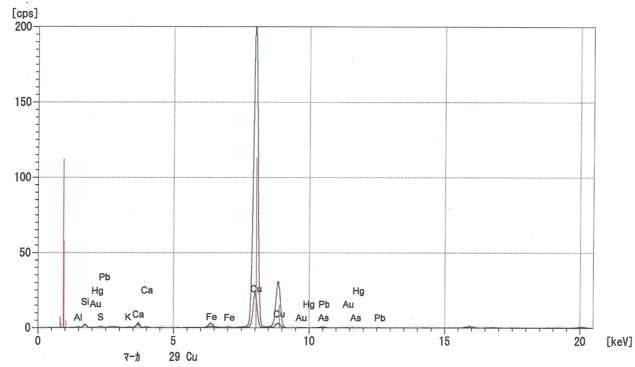
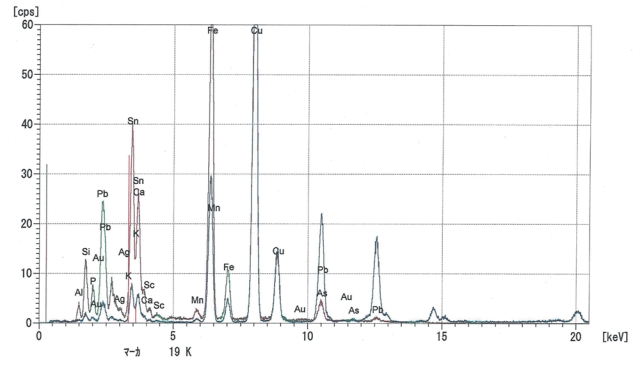
No.251 スペクトル



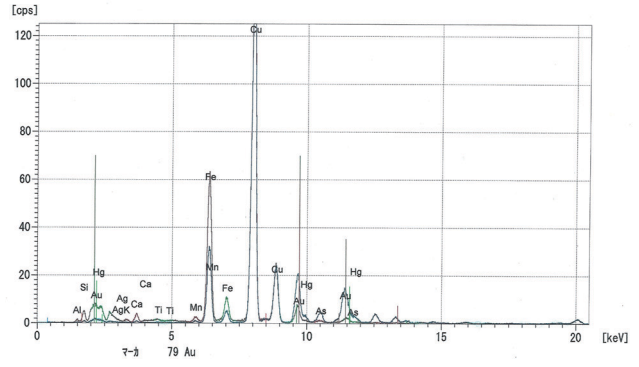
No.252 スペクトル



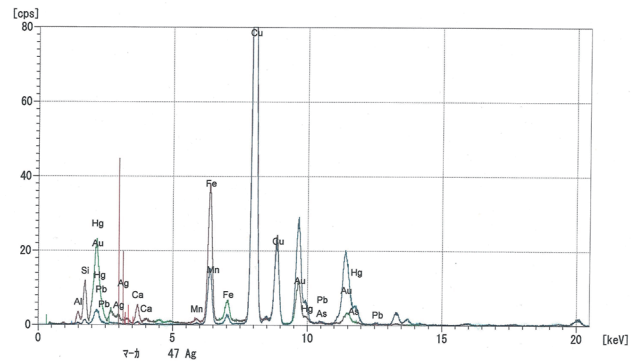
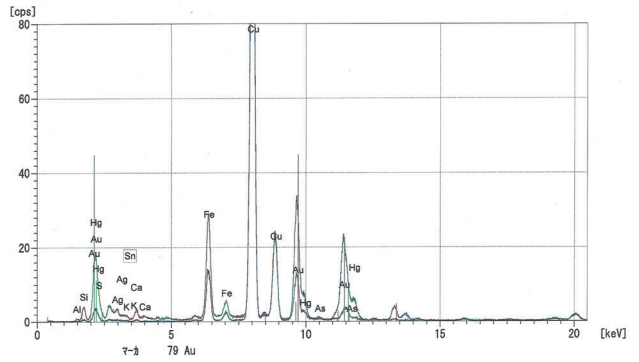
No.253 スペクトル



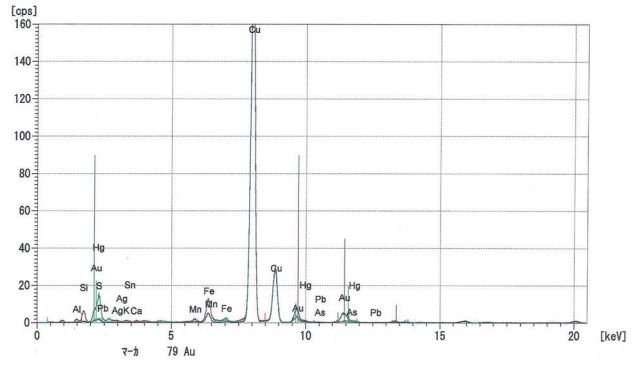
No.254 スペクトル



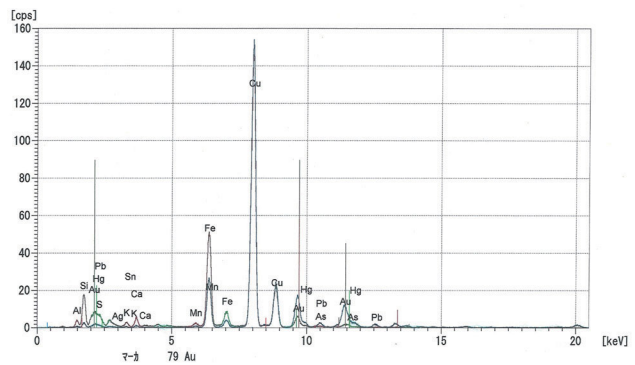
No.255 スペクトル



No.258 スペクトル



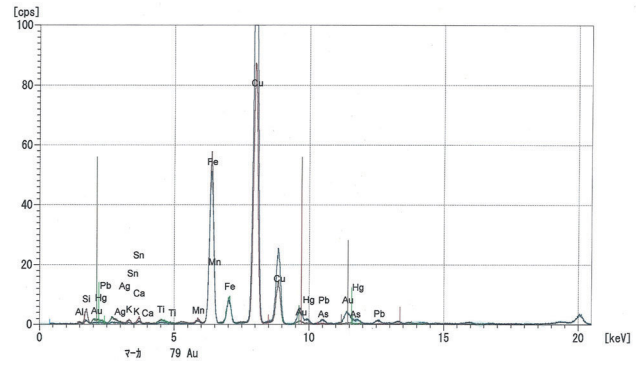
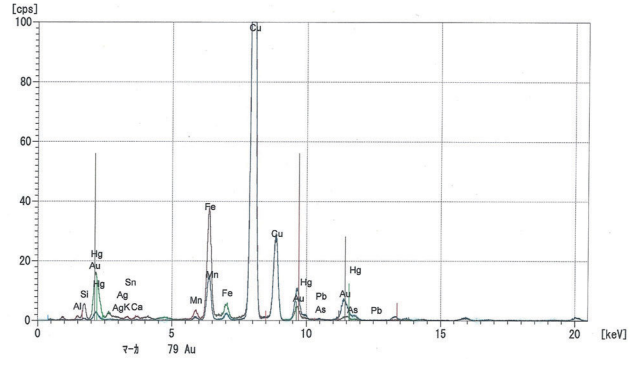
No.259 スペクトル



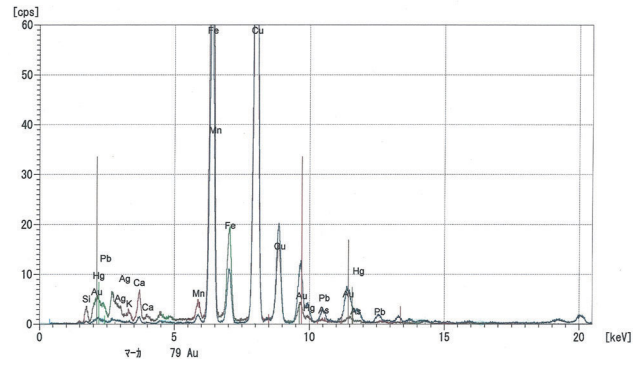
No.260 スペクトル

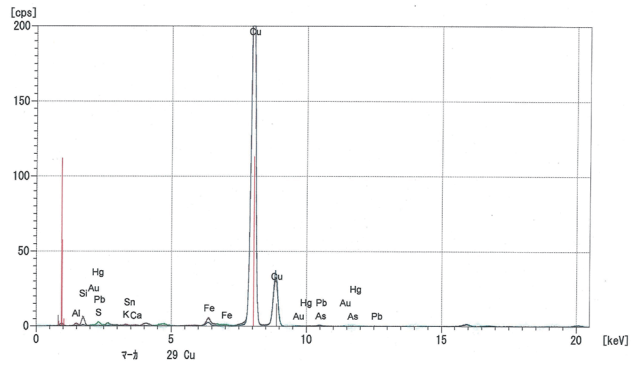
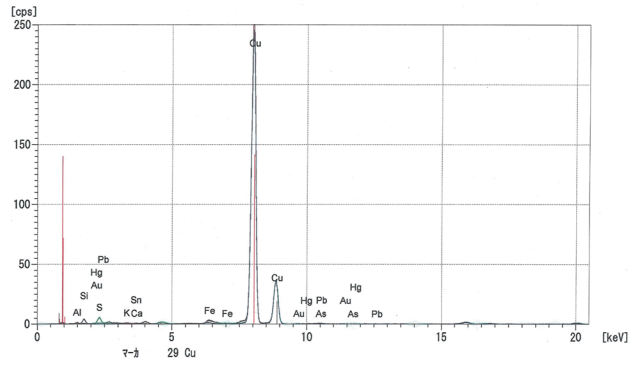


No.261 スペクトル

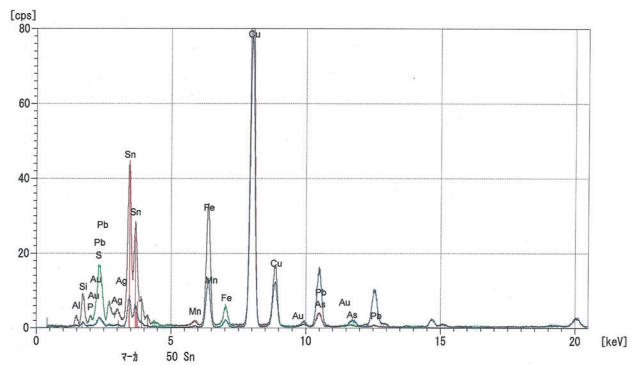
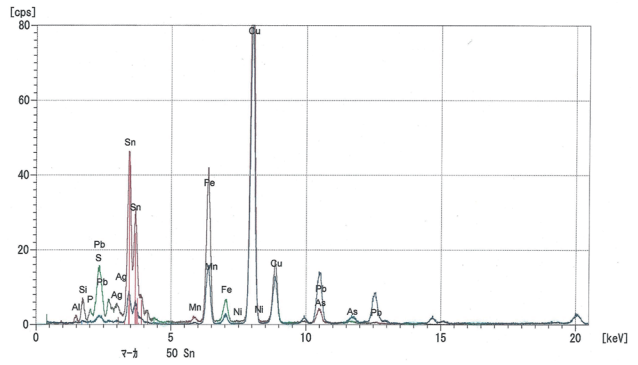


No.262 スペクトル





No.263 スペクトル

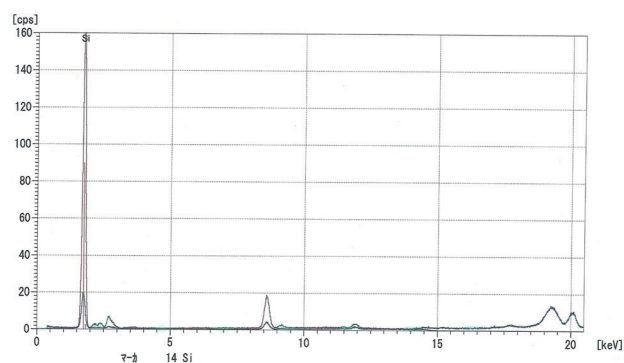


No.264 スペクトル

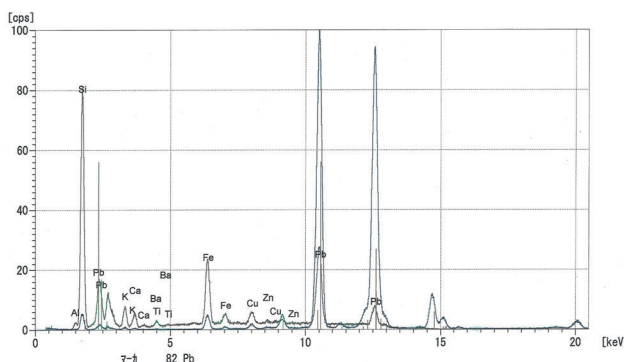
表2：金属製品蛍光X線分析結果一覧表

No.	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Mn ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	Ag ₂ O	SnO ₂	Au ₂ O ₃	HgO	PbO
245-1	9.6	24.0		0.7	0.4	0.1	0.2		0.7	63.2		0.2	0.2		0.1	0.5	
245-2	7.2	18.7			0.4	0.1			1.5	62.9	0.1		0.7	0.0	3.2	5.1	
248-1	11.5	22.4						0.2	11.3	15.7		2.3	0.5	13.6	9.3	0.9	12.2
248-2	20.7	44.8	6.7			0.0		0.2	9.0	5.2		1.0	0.1	5.3	0.0	0.0	6.9
249-1	13.1	20.5	5.0	12.3				0.2	7.5	27.7		4.2	0.9	7.4	0.0		1.2
249-2	19.8	28.8	2.3	6.5				0.2	5.7	24.4		3.0	0.7	6.4	0.0		2.3
250-1	11.6	22.5		6.3	0.3	0.1		0.0	0.3	58.4	0.0	0.2		0.0	0.0		0.3
250-2	11.7	25.0		4.3	0.3				0.3	58.1		0.4		0.0			0.0
251-1	19.3	40.8	2.6	12.9	1.4	0.2		0.2	6.3	11.0		0.2		2.3	0.0	0.0	2.8
251-2	20.9	40.7	3.4	12.7		0.3		0.2	6.0	11.2		0.3	0.1	1.8	0.0	0.0	2.4
252-1	17.3	31.8						0.2	7.5	25.2		0.0		5.0	2.2	0.0	10.7
252-2		21.5						0.3	14.3	19.8		0.0	0.3	17.1	0.0	0.0	26.6
253	14.0	26.0	12.2					0.4	13.7	8.2			0.2	9.0	0.5		15.8
253-2	9.0	16.5	13.7					0.3	14.5	8.0		0.0	0.3	10.9	0.4	0.0	26.3
254-1	14.6	29.0	9.7		0.6	0.0		0.3	11.5	23.6		0.7	0.1	3.2	0.0		6.7
254-2	8.4	37.9		2.8	0.4	4.1			0.7	45.4		0.1			0.1	0.0	0.0
255	3.9	12.1			0.2	1.3	0.2	0.3	12.9	47.6		1.5	0.3		19.1	0.6	
258-1	2.5	9.0		1.4	0.1	1.0			6.2	46.3		0.2	0.6	0.0	30.6	2.1	
258-2	12.0	21.4				1.3		0.1	5.6	33.5		0.1	0.4		22.5	2.9	0.1
259	6.3	12.9			0.3	0.2		0.4	5.4	60.6		0.2	0.1	0.0	12.2	1.3	0.0
260	7.6	16.1		8.6	0.2	0.2		0.2	1.6	56.2		0.1	0.1	0.0	8.1	1.0	0.0
261	12.7	34.4		2.2	0.7	1.4		0.2	7.1	29.7		0.3	0.1	0.0	10.3	0.9	0.1
262-1	7.9	22.5			0.7	1.0	0.4	0.4	16.9	43.2		0.2	0.4	0.0	5.0	0.9	0.4
262-2		8.6			0.6	2.1		0.7	29.8	42.0		0.7	0.5		12.5	2.3	0.3
263-1	7.2	12.6		4.0	0.1	0.0			0.2	75.5		0.2		0.0	0.1	0.0	0.0
263-2	10.3	18.4		2.0	0.2	0.1			0.5	68.1		0.2			0.2	0.0	0.0
264-1	7.2	17.8	9.2			0.0		0.2	8.1	38.8		1.2	0.1	4.9	0.0	0.0	12.4
264-2	6.9	13.5	9.6		0.6	0.0		0.2	7.3	44.3		1.1	0.1	4.6	0.0	0.0	11.9

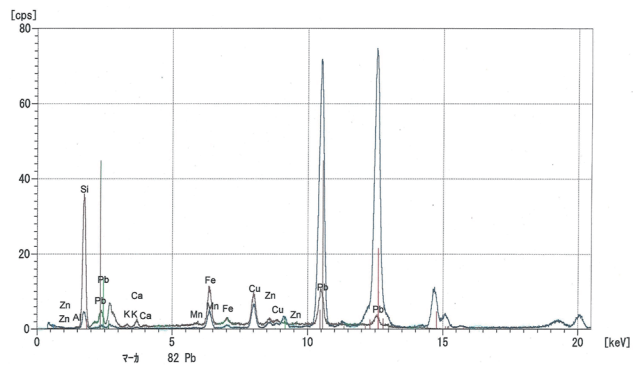
【玉製品】 蛍光X線分析結果一覧



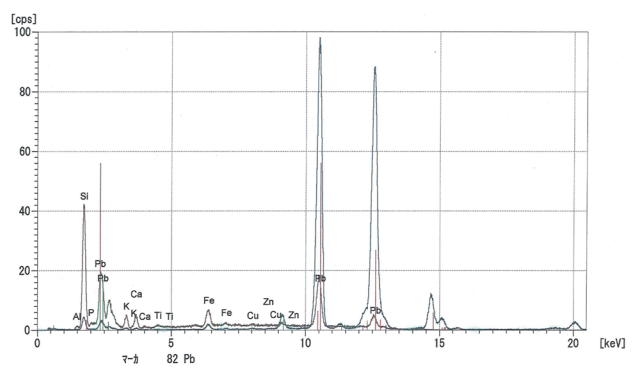
No.265 スペクトル



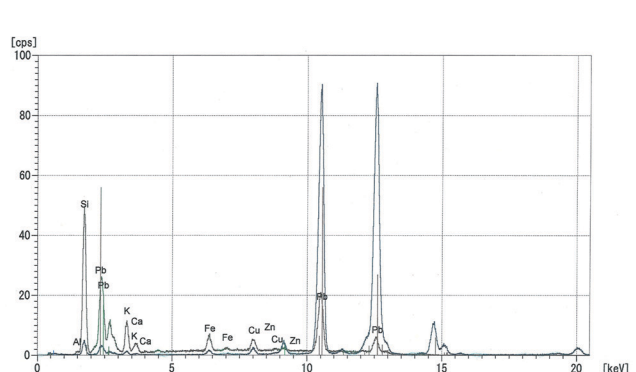
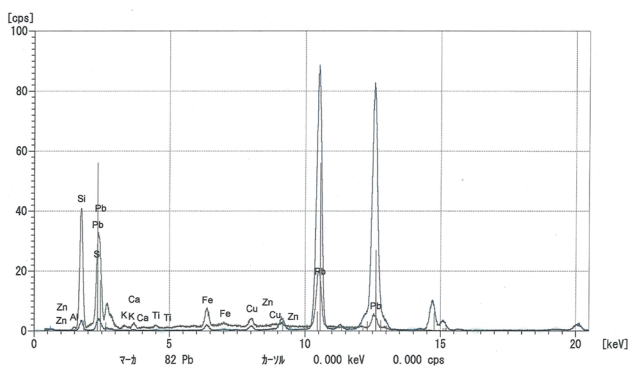
No.266 スペクトル



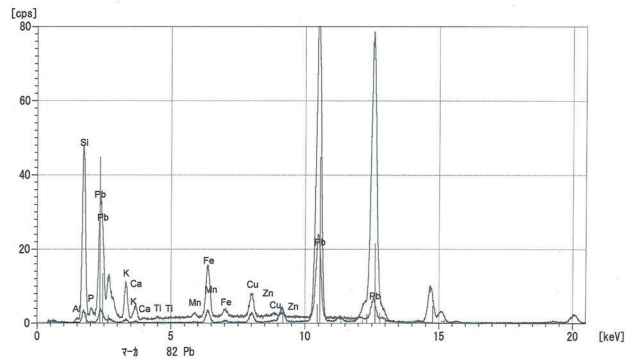
No.267 スペクトル



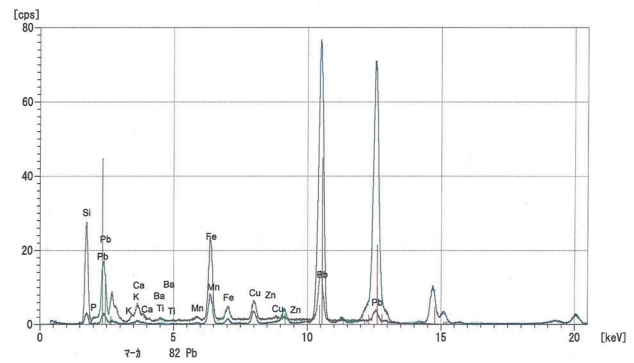
No.268 スペクトル



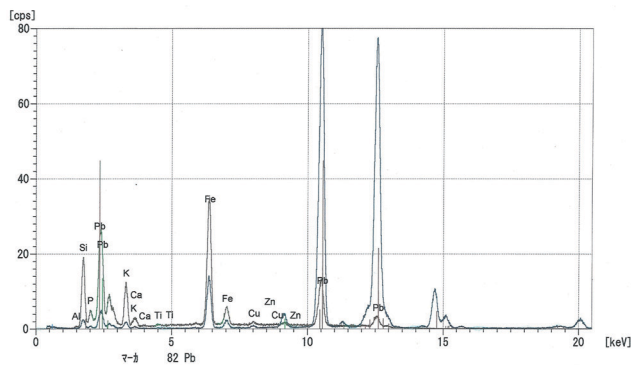
No.269 スペクトル



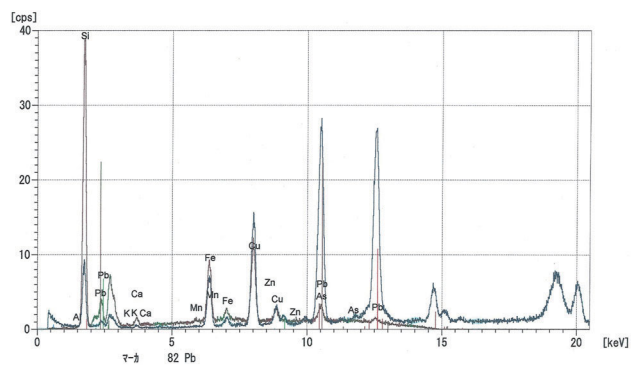
No.270 スペクトル



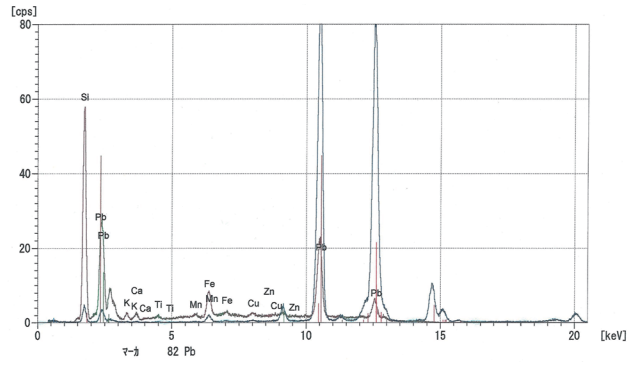
No.271 スペクトル



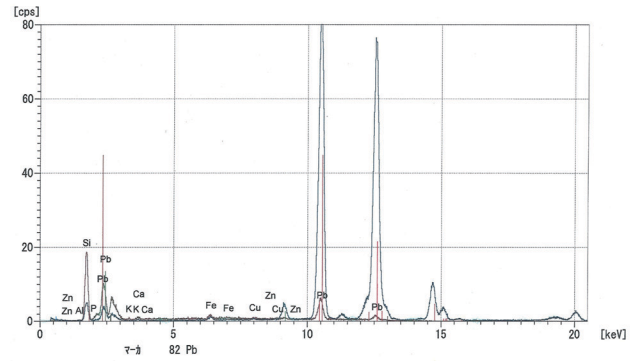
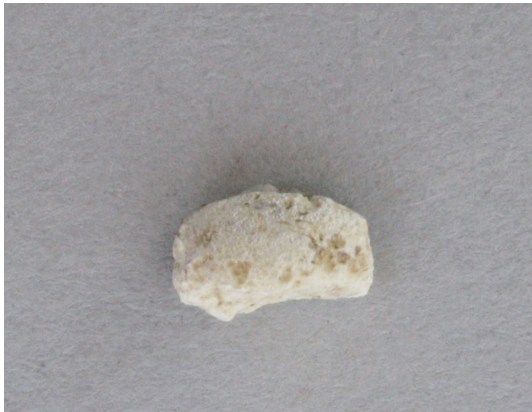
No.272 スペクトル



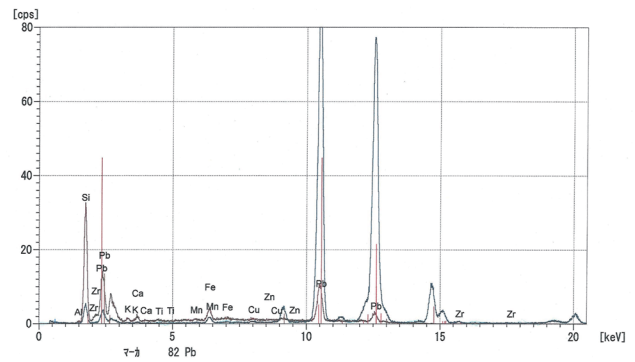
No.273 スペクトル



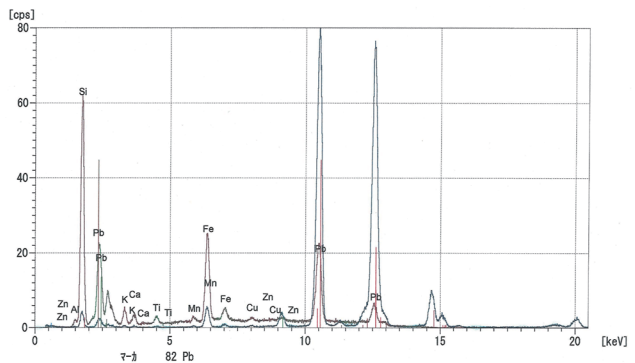
No.274 スペクトル



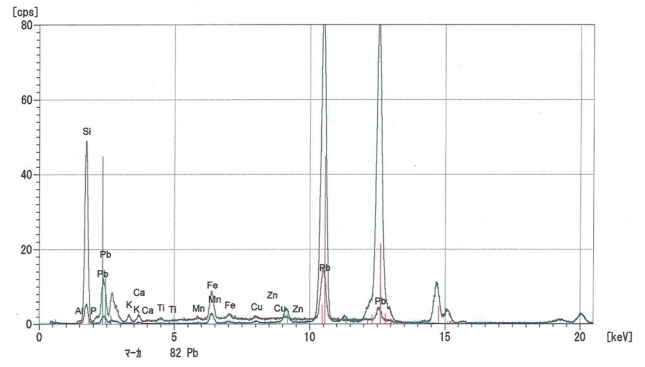
No.275 スペクトル



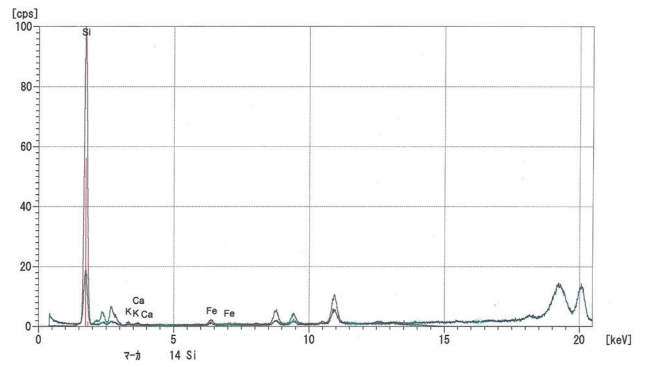
No.276 スペクトル



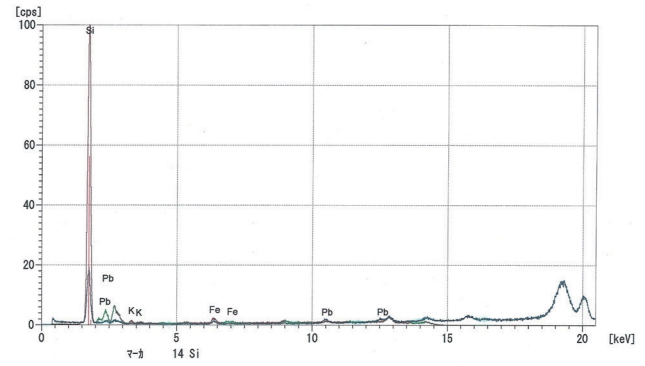
No.277 スペクトル



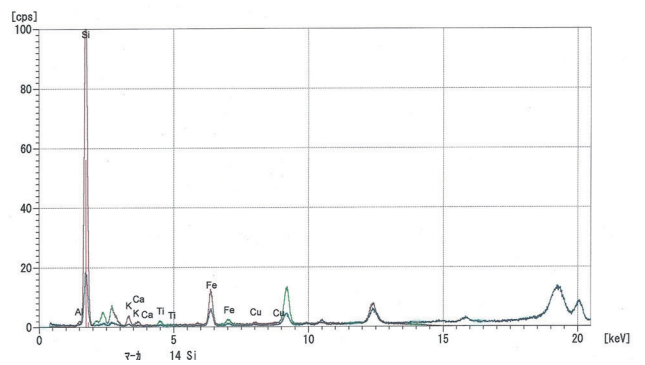
No.278 スペクトル



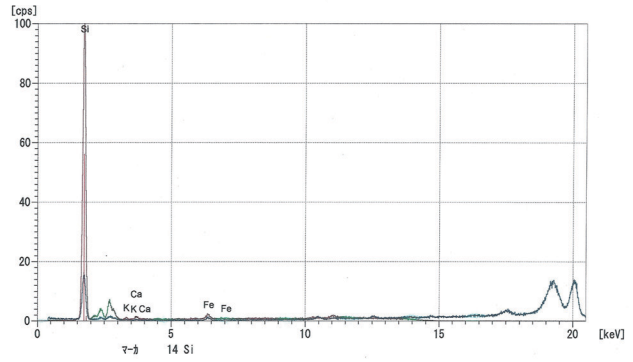
No.279 スペクトル



No.280 スペクトル



No.281 スペクトル

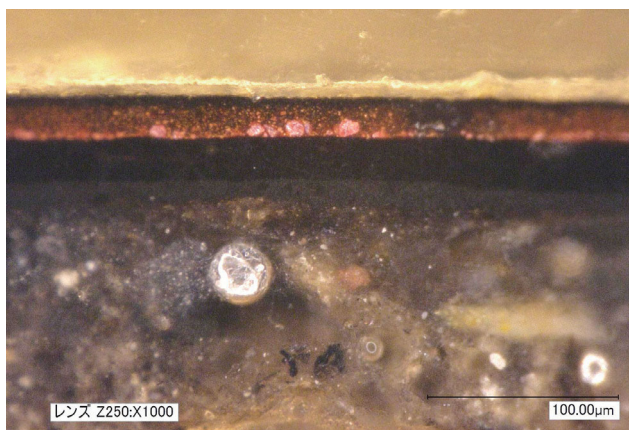
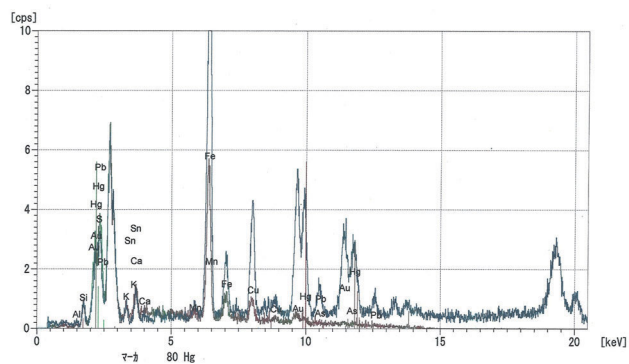


No.282 スペクトル

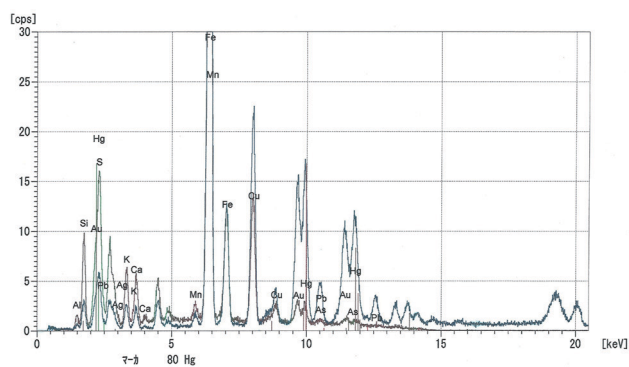
表3：玉類蛍光X線分析結果一覧表

No.	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Mn ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	BaO	PbO
265		100.0											
266	3.3	58.3	1.3	1.5	1.4	0.3		0.7	0.1	0.0			33.2
267	1.4	71.8		0.3	0.7		0.0	1.9	1.1	0.2			22.6
268	1.1	51.0	0.9	0.0	0.6	0.3	0.2	5.2	0.9	0.0		0.0	39.8
269 木口面	2.1	54.4		0.3	0.5	0.4		0.8	0.3	0.0		0.0	41.2
269 胴側面	2.0	61.7		3.1	0.7			0.6	0.4	0.0			31.6
270	2.0	54.9	2.0	2.8	0.9	0.1	0.1	1.7	0.5	0.0			35.0
271	2.6	65.7		1.4	0.8	0.2		1.7	0.2	0.0		0.0	27.5
272	2.3	39.9	5.1	5.9	0.8	0.2		1.9	0.1	0.0			37.8
273	0.0	93.9		0.0	0.4		0.0	1.4	1.3	0.0	0.0		2.9
274	1.6	66.4		0.5	0.4	0.2	0.0	0.8	0.1	0.0			30.0
275	1.8	70.3	0.0	0.5	0.5			0.4	0.1	0.0			26.4
276	1.7	68.6		0.6	0.6	0.0	0.1	0.6	0.0	0.0			27.7
277	2.4	65.9		1.1	0.5	0.4	0.1	2.3	0.1	0.0			27.1
278	2.6	73.9	0.0	0.7	0.5	0.3	0.1	0.9	0.1	0.0			21.0
279		99.7		0.2	0.1			0.1					0.0
280		99.7		0.2				0.1					0.0
281	1.8	96.9		0.5	0.2	0.1		0.5	0.0				0.0
282		99.6		0.1	0.1			0.1					0.0
269 (東理)	2.3	44.1		4.2	0.5		0.0	0.8	0.5	0.0			46.7
271 (東理)	4.1	39.7		2.5	0.4		0.1	2.2	0.3	0.1			49.8
272 (東理)	1.4	38.8		5.1	0.3		0.1	5.3	0.1	0.0			45.2

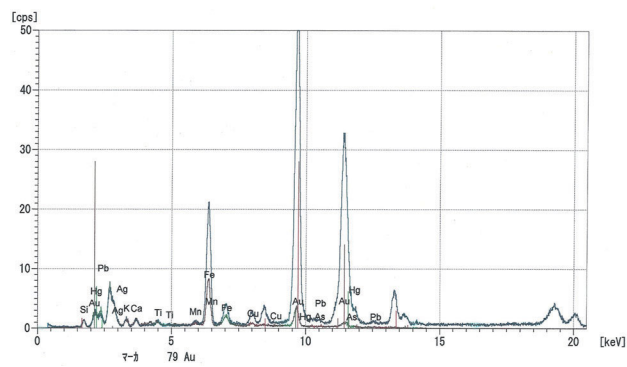
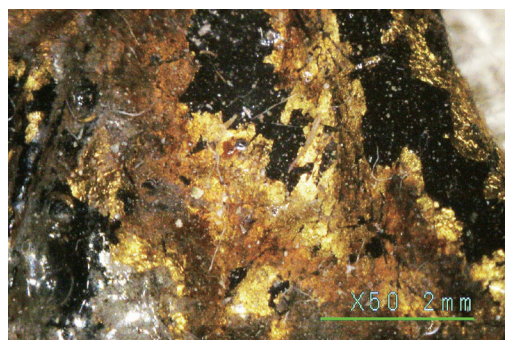
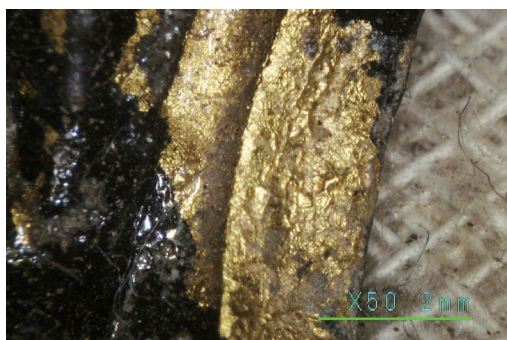
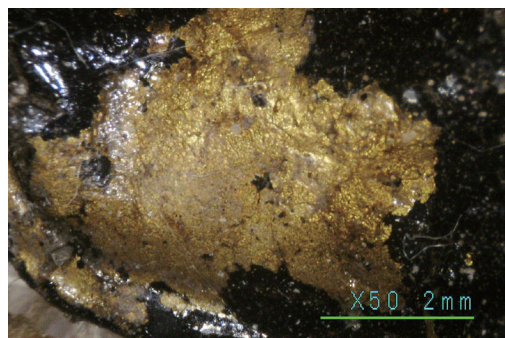
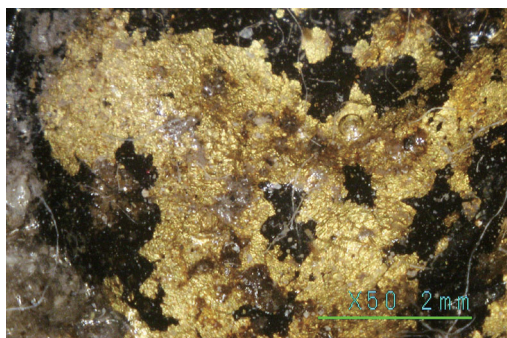
【漆製品】 蛍光X線分析・漆塗膜断面観察結果一覧



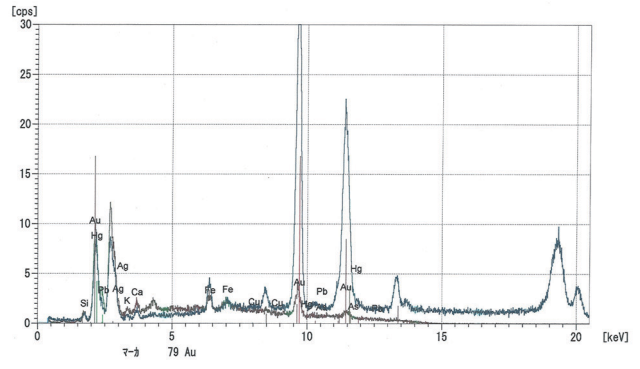
No.283 スペクトル・漆塗膜断面



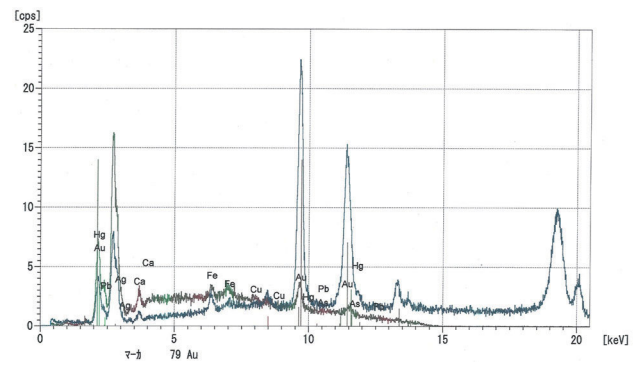
No.284 スペクトル



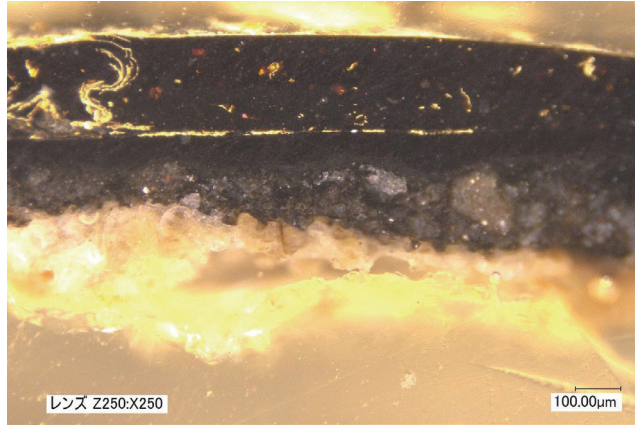
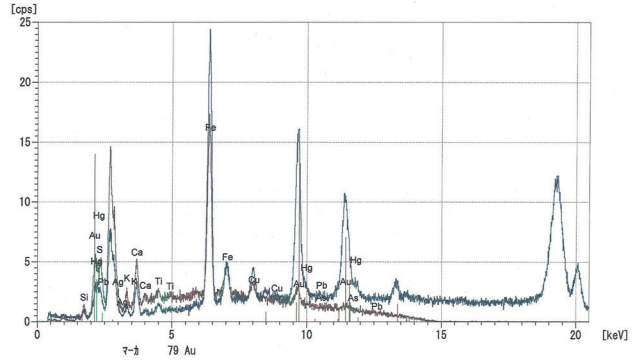
No.285 スペクトル・顕微鏡写真



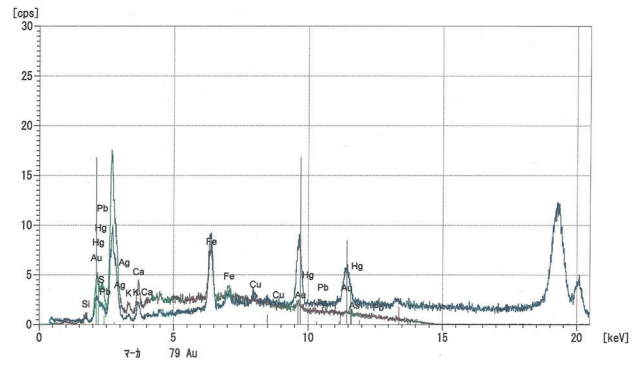
No.286 スペクトル



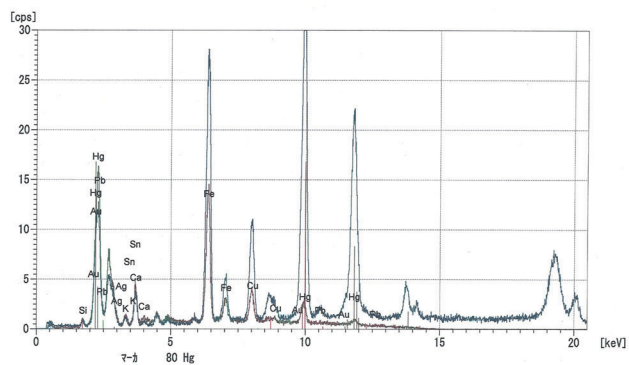
No.287 スペクトル



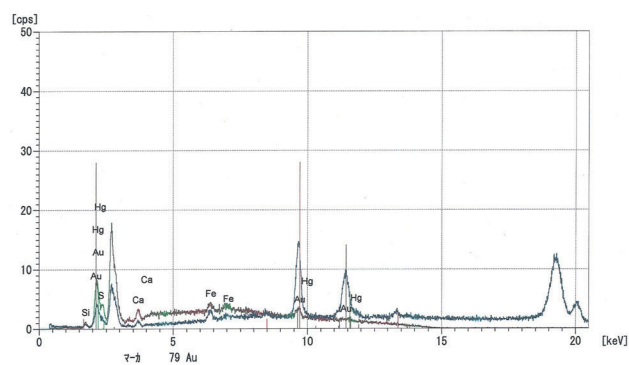
No.288 スペクトル・漆塗膜断面



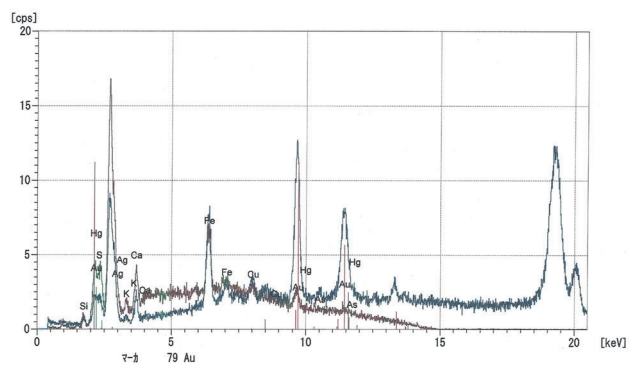
No.289 スペクトル



No.290 スペクトル



No.291 スペクトル



No.292 スペクトル



No.293



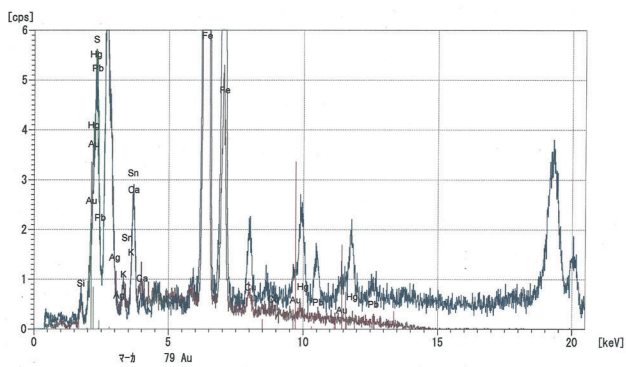
No.294



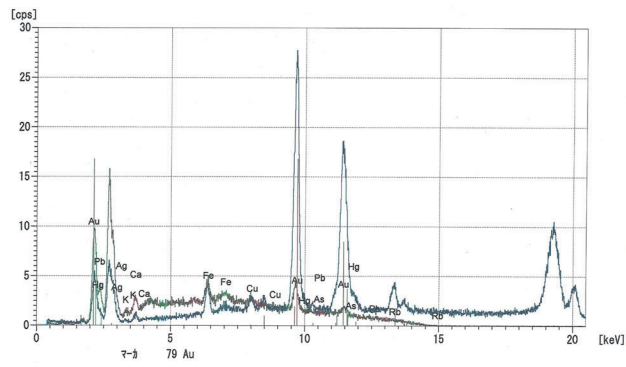
No.295



No.296 スペクトル

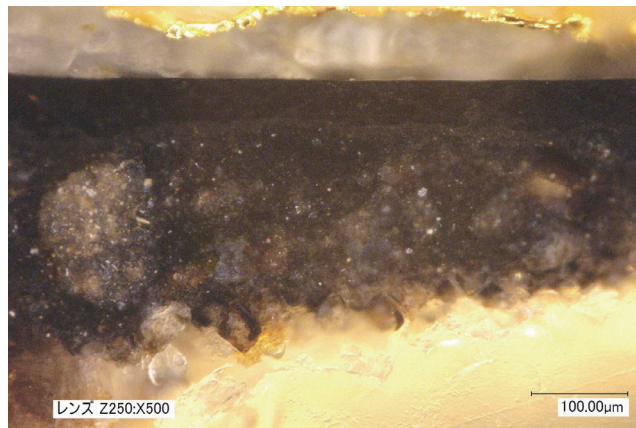


No.297 スペクトル

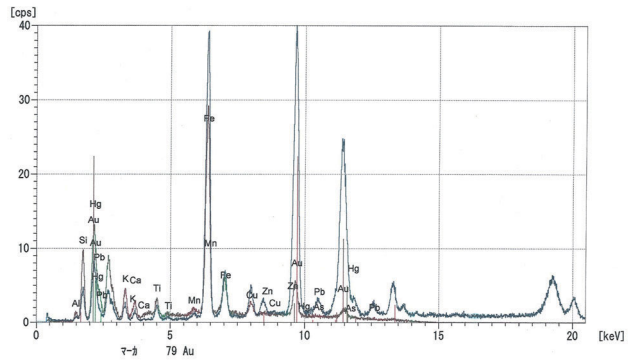




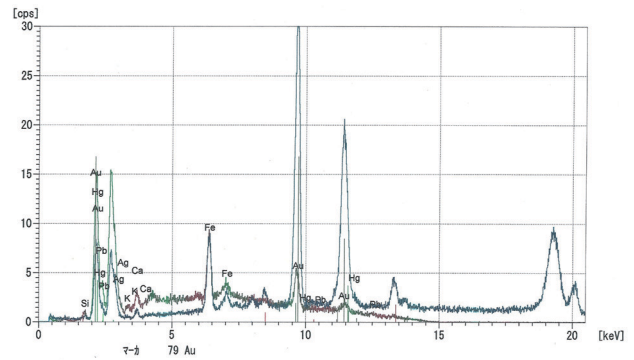
No.298 漆塗膜断面

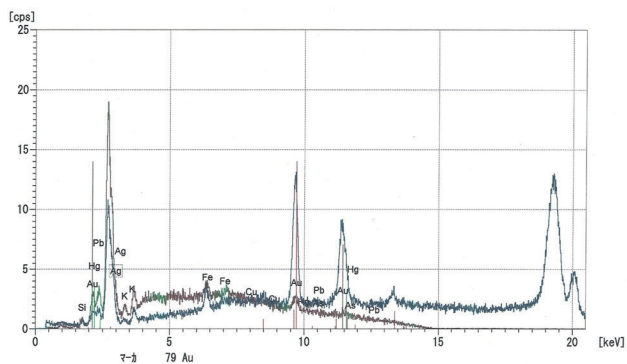


No.299 スペクトル

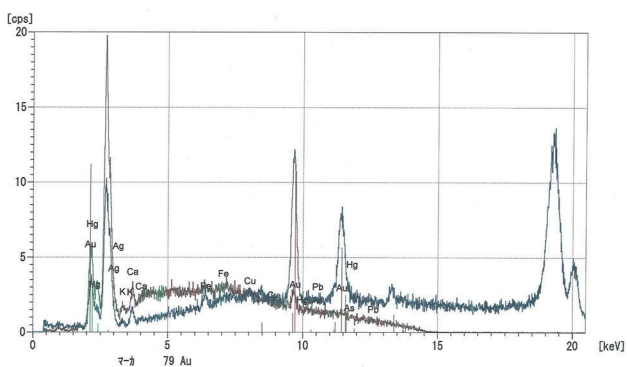


No.301 スペクトル





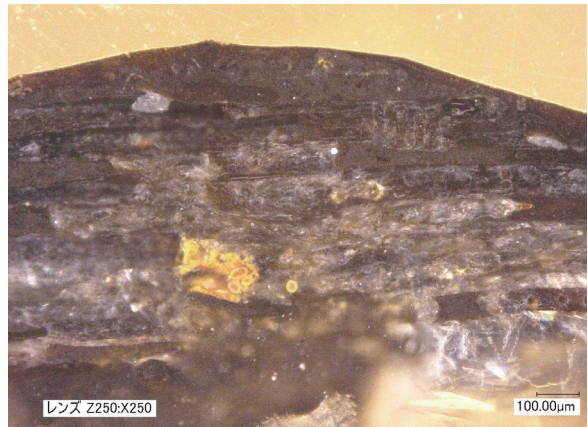
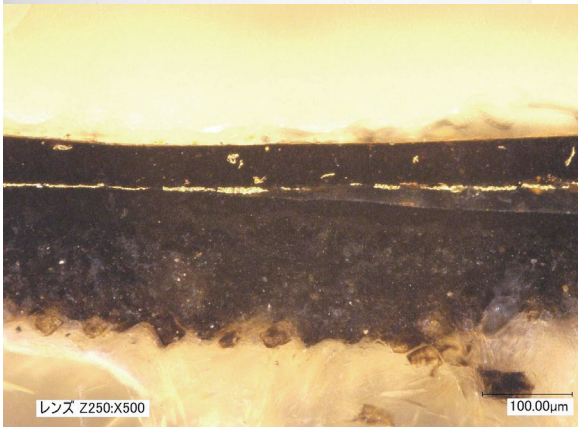
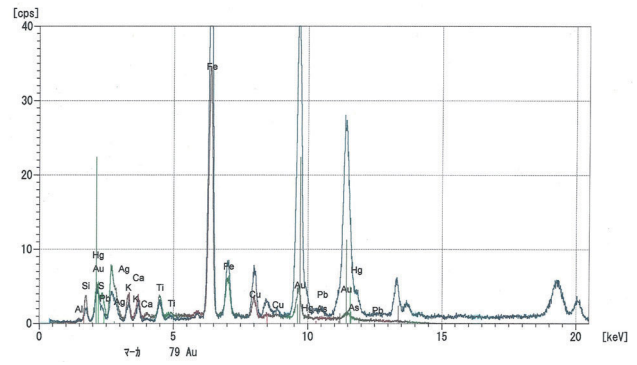
No.302 スペクトル



No.303 スペクトル



No.304 漆塗膜断面



No.305 スペクトル・漆塗膜断面



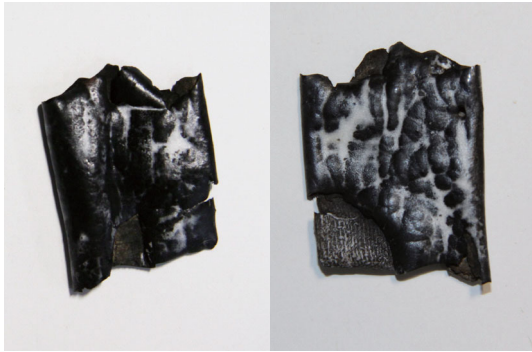
No.306



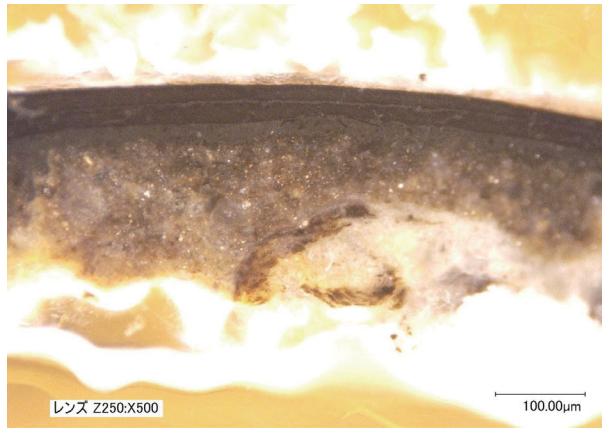
No.307



No.308



No.309 漆塗膜断面



No.310 スペクトル・漆塗膜断面

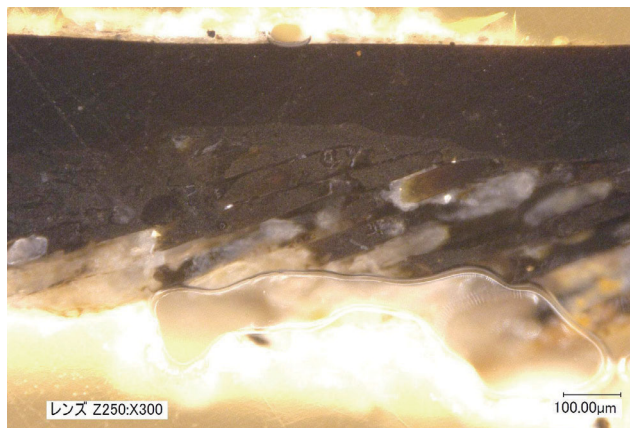
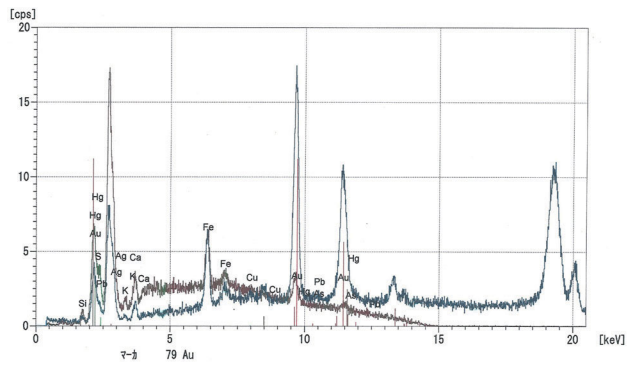


表4：漆製品金箔箇所蛍光X線分析結果一覧表（％）

No.	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	Mn ₂ O ₃	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	As ₂ O ₃	SnO ₂	Ag ₂ O	Au ₂ O ₃	HgO	PbO
283	11.1	33.4	10.7	5.9	6.3	0.6		16.5	2.5		0.4	0.0		7.8	4.6	0.1
284	9.6	32.3	12.6	3.6	2.5	0.4		23.0	3.8		0.5		0.0	6.7	5.1	0.1
285		22.9		6.1	4.8	0.5	2.1	14.3	0.6		0.2		0.3	48.1	0.0	0.0
286		25.0		3.7	8.3			3.9	0.0		0.0		0.6	58.5	0.0	0.0
287					12.3			3.7	0.1		0.0		1.2		1.1	0.0
288		21.7	5.0	5.0	13.9		2.7	26.8	1.4		0.2		0.0	22.6	0.7	0.0
289		31.5	0.0	8.2	21.3			17.9	1.1		0.0		0.9	19.0	0.0	0.3
290		12.5		3.4	13.5			23.9	4.8			0.1	0.0	3.0	37.4	1.2
291		25.1	15.1		15.3			3.7						40.8	0.0	
296		11.8	16.5	1.5	5.7			60.4	0.7			0.0	0.0	0.7	1.9	0.8
297				2.9	10.2			6.4	1.1		0.0		0.0	79.0	0.0	0.0
299	13.0	51.6		4.3	1.9	0.1	1.8	12.3	0.6	0.0	0.0			13.8	0.0	0.7
301		10.5		2.3	7.6			12.2					0.0	67.4	0.0	0.0
302		32.6		14.6				5.9	0.1		0.0		1.5	45.2	0.0	0.1
303				9.3	25.2			4.0	1.1		0.0		2.2	58.1	0.0	0.0
305	7.2	26.6	1.3	4.9	4.4		3.1	24.0	1.6		0.2		0.0	26.1	0.5	0.0
310		24.9	0.0	5.2	13.4			11.9	0.3		0.1		0.9	43.3	0.0	0.0

表5：漆塗膜構造一覧

No.	塗膜の塗り構造
283	サビ下地→黒褐色系漆→赤褐色系漆→金箔
284	木地→布着せ補強→サビ下地→灰スミ漆→赤褐色系漆→金箔
285	木地→灰スミ漆→赤褐色系漆→金箔
286	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆→金箔
287	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆
288	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→金箔→金粉混入の赤褐色系漆
289	木地→サビ下地→灰スミ漆→赤褐色系漆（金箔入り）
290	木地→布着せ補強→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
291	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
292	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→金箔
293	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆
294	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
295	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
296	木地→布着せ補強→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
297	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→金箔→金粉混入の赤褐色系漆
298	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
299	サビ下地→黒褐色系漆→金箔
301	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
302	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
303	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
304	木地→布着せ補強→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
305	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→金箔→金粉混入の赤褐色系漆
306	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
307	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆
308	木地→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆
309	木地→布着せ補強→サビ下地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆
310	木地→灰スミ漆→黒褐色系漆→黒褐色系漆→金箔

はじめに

本報告では鳥羽離宮金剛心院跡から出土した卒塔婆、呪符に対して樹種同定及び、赤外線による写真撮影を実施し、その調査結果から木材の利用傾向と墨痕の残存状態について述べる。

1. 樹種同定の対象試料と方法

樹種同定の対象試料としたのは、鳥羽離宮第97次調査において池14から出土した卒塔婆12点（No.311～322）及び、溝40から出土した呪符1点（No.323）の計13点である。

同定には、試料の木口、柾目、板目の三面から剃刀を用いて切片を切り取り、生物顕微鏡（Nikon社製SMZ-10）で観察して行った。但し、試料は既に保存処理（高級アルコール含浸法）が施された状態であったため、採取した切片をメタノールに浸漬し、細胞内の高級アルコールを溶出させた後、観察を行った。また、切片についてはガムクロールに包埋し、永久プレパラート（木材組織標本）とした。

2. 樹種同定結果

同定の結果、対象とした全ての試料がスギであると判断した。代表してNo.317の切片顕微鏡写真を図1に示し、その特徴について述べる。

構成細胞は仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる。木口面の切片は1年輪分で上部の晩材部は幅が広く、移行はやや急である。樹脂細胞については晩材部付近に確認できる。柾目面では、中央やや上にみられる放射細胞内部に典型的なスギ型分野壁孔が1分野につき2～3個確認できる。また、縦に伸びる仮道管内には有縁壁孔の正面が一行に並んでみられる。板目面では有縁壁孔と放射細胞の断面がみられ、放射細胞の多くは単列で2～10細胞高である。

スギは一属一種の日本特有の常緑針葉樹であり、建築材や船材、下駄、箸、経木などによく用いられる¹⁾。本例のように、卒塔婆や呪符の材としての利用も一般的な選択といえる。

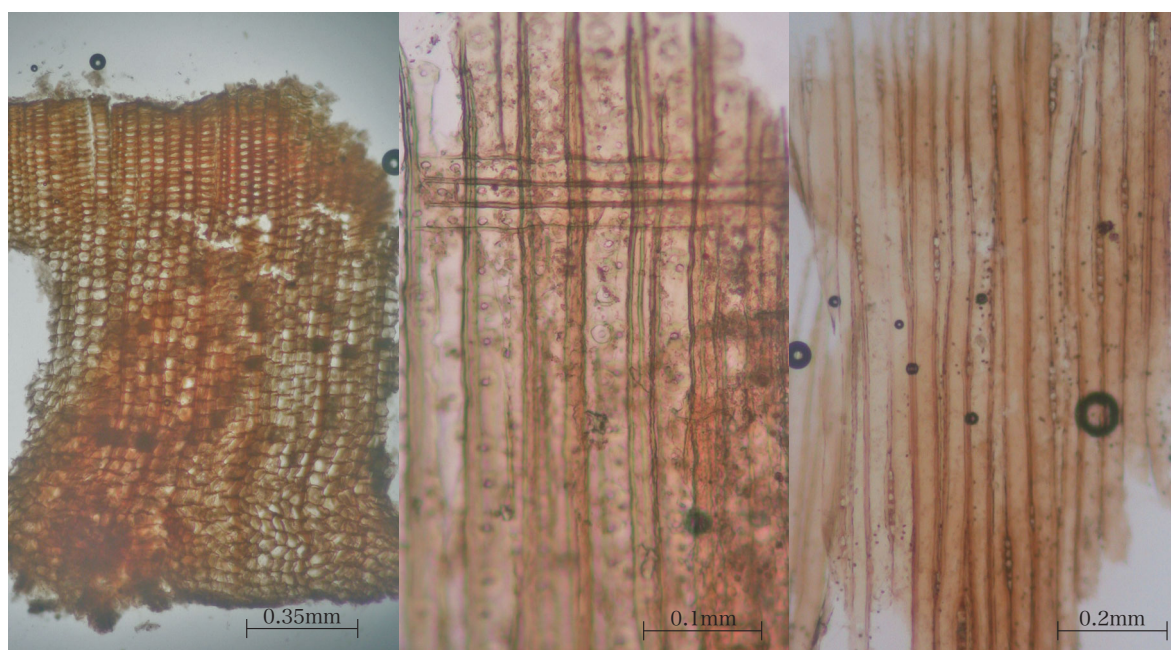


図1. No.317切片顕微鏡写真（左から木口、柾目、板目）

3. 赤外線撮影

卒塔婆、呪符の墨痕は肉眼で全容の把握が困難な状態であるため、赤外線撮影により僅かに残された墨痕を可視化し、その遺存状態を調査した。対象としたのは前述の13点であるが、内8点は出土時及び、今回の調査においても墨痕が認められなかったため、出土時に墨痕が確認されている5点（No.311、312、319、321、323）について記す。撮影は龍谷大学文学部北野信彦研究室に依頼し、実施した。

4. 赤外線撮影結果

以下に可視光による撮影写真と赤外線撮影による写真を示し（左：可視光、右：赤外線）、調査結果について述べる。

No.311（図2）、No.319（図3）の2点には仏が描かれており、No.319は空輪・風輪が墨で黒く塗りつぶされていたことが明らかになっている²⁾。現状の肉眼観察では、No.311に墨痕を確認することはできず、No.319も一部に墨の残存を認める程度である。赤外線撮影の結果、No.311は光背の一部を微かに確認できたが、仏本体の墨痕は確認できなかった。また、No.319については描かれた仏を概ね確認できたが、出土時と比較すると消失は著しい。

No.313（図4）は、風輪が墨で塗りつぶされた卒塔婆である²⁾。現状では肉眼で墨痕を確認

することはできないが、赤外線撮影の結果から、僅かに墨の残存を確認することができた。

No.321（図5）には梵字が確認されているが²⁾、今回の調査で確認することはできなかった。

No.323（図6）は、肉眼観察でも墨書された文字が概ね認識できるほど遺存状態が良く、既報告の釈文では「物忌咄天罪急々律〔令カ〕」とされている²⁾。今回の赤外線撮影の結果からは、出土時に不明瞭であった「令」の断定には至らなかったものの、「律」の上に書かれた「如」を新たに確認し、「物忌咄天罪急々如律□」と読み取ることができた。以上の結果、呪符全文については「物忌咄天罪急々如律令」であったものと考えられる。

[註]

- 1) 島地 謙、伊東隆夫『図説木材組織』地球社、1996。
- 2) 前田義明ほか『鳥羽離宮Ⅰ 金剛心院跡の調査』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2002。



図5. No.321



図2. No.311



図3. No.319



図4. No.313



図6. No.323

平成 28 年度 京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書
鳥羽離宮金剛心院跡出土品

発行日 2017年3月31日

発行 京都市文化市民局

住所 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488

編集 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 株式会社北斗プリント

